
ただひたすらに自由を求めて

闇桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただひたすらに自由を求めて

【Nコード】

N9805C

【作者名】

闇桜

【あらすじ】

ある者に自由を奪われてしまった旅人、カイ。そんな彼の周りに彼を支えるように仲間が集っていく。さて、そんな彼の運命の結末とは……………あらすじを改正しました。

序章

あなたの最後の願いは何ですか？

無機質な、水晶が出したような声。

俺は真っ白な空間にいて、立っているのか寝転んでいるのか分からない。

この空間には平衡感覚がない。

俺は問かけられる。それに値する答えを探す。

富はいらない。不死もいらない。

この問の答えはただ1つ。

「俺の願いは……」

序章（後書き）

初めまして。闇桜です。

作者の都合上更新が遅いのですが、精一杯がんばるので、これから
よろしくお願いします！

1章 〱 森〱 (前書き)

序章とは全く関係ない場所から始まりますが、気にしないでください。

1章 森

森

静かに佇む大きな森。

夜の闇に、その森を走る大型犬のような動物と、それを追いかけるフードを被った男がいた。

その速さは普通の犬よりも早く、普通の人が全力で走ってもあつという追いつかれてしまうほどの速さだった。

男が犬を追っているらしく、徐々にその差が縮まっていった。

「やっと追いついた」

男は追いつくとゆっくりと拳を構えた。同時に犬が唸り、飛びついてくる。

男は焦らずに突進を見切った。なるべく少ない動作で避けると反撃しようとする。

犬はそれを見越して距離をとる。が、すぐに男が距離を詰め、その行動は無駄に終わる。

犬が男の首に噛み付こうとした。しかし、その隙を見逃さず、犬の腹に正拳突きを放った。

犬が5 mほど先に吹き飛ばされる。地面に激突した犬は、痙攣を起

こしていた。

痙攣が終わったと思うと、大きな犬の姿が変わっていき、人の形となった。それとほぼ同時に黒い影が浮かび上がってきて男を襲い始めた。

「やはりコイツが犯人か。やっとぼろを出したな。消えろ。『結』」

男が小さく言うと、黒い影が結界に囲まれた。次に男が『浄化』と言うつと、黒い影が空気に溶け込むように消え去った。

突如、近くから眩しい位の光が発生した。その方向を見ると、さつき黒い影と分離した人がいた。

その人は、先程の大きい犬よりずいぶん小さい、11か12位の少女だった。

少女の背中から光が発生していた。が、すぐに消えてしまった。

1章 〱森〱（後書き）

こんにちは。闇桜です。

この物語の主人公の名前はいまだに出てきていません。……という

か、出せませんでした。すみません

一応次話で登場させる予定です！

では、また会いましょう。

1章 くカイとレイナく

く出会いく

男が町に帰ったのは明け方だった。とりあえず宿に戻って先ほどの少女を寝かせた。

特にやることも無かったので、買い物に行った。これからこの村を発するので、必要な物を買出しに行った。

昼ごろになって買い物も終わり、宿に戻った。扉を開けると、あの少女はまだ眠っていた。

このままでは、何故取り付かれていたのかを聞き出せないなので、荷物の整理をしながら起きるのを待つことにした。

整理が終わって数分すると、少女が目を覚ました。が、目を覚まして目の前に知らない男が立っているから怯えているようだ。

「安心しろ。俺はお前に危害を加えない。お前は悪霊みたいな物にとりつかれていたんだ。

その理由が分かるんだったら教えてくれ。」

少女は少しずつ思い出しながら話した。話し終わると怖かったからなのか、少し震えていた。

彼女は1週間前にあの森で散歩をしていたら、いきなり誰かに殴られ、気絶をしたそう。そこからの記憶が無く、気がついたらここにいたらしい。

「……なるほどな。教えてくれてありがとう。で、お前はこれからどうすんの？」

「あの、お前じゃなくて、レイナって名前があるんでそっちで呼んでほしいんですけど。あと、あなたの名前はなんていうんですか？」

「俺か？カイ「ストール」レッドだ。カイとでも呼んでくれ。とりあえず飯にしないか？
腹が減ってるんだ」

2人は宿屋の食堂に行って昼飯を食べた。カイの食べた量は普通の人の5人前くらいあったので、宿屋の主人とレイナは驚いていた。

レイナは先に食べ終わったので、部屋に戻っていた。しばらくすると、部屋の中に誰かが入ってきた。

「あの……もしかしてカイさん？」

目の前にいるのは赤い右目と黒い左目の、長身の男だった。

「そうだが。そういえば、まだ俺の素顔を見てないんだったな。珍しいだろう？」

「私、オッドアイの人初めて見ました。」

だろうな。とカイが軽く受け流し、本題に入った。もちろん、これからレイナがどうするかだ。

「1人で旅をしようかと思います」

「は？お前みたいな子どもが渡れるほど世間は甘くないぞ」

「見た目で判断しないでくれますか？これでも23なんですけど」

レイナは少し控えめに発言した。カイは驚いて言葉を失っていた。レイナをよく観察してみる。

黒髪のロングヘアーに紫掛かった目。かなり低い身長は150cmくらいだろう。

「今、何か失礼なことを考えてましたね？私、ドワーフなんです」

ドワーフ。あの種族は地中に村を作って暮らしている。が、彼女の両親は地上に住んでいるらしい。

「なるほど。とりあえず納得した。レイナはその姿でも一応23なんだな」

「一応じゃなくても23なんですけど。それじゃあ、カイさんについて行っちゃ駄目ですか？」

「途中までだったらいいが、結構危険なところもいくからやめておいた方が無難だぞ」

何か考えているらしく、彼女はしばらく俯いていた。やがて、何を思いついたのか、急に顔を上げた。

「ついていきます。でも、危ないと思ったたらすぐに抜けます。それでいいですか？」

「まあいいが。気をつけろよ。あと、武器は何かつかえるんだ？」

「今は短剣を所持しています。市販ですけどね。あと、一応弓矢もつかえます。持ってませんけど」

「じゃあ、それを使った自分で身を守る方法を教える。といあえず、今日は寝ろ」

「はい。明日からよろしくお願いします。」

ベッドが1つしかなかったので、レイナが使うことになった。カイは床に布を敷いて寝た。

しばらくすると、ベッドのほうから寝息が聞こえてきた。そして、そのうちカイも眠りについた。

1章 くカイとレイナく（後書き）

こんにちは。闇桜です。

やっと名前が登場しました。自由を求めて旅をするカイ。ここから出会っていく仲間とどのような話になるのかを見てくだされば光栄です。

誤字・脱字があれば報告をよろしくお願いします。

1章 〓 出発〓

次の日、カイは朝早く起きて追加で買い物をした。急遽同行人が増えたからだ。買った物は、食料、

生活用品、それと、薄めの黒い本を買った。それらの買い物済みと、レイナが起きていて、身支度を済ましていた。

食堂で朝食を食べ、早めに出発した。3時間ほど歩くと少し休憩できそうな岩場があったので、休憩をとった。

「疲れましたね、カイさん。ところで、カイさんの旅の目的ってなんですか？」

「……ある人を追っているんだ。色々あってな。」

ある人のところで、一瞬だが、カイの雰囲気が変わったような気がした。レイナは、そう思った。

しかし、これ以上聞いてはいけないような気がしたので、聞かないでおいた。

「レイナ、この本を今使ってくれ。」

カイの手にあるのは、早朝に買った黒い本だった。

「これはな、マジックアイテム魔法道具の1つ、ウィザード・ブック魔術師の黒本という本だ。簡単に言くと、個人の魔法取扱説明書。まあ、触ってみろ」

レイナは恐る恐る触れてみた。すると、一瞬だけ本が光を放って、また沈黙した。

「今のでこの本がお前の能力のほぼ全てを解読した。この本はお前専用だから、大事に持つとけよ」

「私専用なんですか……。ありがとうございます！」

レイナはその本を早速開いてみた。最初のページに使用方法、次のページからは魔法の才能や現在の

使える魔法、魔法の使い方などが書いてあった。

「なるほど。黒魔法は火・氷・風・土で、白魔法が回復と防御。あとは無所属魔法か。

魔力自体は少ないが、才能はあるみたいだから、修行すれば何とかなるだろう。

一応教えてやることもできるが、どれからはじめるんだ？」

カイは本の内容を大雑把に読んで、彼女の方を向いた。が、当の本人は何か納得していないようだ。

「……どうした？何かこの本に不満でもあったか？」

聞くのを躊躇していたが、そのうち何か思い立ったようにカイを見た。そして、彼女はこう言った。

——魔法に種類なんてあったんですか？

そこからかなのか……と、カイはため息をついて魔法についての説明を始めた。

1章 〓出発〓（後書き）

こんにちは、闇桜です。

やっとこの村を出発です。次回は魔法についての説明です。最近いいネタが思い浮かばないから、更新できるかな……
まあ、がんばります。

1章　魔法

「魔法には、いくつかの種類がある。まず、黒魔法。黒魔法は火・氷・雷・風・爆発・土・闇の7種類で、主に自然の力を使う。自然の力を使うのだから、吹雪の中で火や爆発の魔法は使えないし、逆に灼熱の中では氷の魔法は使えない。闇魔法は特殊で何所でも使えるが、昼間は威力が落ちて、日が沈むと威力が上がる。次に白魔法。この魔法は精霊等の力を借りる魔法で、回復・防御・光の3種類。光魔法は全部何所でも使えるけど、夜はその力が落ちる。しかも殆ど攻撃魔法がない。そして、無属性魔法。この魔法は何所でもいつでも関係なく使えて、攻撃魔法もあるが、魔力の消費量が多いのが欠点。だから連発はできない。黒魔法と白魔法には例外があつて、黒魔法には各属性ごとに、白魔法はまとめて1つだが、結晶石という物が存在する。これを持っていると、場所や時間に関係なく魔法を撃つことができる。」

「——まあ、こんな感じだ。他にもいくつかあるが、普通の人には使えないから話さなくてもいいだろう。とりあえず、実物を見せるぞ。火よ、彼の者を焦がせ、ファイア」

簡単な詠唱をしたすぐ後に、カイの手の平に焚き火の火の3倍くらい大きい火の塊が現れた。

レイナは、先ほどまで寝ぼけていた表情がすっかり消え、今度は驚きの顔になっている。

カイはそれを前方にある岩に放った。火が当たった部分は、黒くなっていた。

「いきなりできるかは分かんが、1回やってみろ」

いまいち自信無さげに頷いたレイナは、先程カイが使った詠唱を思い出し、唱えてみた。

「……火よ、彼の者を焦がせ、ファイア」

カイが出した物よりやや小さい火の塊が、レイナの前に出現した。指で目標の岩を指す。すると、自然に

火が飛んでいって、岩に当たった。

「1発で成功させたか。やはり才能はあるな。これから少しずつ魔法を教えていくから、

覚悟しといてくれ。そろそろ出発するぞ」

カイが立ち上がり、歩き出す。その後ろを自分が魔法を使ったことに驚いていたレイナが慌ててついていった。

1章　く魔法く（後書き）

こんにちは、闇桜です。

魔法の説明がしたかったがために作った場面です。

今回は…秘密ですが、一応次回で1章が終わります。
これからもよろしく願います。

1章 く野宿く

やはり1日で次の村に着くのは無理だったので、途中でテントを張って1晩過ごすことになった。カイが

テントを張っている間にレイナが夕食を作った。素早くテントを張ってレイナのいる場所に帰ると、いい

匂いが漂ってきた。もう殆ど出来上がっていたようで、レイナが暇そうに座っていた。

「スープか。良い匂いがしているな」

「もうじき完成するので待っていてください。そういえばカイさん、お父様とお母様はどうしているの」

「すか？カイさんのことを心配しているんじゃないですか？」

カイはただ黙っていた。質問に答えたくないようで、場の雰囲気が悪くなっていた。

やがてその雰囲気に耐え切れなくなったのか、レイナが言葉を発した。

「カ、カイさん。用意できましたよ。食べましょうよ、ね？」

そういったレイナはカイの前にパンの入った皿とスープを差し出した。

無言の食事が進む。しばらくすると、カイが口を開いた。

「さっきのことは気にしないでくれ。だが、今は話したくないんでな。話す時がくれば話すから、それま

で待っていてくれ」

「……分かりました。じゃあ、それまで待っています。ところで、スープの味はどうですか？美味しくて

きあがっていますか？」

カイは言葉を発さず頷いた。つまり美味しかったということになる。

無事にスープができたことに安心したのか、レイナは安心した顔をしていた。

食事が終わってから、朝早く出発することになったので、早めに寝ることになった。テントに2人分の

スペースがあったが、見張りも兼ねてカイは外で寝ることにした。レイナは疲れていたらしく、すでに眠

っていた。

周囲に敵がいなかったことを確認してから、敵に見つからないように境界を張った。この辺りの敵は弱いから

簡単な結界でもまず見つからないだろうと思っていた。

しかし結界を張っているときは眠ることができないので、結界の外に出て散歩をしながら辺りの魔物を蹴

散らそうと外に出た。

30分ほど歩くと敵に遭遇した。敵は狼ウルフのような魔物と、大きな鳥フ
エザのような魔物だっ

た。が、今日の前にいるのはその種族の中でも上級と呼ばれるラン
クが高い者たちだった。この辺りにい

るのは下級の魔物ばかりだったので、ここに上級の魔物がいること
はおかしいことになる。カイは何故上

級の魔物たちがここにいるのかを考えた。が、その可能性は1つし
か出てこなかった。

それは、カイが追っている者の差し向けた偵察用の魔物だという可
能性である。上位ランクの魔物を偵察

に使うのもおかしい話だが、その者の实力はかなりの物なので否定
ができなかった。

ここでこいつらを逃がして報告されると厄介なので、全て倒すこと
にする。まず、剛力の術をかけて、力

を上げる。同時に俊敏の術を使い、素早さを上げる。そして、一瞬
で敵との間合いを詰め、正面から蹴りを

いれる。それはウルフに直撃し、一撃で倒せた。しかしその隙にフ

エザーが仲間を呼びにいった。

追いかけてみるとそこには2匹のウルフと、先程のフェザーとは他にもう1匹いた。フェザー2匹が自ら

の羽を硬くしてカイに向かって飛ばしてきた。それは鋼鉄のように硬く、近くにあった岩さえも大きく削

った。その攻撃は何とか避けたが、すぐにウルフが攻撃してくる。避けてもすぐに攻撃が繰り返される

連携攻撃にカイは鬱陶しいと思ってい、鳥たちに手をかざす。

「まとめて落ちろ。クロスバーニング」

短く唱えると、フェザー2匹を中心に大きな爆発が起こった。急に発生した爆発に飲み込まれた2匹の

フェザーは、そのまま地に落下して動かなくなった。さすがに相手が上級の魔物なのでこちらも上級の

魔法を使わないと倒しきれない。

残りは2体。ウルフたちは勝ち目が無いと判断したのか、後ずさりをして、走り去っていく。彼らはその

まま逃げ切れる……はずだった。

しかし、現実とは違っていた。少し前に自分より少し離れた位置にいた男が前に立っていた。2匹の顔には

恐怖しか残っていなかった。

「……逃がさんといっただろう。クロスファイア」

カイは火の上级魔法を使った。その巨大な炎の塊は、ウルフたちを飲み込み、跡形も無く消した。

これからの旅は、苦勞することが多くなるな……

夜の草原を散歩しながらカイはそう思った。

1章 く野宿く（後書き）

こんにちは、闇桜です。今日は休みの日だったので、寝坊しました。さて、これで1章が終わりました。しかし、まだ始まりということで謎が多いです。これから少しずつ透明化していきます。
2章予告です。また1人仲間が増えます。

2章 　　到着

カイとレイナが前の村を出発して3日……

ようやく次の町に着き、今はカイがレイナにこの町について説明していた。

「この町の名前はルル。この町は前回の町より規模が大きいから、酒場とか依頼所がある。

依頼所ってのは、その町の周辺や国単位で困っていることを強い奴を雇うことができる場所だ。

いくつかのランクに分かれていて、E～Sまである。SSというランクもあるが、そんなのを

こなせるのは殆どいないから、認められた人だけが見ることが出来る」

「じゃあ、私も依頼を受けることができるんですね」

「ああ、できなくもないが……お前はまだ依頼を受けるにはその実力が達していないからな。まだしばらく

くやめておけ。少なくとも1つ位は無詠唱魔法を使えるまではやめておいたほうがいいだろう。」

「……無詠唱魔法ってなんですか？」

「言葉通り詠唱せずに魔法を使うことだ。これがあると時間の短縮につながるからな。慣れれば自然と使えるようになる」

「便利ですね」

「むしろ覚えていないと不便だな。相手に隙を作ることになるし。詳しい説明は後ですから、とりあえず宿に行くぞ」

カイたちは宿に着き、6日間宿をとることにした。その代金をカイが支払い、部屋に荷物を置いた。

「さて、この町に6日間滞在するわけだが、俺は明日から3日間程出掛けるから1人で留守番していて

くれ。残りの2日は町でゆっくりするつもりだから、訓練は俺が帰ってきてからまたやるから、基礎訓

練だけ怠らなければ、後は自由にしていて良いからな。金も一応置いていくが、あまり無駄遣いするなよ。」

「はい、分かりました。無駄遣いしないようにします。ところでカイさん、その3日間って何をするのですか？」

「……秘密だ。」

レイナがしつこく何ですかー？とか、教えてくださいー！とかわめいていた様な気がするが、眠かった

ので、そのまま眠りにつくことにした。

2章 〓到着〓（後書き）

こんにちは、闇桜です。

少し魔法についての説明を加えさせていただきました。これでとりあえずカイが詠唱無しで魔法を使った理由がでてきました。

感想とか質問があつたら書いてくだされば光栄です。これからもよろしく願います。

2章 〓 無人〓

次の日、レイナがおきたときには既にカイはいなかった。もう出発したらしい。

レイナは特に買いたい物も無いと思っていたので、カイに教えてもらった魔法の基礎練習と

ウィザード・ブックで魔法の勉強をして、2日を過ごした。

そして、カイが帰ってくる予定の3日目。昨日は夜遅くまで本を読んでいたので、起きるのが昼ごろに

なってしまった。慌てて食堂に下りる。そこで宿の異変に気付いた。人の気配がしないのだ。

宿を取っている人が用事があつて全員外出しているのはおかしくは無い。しかし、ここの宿で

働いている人たちの姿も見当たらないのだ。レイナはひとまず宿から出て、人を探してみることにした。

しばらく探していると、突如人の悲鳴が聞こえた。急いで声のした場所まで向かってみた。そこには……

女性をその手に持った大きな猿エイフがいた。それも1匹だけではなく、3匹だった。1匹は女性を

抱えて去っていった。しかし、残りの2匹は違った。レイナのほう

を向き、襲い掛かってきた。

「これで倒れなさい！火よ、彼の者を焦がせ、ファイア」

レイナが作った火の塊は2つに分裂してエイプに衝突した。分裂して威力が多少落ちていても、少しは

効いていてもおかしくは無いはず。そう予想した。

しかし、現実とは違っていた。火の魔法があたった部分は黒く焦げることすらなく、まったく傷がついて

いなかった。

「嘘……なんで私の魔法が効かないの……？」

実際はエイプは火属性の攻撃に強いというだけだったが、そんな知識が無いレイナは、相手に魔法が効か

ないと思い込んでしまった。そして、この勘違いによってもう戦術が無くなった。今のレイナの武器を使った

戦闘の実力では、エイプ2体相手だと絶対に勝てないからだ。レイナは全力で逃げ出した。それをエイプ2体が追いかける。

元々体力があるほうではないので、10分しないうちに息があがってきた。それとは対照的にエイプ達は

まだまだ余裕そうな表情だった。

あと少しでエイプ達に追いつかれそうになってしまったので、急いで道を曲がった。

しかし、その先は行き止まりだった。振り返ると、エイプ達がいた。前にはエイプ、後ろには壁。今のレイナにとって絶望的な状況だった。

エイプが勝ち誇った表情で襲い掛かってくる。その恐怖に思わず目を瞑る。もうだめだ。レイナはそう

思った。しかし、

「伏せて！」

どこからか声がした。もはや自分では何もできなかったので、その声の指示通りに動く。すると、その

直後に頭上から何かが吹き飛ばされ、後ろの壁に叩きつけられるような音がした。

恐る恐る目を開けてみると、そこにエイプはいなかった。後ろを見ると1匹だけ倒されていたが、もう

1匹が見当たらなかった。もう一度前をみると、人がいた。男の子のような服装をしている女の子が

いた。空色の目に金髪がニーテールで、綺麗というよりはかわいいという表現がぴったりだった。

「あーあ。1匹逃げられちゃった。あなた、無事？怪我とかない？」

どうやらこの少女が助けてくれたらしい。

「助けてくれてありがとうございます」

「気にしないで良いよ。それより、あなたの名前って何？」

「レイナ」ロアです。レイナって呼んでください」

「ふーん。レイナちゃんかぁ。なんか仲良くできそうだね。よろしく」

その少女と握手をした。一区切りがついたところで、移動することにした。

「ねえ、レイナちゃんの家ってどこ？とりあえずそこに移動しようよ」

「私、この町の住人じゃないんです。今は宿屋に泊まっています。とりあえず宿屋に向かいましょうよ」

「ふーん、そうなんだ。分かった。じゃ、とりあえず移動しようか。敵が来たら大変だし」

レイナ達は宿屋に移動することにした。

見つかるかと面倒になったので、ゆっくり静かに宿屋へ向かって行った。

2章 〓 無人〓 (後書き)

こんにちは、闇桜です。

本当は明日更新するつもりだったのですが、事情により早めに更新させていただきました。

はたして謎の少女は敵か味方か。(レイナ助けたところで味方でしょ) 何者なのかは、次回ということ。

2章 〱マイヤ〱

誰もいない宿に着いたレイナ達は、レイナの荷物がおいてある部屋に移動した。

ここで、何かに気付いたように少女が喋り出した。

「そういえば、まだあたしの名前言ってなかったよね。マイヤークルスだよ。マイヤって呼んでね」

「わかりました。マイヤさん。」

しばらく雑談した後、話を本題に戻した。

「で、これからの行動だけど、とりあえずレイナちゃんの旅の仲間と合流してからどうするか決めよう」と

思う。でも、いつまでも待つわけにはいかないから、明日の昼まで待つことに――」

マイヤが話すのをやめる。と同時に刀を鞘から抜き、構える。

「誰かが近づいてきてる。一応レイナちゃんは下がって。」

レイナは静かに頷くと、後ろに下がった。この部屋に近づいてきているのが足音で分かる。

足音は扉の前で止まり、扉が開いた。それと同時にマイヤが剣を振り下ろし、そのまま攻撃が命中する

はずだった。しかし、その攻撃は成功しなかった。刀は指で挟まれて止められていた。

扉から入ってきた人物は刀ごとマイヤを吹き飛ばした。

「……マイヤ、途中で俺の気配に気付いたのはよかった。少しは上達したようだな。が、その時点で

この気配が俺だということに気づけ。少々手荒な歓迎だったな。ついでに言っておくと、足腰に力が

きちんと入ってない。基本の動作を忘れるな」

カイはフードの中から顔を出した。

「カイさん？」 「カイ兄？」

2人は同時に言葉を発し、カイの顔を見た後に互いの顔を合わせた。

「ねえ、レイナちゃん。レイナちゃんと旅をしている人って……」

「はい。そこにいるカイさんですけど、マイヤさんはカイさんを知っているんですか？」

「……話が盛り上がっているのは良いが、そろそろ現状を説明してくれ」

その一言でとりあえず雑談が終わり、本題に入る。主にマイヤが話し、町人が魔物に連れ去られたという

話をした。一部始終を聞いたカイは質問をした。

「敵の戦力はどのくらいだ？」

「わからない。でも、唯一分かっていることは、あたしが追っているあいつがその組織のリーダーだってことだよ」

少しだが、マイヤの声に怒りが混ざっていた。

「……そうか。俺は町人を助けに行くが、お前らはどうする？」

「私はいきます。お世話になった宿の人たちも助けたいですから」

「真面目だね、レイナちゃんは。小さいのに偉いね。あたしも行くよ。今度こそ決着をつける」

「それは別にかまわんが、一つ間違えているようだから言うておく。レイナはそう見えてもお前より年上だ。」

……場に沈黙が訪れた。マイヤはレイナを見る。どうみても自分より背が低くて年下に見える。

「私、ドワーフなんです。ちなみに、年齢は23です」

「ほへー。知らなかった。ごめんね、マイヤちゃん。頑張って町人助けようね」

「うう。またですか……。」

また雑談が始まった。このままだと声がうるさくて敵にばれるような気がしたので、声を小さくするように

注意をした。

「敵から人を奪還するのは夜だ。そのほうが奇襲をかけやすいし、見つかりにくいからな。それまで体力回復も兼ねて寝てろ」

声を低くして喋っていたレイナとマイヤだが、カイのその一言で各自でベッドに入ってしまった。

2人が眠ったのを確認すると、カイは1人で宿を出て行った。

2章 〽マイヤ〽（後書き）

こんにちは、闇桜です。

更新完了です。次回からは町人の奪還が始まります。カイが追っている人……はまだ出ません。いつ出そうかな、と想像したりします。

では、また次回です。

2章 く夕方

日が沈みかけた頃、2人はカイに起こされて目を覚ました。

「敵の場所はここから北東に約3km離れた場所にある洞窟。そこに人の気配が多かったから行って見たが、当たりだった。」

レイナは驚いていたが、マイヤはとても落ち着いていた。

「意外と近場にあつたね。敵の数は？」

「エイプが20匹のウルフ35匹、フェザー18匹で中級のウルフが15匹。人間はざっと見てきたが、

奴を含めて6〜7人程度だ。組織としては小型から中型にかけての割と小さめの組織だが、奴を含めて

人間のほうの数人は普通の戦士や魔道士だと相手にならないくらいの実力を持つてる。そいつらが厄介だな。

それに比べてこっちの勢力は3人。数では圧倒的に不利だな」

「……数では、って言いましたよね、今。いくらなんでも無謀じゃないですか？」

敵の数を聞いて混乱しているレイナをマイヤが落ち着かせる。

「魔物の方は半分くらい片付けてきた。それに、3人で同時に中に入り、奇襲をかければ数は更に」

減るはずだ。」

カイは当然のように言う。その様子を、やっぱり、とあきれたような顔をマイヤが見ていた。

「そうなんですか。じゃあ安心ですね……じゃなくて、何やってきたんですか、カイさん？あなたは自分

で寝とけって言うておいて自分は寝てないんですか！それ以前に、半分ってあなた何者ですか！！」

「俺はカイ。ただの旅人だ。さっきは敵の偵察をかねてある程度の敵の戦力を剥いできた。ちなみに俺は

5日は徹夜で過ごすことができるから、今は睡眠はいらない。これから行っ奇襲について他に何か質問はあるか？」

「カイ兄、多分無いと思うよ。レイナちゃん、とりあえず落ち着こうね。カイ兄は人間から逸脱している

って言われてもおかしくないくらい頑丈だから、そのくらい当たり前だから」

カイは、いくつかマイヤが失礼なことを言ったが、まんざら外れてはいないので無視することにした。

「……おいて行くぞ」

その一言に気付き、レイナとマイヤが慌ててついてくる。マイヤは

ともかく、レイナは危ないので本気で

おいていこうかと思ったが、おいていたら勝手に飛び出して迷子になるだけだと思い、連れて行くこと

にした。少々不安をもつてもいいはずだが、もともとそういう思考をほとんど持っていないのでカイはその

場の状況で考えよう、と思っていた。

2章 く夕方（後書き）

こんにちは、闇桜です。

感想書いてくださった方、ありがとうございます。これから何かし指摘等がありましたら、よろしく願いします。

2章 く侵入く

30分ほど歩くとその洞窟が見えてきた。歩いている間に、カイはレイナに魔法を教え、レイナは

それを練習しマイヤはほとんど黙っていた。

「……よし、予定通りまとまって行く。先頭は俺、中央にレイナ、最後尾がマイヤだ。何かしら

しくじった瞬間に全てが終わりだと思え」

「わかりました」

「……了解」

まずはカイが飛び出て、見張りを倒す。全員倒れたのを確認してから、レイナ、マイヤの順に飛び出す。

「出だしは上々だな。この洞窟にはいくつかトラップも仕掛けてあるだろうから、気をつけ——」

カイが言い切る前に、ガコツ、という何かが押されたような音がした。その方向を見ると、マイヤの足が

あるところが、四角くへこんでいた。

「……言っているそばから踏んだな。マイヤ」

「……すみません」

洞窟の奥から何かが転がってくる音がした。音が凄いい勢いで近づいてくる。それは、大きな丸い岩だった。

「火よ、彼の者を焦がせ、ファイア」

カイが火の初級魔法を使う。しかし、さほど速度が落ちるわけでもなくむしろ熱気をまとって転がってくる。

「氷の魔法を頼む」

「分かりました。ええと……彼の者を氷の力にて凍らせたまえ、アイス」

氷が岩を包む。急激に冷やされた岩は、その温度変化に耐え切れず、脆く崩れ去った。

トラップを回避することに成功はしたが、時間が少しかかった挙句、派手な行動で敵に侵入したことがばれただろう。

「急ぐぞ、多分もう侵入したことが伝わっている」

カイが少し急ぎ足になる。レイナとマイヤはそのカイの後をついていった。

侵入から30分ほどたった。今のところ敵とは遭遇していないが、

トラップには引つかかっていた。

マイヤが引つかかったのは最初のも物だけで、残りは全てレイナが踏んでいた。横の壁から槍が出てきたり、天井から剣が切先を向けて落ちてきたり

と、面白いくらいにトラップに引つかかるカイ達は敵にとって笑える存在だっただろう。事実、毎度のことトラップから2人を守っているカイは

いつにも増してあきれ顔になっていた。

「……疲れた」

「う、ごめんなさい」

「レイナちゃんは悪くないから気にしないほうが良いよ。あたしも踏んだし」

そんな会話を繰り返しながらカイ達は奥に進んでいった。この周辺にトラップのような物はなさそうだったので、油断をしてしまった。

突如、カイとレイナが歩いているところに落とし穴が出現した。深さは分からないが少なくとも5m以上はあるだろう。周りが暗いこともあって底が見えなかった。

つかむものがなく、カイとレイナは落ちていく。2人が闇で見えなくなるのと、床が閉じていった。と、同時に、マイヤは背後に人の気配を感じた。

素早く振り向くと、そこには魔物と大男が1人がいた。エイプ2匹とウルフ5匹、フェザー3匹、中級のウルフが1匹いて、一番奥に大男がいた。

「……嬢ちゃん、どこから来たか知らねえが、諦めたほうが身のためだぜ。嬢ちゃん1人とこいつらじゃ勝負にならないからな」

「やってみなきゃわからないと思うよ」

マイヤは剣を鞘から抜く。そして、敵の中に突っ込む。その速さは、常人を軽く凌駕していた。近くにいたウルフ2匹を同時に切る。

いくら級位が一番下の魔物でも女の子に一撃で倒されるほど弱くは無い。仮にできたとしても、同時斬りは威力が落ちる。しかし、マイヤは両方とも1撃で両断していた。

「なっ！！……そうか、嬢ちゃんは気術使いか」

——気術。人間が持っている魔力とは別のエネルギーだ。魔力は精神力だが、気は生命エネルギーや気配を使った技といえる。

直接生命エネルギーを使うわけではないので使い切ったら死ぬということは無いが、間違いなく意識を保つことはできないだろう。

先程マイヤが使ったのはスピードを上げる術、俊敏の術と筋力を上げる術、剛力の術を使ったから2匹を同時に一撃で倒すことができた。

「なるほど、こりゃ油断ができないわな。魔物ども、遠慮なしでやっちなえ！」

魔物たちが一斉にマイヤに向かってくる。マイヤは最初に近づいてきたエイブを斬る。斬った直後の小さな隙をつかれてもう1匹のエイブに投げ飛ばされた。

身体を壁に強打してしまう。そこを更に2匹のフェザーが自分の羽根を飛ばしてきた。

マイヤは体制を整えながら剣に気を集中させる。

「仙風斬」

そう呟き、剣を一振りする。すると、マイヤの前方に強風が発生した。その強風により、尖った羽根が勢いを失い、やがて風に乗って再び逆方向に飛び始める。その羽根はフェザー2匹に直撃する。

2匹は少しもがくような動作をしてから、落下した。動く様子が無かったので、倒せたようだ。しかし、全て跳ね返せなかったらしく、マイヤの身体にも傷がいくつかついていた。

「剣気技も使えるのか。たいしたもんだ。しかし、それはどこで学んだ？そんな型、見たことが無いぞ」

——剣気技とは、気の力を絞り込んで刃物のように鋭くする技だ。この技は色々と流派がある。基本的なことは同じだが、型が少しずつ違うのだ。

ちなみにマイヤはカイから習ったので、流派など知らなかった。

「教えるわけが無いじゃん。少し考えたら？石頭さん」

「い、石頭だと！！調子に乗ってんじゃねえ！やつちまえ！」

マイヤは再び俊敏の術と剛力の術を使い、高く跳ぶ。この2つの術を同時に使うことによって、通常より高く跳ぶことが可能になる。

天井近くを飛んでいるフェザーに近づき、斬る。フェザーは地面に叩きつけられると、何も反応しなくなった。その状態から、隠し持っていたナイフを8本投げる。

そのうち4本がウルフ3匹とエイプ1匹の頭に当たり、動かなくなる。最後に落下しながら中級のウルフを切り捨てる。これで残りは大男だけだ。

しかし、マイヤは先程の戦闘で少し息があがっていた。

「てめえ、よくも俺の手下を！覚悟しやがれ！」

男は完全に怒っていた。背中にあつた2m近い大剣を片手で持つて、マイヤに向かって突っ込んできた。

マイヤは少し疲れている身体を動かし、攻撃を受け流す。そして、素早く背後に回って男に刀をおろす。

しかし、男を斬れなかった。まったく斬れることなく刀は男の肩のところで止まっていた。

「硬ッ。……あんたも気術使いか。今の術は剛鉄の術でしょ。じゃなきゃこの硬さは説明できないもん」

「当たり前だ。さあ、この強固な身体をどうやって攻略する？ただの剛力の術なんかじゃこの俺を斬ることはできないぜ！」

男がマイヤをつかみ、投げ飛ばす。マイヤは体勢を整えて男のほうを向きなおす。大きな身体では考えられない速さで男が迫ってきた。男の攻撃を正面から受け止める。

「……ほう。受け止めたか。だが、力の差はだいぶ大きいようだぜ？」

少しずつではあるが、マイヤが押されていた。

「単純に力だけだったら確かに負けてたね。でも、そうは甘くないよ」

マイヤは刀を少しずらし、男の剣を横に流す。その隙を突いて、思い切り相手の頭を殴る。

普通ならなんとも無いような一撃だが、剛力の術を使っているのでも男はで気を失ってしまった。

「あたしに勝てないんじゃないよ。絶対にカイ兄には勝てないよ。でも、結構楽しかったな。レイナちゃんは無事かな？」

そんな気楽なことを言いながらも、ここに来てから心の中にはひとつの感情が強くなった。その思いがここまでマイヤを強くした。

今度こそ。マイヤは小さく呟いて、更に奥に進んでいった。

2章 〽侵入〽（後書き）

こんにちは、闇桜です。

今回はマイヤ主体で書かせていただきました。カイとの繋がりが何かありますが、そのうち出ると思います。

新たに気術という物が出現しました。これで大体の魔法・術の大きな設定を出せたと思います。

作者は近々テストがあるので、1週間程休載させて頂きます。勝手なことを言って申し訳ありません。（学生なのでどうか勘弁してください）

では、また来週です！

2章 〽侵入2〽 (前書き)

テスト終わりました。更新遅れてすみません。

2章 く侵入く

落とし穴が作動して、急に地面が無くなる。既にレイナは落ちる動作に入っているので、カイは必然的に落ちることになった。レイナ1人では何かと危ないからだ。

とりあえずレイナを抱えて着地する。レイナは恐怖で気絶したらしく、まったく動かなかった。周りを見渡すと、敵に囲まれていた。

敵の数はエイプが5匹、ウルフ10匹、フェザー6匹、中級のウルフが3匹と、おそらく魔術師であろう服装の男が1人いた。数では圧倒的に不利。敵は自分達の勝利を確信していた。

カイはレイナを地面に寝かせた。立ち上がって敵を見る。その表情は、なんとも楽しそうだった。

「貴方、何がおかしいんですか？この状況で笑っているのは、もはや馬鹿としか思えません」

「すぐに分かるさ。結界術『結』」

レイナの周囲に透明な結界が張られる。

——結界術。自らの魔力や気の力を使い、結界を作る術だ。身を守る物だったり、亜空間を作りだせたりもする。

簡単そうに見えるが、素質のある者にしか使えない。魔力のみで作る結界は気の力に弱く、気の力で作られた結界は魔力に弱い。両方を合わせて作った結界はどちらにも強い強力な結界となる。しかし、魔力と気を両方使えて結界術を

使える人は殆どいないため、魔力を使う結界術師と、気を使う結界術師の2人がそれぞれの力を合わせて作るのが主流だ。

この方法もタイミングをぴったり合わせる、同等の力を込めなければならぬという難しい条件が2つあるため、どちらにせよあまり使われていない。

「『出』『暁』」

空間に穴が開き、その中から鞘に収まった刀が出てくる。カイがその剣を掴むと、穴が閉じていった。

鞘から刀を抜く。長さが1・3m程あり、刃こぼれひとつしていない。カイはその剣を片手で持ち、構える。

男は周りの空気の変化に気付き、魔物を盾にするようにして身を隠す。

「奥義」

カイの周囲にたくさんの剣気が出現する。魔物たちも何か異様な雰囲気感觉到き、カイを攻撃しようと接近する。

「狂気の舞」

カイは暁の切先を天にむける。それを合図に、たくさんの剣気が乱れるように周りを飛び交う。

10秒くらいすると剣気が消滅して、あたりに静けさだけが残る。カイの周りにあるのは魔物であった肉の残骸だけだった。

レイナは結界に守られていたので、傷ひとつ無かった。

「……貴様、あの剣気の渦の中をどうやって逃れられた？」

「あなたが攻撃する直前に避難しただけですよ。あなた、何者ですか？あれだけの剣気を出せて、しかも鋭い。並の人間にはできない芸当ですよ」

「俺はただの旅人だ」

「ならば、何故ただの旅人がこんなところにいるのですか？彼の者を爆発にて消したまえ、プローション」

爆発の塊がカイに向かって飛んでくる。カイは仙風斬を放って爆発を散らした。

「やはり、この程度の魔法では倒せませんね。では、これならどうでしょう？彼の者の跡が残らぬような爆発を、クロスバーニング！」

カイを中心に大きな爆発が起こる。急に発生した爆発にカイは避けきれず、直撃した。

「やはりあの攻撃は逃れられなかった——」

爆発による砂埃の中には、服がこげる程度で、まったく傷を負っていない姿で立っていたカイの姿があった。

「……爆発の上級魔法か。なかなか質のいい攻撃だった。が、俺に傷をつけるには力が足りん」

カイは1歩ずつ男に近づいていく。その左手には暁が握られていた。

「な、何故あの魔法で死なない！？なら、この魔法ならどうだ！火の神アポロスよ、彼の者に恐怖の爆発を、エクスプロージョン！！」

爆発の最上級呪文が成功して男の真上に巨大な爆発の塊が発生する。カイはその場に立ち止まり、爆発を見上げる。

「い、いかに貴様とてこの魔法をくればただでは終わらんだろう。くらええええ！」

爆発の塊がカイに接近してくる。かわすこともできるが、正面からぶち破ることにした。爆発の中心に右手の人差し指を向ける。

「闇よ、全てを切り碎け、クロスブレイク」

爆発の中心から幾筋もの闇の線が発生した。巨大な爆発はその闇に吸い込まれるかのように消滅していく。男はそれを呆然とみていた。

「あれは……闇の上級魔法……。何故、奴は気と魔力の両方を持っている？」

男が闇に吞まれる。数秒後、この空間にその男は存在しなかった。カイは鞘の中に暁を収める。

「魔力の差ですでお前は負けていた。魔法の強さを左右する>思いの強さ<でもな。『収』『暁』」

空間にあいた穴の中に鞘に入った暁が収容されていく。完全に入ると、穴が塞がっていった。

レイナはまだ気絶していたので、おぶって歩くことにした。しばらくすると、レイナが目を覚ました。

「ん……おはようございます。カイさん」

「何がおはようだ。おろすぞ」

レイナはいつもより目線が高いことに気付く。少ししてカイの背中にいるということを理解して、慌てておりた。その顔は少しながら赤くなっている。

「カ、カイさん。マイヤさんはどうなったんですか？」

レイナが話題を素早く変える。

「はぐれた。俺達は落とし穴を落ちていったんだ。いまは奥に進んでいる」

「だ、大丈夫なんですか？マイヤさんを放って置いて」

レイナが心配そうな顔をして、カイに尋ねる。

「心配するな。少なくとも、マイヤはお前より強いからな。先を急ぐぞ」

カイは再び歩き出す。その後ろをボーっと立っていたレイナが小走りで追いかけていった。

2章 く侵入2く（後書き）

こんにちは、闇桜です。

今日はカイ中心の話でした。……といっても、殆どわかっていること
とでしか書けませんでしたが。
では、また次回！

2章 く奪取く

カイとレイナはそのまま奥へと進んでいた。落とし穴に落ちる前とは違い、周囲に明かりが無かった。なので、周りが見えずにいた。

「……面倒くさいな。明かりをつけるぞ。光よ、我らを照らせ、フラッシュ」

カイを中心にほんのりと明かりがつく。その明るさは数メートル先はもう見えないくらいの物だった。

「敵に見つかる可能性があるから、なるべく暗めで行くぞ」

カイたちは少しずつ奥に進んでいった。そして、大きな広間に出た。そこで行き止まりだったが、2つの牢屋があった。

その中には町人らしき人々がいて、カイたちの姿を見て少しだけ希望を持ち始めたようだ。

「カイさん、見つけましたね」

「ああ。扉の鍵を外すぞ」

カイは扉の鍵に手を置いて、何かを呟いた。すると、鍵が爆発してなくなった。もう片方も同じ方法を使い、鍵を無理矢理開けた。

しかし、無理矢理あけたのがいけなかったのか、突如天井が爆発した。そして、そこから50匹前後の魔物が落ちてきた。

下級の魔物が多く、何匹か中級の魔物もいた。しかし、魔物の種族を見るとエープ、ウルフしかない。

「カ、カイさん。これはいくらなんでも多すぎですよね？」

「……おい、この中で爆発か火、もしくは雷の中級魔法を使える奴がいたらきてくれ。」

10名ほどが前に出る。

「これだけあれば充分だ。手短に説明するから、よく聞いてくれ。まず、俺があ的一点に魔物どもを集める。そこにさっき言った魔法を一齐に使ってほしいんだ。ただし、普通に使うだけじゃ駄目だ。俺が集めている間に、できる限り魔力を溜めてから、一気に放出してくれ。以上だ」

そういつて、カイは剛力の術、俊敏の術、鋼鉄の術を使い、敵の中心に突撃する。

「波動『封』！！」

敵の動きを強制的に停止させる。その間に、全ての魔物を端に追い込める位置に立つ。

「波動『衝』！！」

強めの衝撃はを飛ばし、一度に吹き飛ばす。ほぼ全ての魔物がその一点に集まった。

「今だ！」

『彼の者を焼き尽くしたまえ、フレイム！』『彼の者を爆発にて消したまえ、ブロージョン！』『迷える稲妻よ、彼の者に罰を、ライトニング！』

魔力を溜めた3つの魔法が同時に炸裂して、魔物たちを襲う。下級の魔物はもはや動かなかったが、中級の魔物は威力が拡散したためか、倒しきれなかった。

中級の魔物が襲い掛かってくる。何匹かは撃墜できたが全てできるわけがなく、撃ち損ねた数匹がレイナを攻撃しようとした。

周りには魔道士だけで詠唱が間に合わない。カイは間に合う距離にいなかった。とうとう魔物がレイナの目の前に来て殺そうとしたそのとき、

1つの衝撃波が魔物にあたり、魔物が倒れた。そして、天井から人影が降りてくる。

「レイナちゃん、無事だった？怪我とかない？やつほ、カイ兄。ちゃんとレイナちゃん守ってあげなきゃ駄目だよ」

その人影はマイヤだった。マイヤは残りの向かってきた魔物を斬り捨てて、刀を収めた。

「マイヤ、来るのが遅いぞ。やはりたるんでいるな。今日の目的を果たしたらみっちり修行してやるから覚悟しておけよ」

カイが口元を歪ませて笑う。レイナはその姿が一瞬、悪魔のように見えた。

「げっ!」、ごめんなさい。もうあの修行だけは勘弁してください」

マイヤは苦い物を噛むような顔をしながら答える。マイヤがいつもの口調を崩すほどの修行がどのような物かがレイナは気になった。

「カイさん、あまりマイヤさんを虐めないであげてくださいね」

気にはなったが、マイヤがあまりにもかわいそうだったので助け舟を出すことにした。しかしカイはその話を聞いておらず、

何も無い空間のある一点をただ見つめていた。

「カイさん、私の話を聞いてますか？」

レイナは話を聞いていないカイに確認をする。しかし、返事は返ってこなかった。

「……カイ兄、どうしたの？」

マイヤがカイの様子がおかしいのに気付く。カイはマイヤたちをそんなま無視して、静かにその場所を指差した。

「闇よ、敵を切り裂きたまえ、ダークブレイク」

カイが何も無いはずの空間に魔法を使う。カイの手から放たれた闇の1線は、壁に衝突する前に何かにぶつかった。

「まったく。久々の再会だというのに、もう少しやさしい歓迎はできないんですか？」

そこには、
1人の男が浮いていた。

2章 〽奪取〽（後書き）

こんにちは、闇桜です。

更新が少し遅れてしまいました。申し訳ございません。

一応町人は発見しましたが、なにやら怪しい男が出てきました。2章も終わりに近づいてきたので、がんばっていこうと思います。では、次回！

2章 く脱出する者と残る者く

男の姿はローブに隠れてて見えないが、どう見ても力技で攻めるタイプではないだろう。おそらく魔道士だ。

「久しぶりですね。カイさん、マイヤさん」

その表情は隠れていて見えないが、声の調子からして、この状況を楽しんでるようだ。

「久しぶりだって・・・？気安くそんな言葉使うな！大十文字斬！」

十字の衝撃波が飛んでいく。しかし、すでに男はその場所にいなかった。

「後ろですよ。これで貴女は一度死にましたね。・・・彼がいなければ」

男はクスクスと笑って話す。その後ろには、カイが拳をつきたてていた。

「お前はシオンとの繋がりはあるか？」

「そのかた、何方ですか？おや、見かけない方がいますね。はじめまして、お嬢さん。僕はデイルといいます」

デイルと名乗った男はレイナに挨拶をする。しかし、レイナは今までの雰囲気と会話の流れからデイルを敵と判断した。

「つれないですね。もう少し仲良くできないんですか？あなたたちは」

「お前なんかと仲良くできるはずがない。お前が…お前があたしの大切なものを奪っていったんだ！今、ここから消えろ！！」

マイヤは怒りと憎しみの負の感情に任せて攻撃をする。しかし、その攻撃は隙だらけで簡単に避けられてしまい、全く当たる様子が無かった。

「おやおや、もう息が乱れてきてますよ。どうしたんですか？」

デイルがマイヤを挑発する。マイヤは怒りでそれが挑発とも分からずに、攻撃を続ける。

「黙れ！あたしはお前なんかに負けるわけにはいかないんだ！」

マイヤが攻撃を続けようとする。その前にカイがマイヤの額に力を加減した手刀をおろした。

「何するのさ、カイ兄。そこどいてよ！」

マイヤがカイを怒鳴り散らす。その様子を見かねて、もう一度手刀を繰り出した。

「何するのさ、じゃない。お前は馬鹿か？少し落ち着いて考えてみる。また悪い癖がでている。ほぼ1パターンでしか攻撃していないぞ。

どうやら本格的にあの修行に戻りたいようだな」

マイヤの顔が青ざめていく。それほどまでにつらい修行だったのだろうか。

「本来の目的は達成したから、一度退くぞ。いいな？早くしろ」

「やだ」

マイヤはこの場を退くことを拒否した。

「お前1人のために全員を死なすわけにはいかない。」

「でも！・・・でも、ここであいつを逃したら二度と会えないかもしれない」

「でも、じゃない。ならば、お前1人で残れ。それだったら許す。俺は町人達を町に送り届けるからな」

短い沈黙の後、マイヤが答える。

「わかった。あたしだけ残るよ。カイ兄たちは先に行つて。後から必ず追いつくから」

「そんな！1人じゃ無理ですよ！」

レイナが心配そうに言う。しかし、それはカイの一言によって軽く返された。

「少なくともマイヤはお前よりはるかに強い。それに、お前はマイヤの約束を信じることができないのか？」

レイナは黙り込んでしまう。その様子を見て、マイヤは優しく言った。

「あたしは約束は守るよ。だから、レイナちゃんはカイ兄と一緒に町人たちを町に送ってあげて」

マイヤの一言に、レイナは仲間を信じきることを決意した。

「皆さん、ここは危険です。早急にここを離れます。ついてきてください！」

レイナが的確に指示を出していく。町人たちは走って出口へと進んでいった。

やがて、カイとレイナの姿も闇にまぎれて見えなくなった。そこに残っているのは、マイヤとデイルだけだった。

「さて、もうよろしいですか？ 貴女も仲間との最後のお別れを済ましたようですし」

デイルはさぞ自分が勝つのが当たり前というような口調でマイヤに言う。

「あたしはもう負けないよ。カイ兄たちに必ず戻るって約束したもん」

「……そうだな。お前は約束を破るような奴じゃないはずだからな」

岩陰から声がした。2人とも驚いて岩陰を見つめる。

「ん？俺がここにいるのはおかしいと思ったのか？」

そこには、先程レイナと町人と一緒に脱出したはずのカイの姿があった。

2章 く脱出する者と残る者く（後書き）

こんにちは、闇桜です。

レイナと脱出したはずのカイさんがそこにいました。何故でしょう？その理由は・・・次回！

12月に入ってから1000アクセス突破しました！同時に連載1ヶ月です。

ここまで続いたのもたくさんの方が読んでくださったおかげです。ありがとうございます。そして、これからもこの小説をよろしくお願いします！

2章 く対決く

「カイ兄、いきなり出てこないでよ。心臓に悪いでしょ！それに、レイナちゃん1人じゃ何かあったときに対応できないじゃない。」

「いや、向こうにも俺はいる。あっちにいるのは分身だが、実分身だからな。強さに変わりはない」

実分身と分身と違いは、その強さにある。分身は分身した数だけ強さが減る。だが、実分身はそれが無い。その代わりに、分身した数だけ疲労が増える。だから、どちらにせよ長い時間の分身ができないし、何体も作れない。

「さて、俺が戻ってきた理由だが、そいつ倒すのを手伝ってやろうかと思っただけ」

カイがデイルを指差して言う。しかし、マイヤは首を横に振って断った。

「やはりか。こういった物は自分の手で決着をつけたい物だからなだが、これは受け取れ。この戦いでも役に立つはずだ」

マイヤの前の空間に2つの穴が開く。

「『出』紅龍、虎蒼。これがこいつらの名前だ」

穴の中から2本の鞘に収まった刀が出現した。

マイヤは鞘から紅龍を抜いてみる。刀身は80cmほどで、鮮やかな赤色だった。紅龍を鞘に収めて今度は虎蒼を抜いてみる。こちらも刀身80cm程で、違うのは色が濃い青色ということだけだ。

「カイ兄、ありがとう」

マイヤはカイに一言お礼をいい、デイルと向き合った。

「さて、最後のお話は終わりましたか？なにやら新しい武器を手に入れたようですが、それでもあなたが私に勝てるとは思いませんが」

「やってみなきゃわからないよ！」

先程と違って冷静に言い返すマイヤ。

「では、カイさんもこの戦いに参加するんですね。それだったら僕は間違いないく負けます」

「勘違いするな。今の俺は傍観者だ。手出しをするつもりは無い」

カイはその場に座り、その先の言葉を紡ぐ。

「だが、明らかに俺に向けて攻撃するような仕草を見れば即、お前を斬り捨てる」

カイの目つきは本気だった。

「……なるほど。あくまで今の貴方は中立を貫く、ということですね。わかりました。では、始めましょうか」

マイヤは虎蒼を構える。デイルも腰についている鞘から剣を抜き、構えた。

先に仕掛けたのはマイヤだった。デイルに向かって縦に刀を振り下ろす。デイルはその攻撃を避けて、胴を斬ろうとする。

マイヤは斬られる直前に素早くしゃがみ、相手のバランスを崩すために足払いをかける。その足払いを跳んで避けて、少し離れた所に着地する。

「ふむ、確かに先よりと違いますね。では、もう少し力を出しますか。フレイム！」

デイルは火の中級魔法を無詠唱で使う。その魔法で作られた大きい炎が、マイヤに向かって飛んでいく。

「剛力の術！俊敏の術！」

2つの術を同時に使い、爆破された天井近くまで飛び上がり回避する。

「波動『斬』！」

切れ味のいい衝撃波を飛ばす。それは炎を打ち消し、デイルに飛んでいった。

「なるほど。いい力を持っていますね。しかし……プローション」

爆発の中級魔法によって相殺された。マイヤは相殺されたのと同時に天井を蹴って一気にデイルに接近しようとする。

「まだ詰めが甘いですよ。敵に妨げの風を、ウィンド」

洞窟の中のはずなのに突如強風が発生する。その風でマイヤは吹き飛ばされて、壁にぶつかった。

「くっ、どうして風が……。ここは洞窟の中だから風の魔法は発動しないはずなのに」

風の魔法は室内では使用できない。それなのに発生したのだ。

「理由はこれですよ、これ」

デイルは首飾りをマイヤに見せた。そこには、綺麗な装飾と、その中心に翠色の宝石がついていた。

「これは風の結晶石ですよ。珍しいでしょう？ たまたま見つけたんですよ。まだ使い慣れていないので詠唱が必要なんですけどね」

デイルはまた首飾りをかけた。

「さて、無駄話も終わりましたし、続きを始めましょうか」

今度はデイルからマイヤに斬りかかる。マイヤはそれを紅龍で受け止める。そのまま横に受け流して、少し距離を置く。

そしていつの間にかしまっていた虎蒼を抜いて、左手で持った。

「二刀流ですか。面白いですね。でも、その程度じゃ僕は倒せませ

んよ。まあ、僕も徐々に出す力を上げていくとしましょう」

「黙れよ、お前。遊びは終わりだよ、お互いにね」

マイヤは2本の刀を構える。デイルも剣を両手持ちにする。

「鋼鉄の術、剛力の術、俊敏の術！」

「地獄の業火にて我を仇なす者を消し去れ、クロスファイア！」

火がマイヤを包み、球状になる。それによってマイヤの姿が見えなくなる。そして、その球は少しずつ小さくなっていった。

「………仙風斬」

火球がどんどん広がっていく。そして、強風とともに破裂した。

「破碎剣！」

「かまいたちよ、彼の者を引き裂け、クロスウィンド！」

複数の地を這う衝撃波と無数のかまいたちが衝突する。殆どが相殺されたが、数の差からかいくつかのかまいたちがマイヤを襲った。

「っ！まだまだー！！」

「ふふ、もっと楽しませてくださいね」

マイヤとデイルの武器がぶつかり合う。今のところの実力はほぼ互角。両者共に激しい攻防戦を繰り広げていた。

2章 〽対決〽（後書き）

こんにちは、闇桜です。

本編では補足し切れなかった場所を少し説明させていただきます。
波動『衝』と波動『斬』の違いですが、波動『衝』はただ敵を吹き飛ばすだけの物です。波動『斬』は吹き飛ばすと同時に切り裂きま
す。よって波動『斬』の方が強力です。
では、また次回お会いしましょう！

2章 く対決く

——あれからしばらくして、2人とも体中に傷がついていた。しかし、傷の深さや量はデイルのほうが圧倒的に少なかった。それは、マイヤが押されていたという明らかな証拠だった。

「そろそろ終わらせましょうか。楽しかったですよ、マイヤさん」

「あたしは、死ぬわけには、いかない。消えるのは、お前のほうだ」
息を切らしながらマイヤは言う。

「火の神ラガよ、彼の者に怒れる炎を。風の神クロムよ、彼の者に嘆きの風を」

「・・・・・・奥義」

両方とも決め手となる攻撃の準備に入る。魔力と気が、崩れかけているこの洞窟を揺るがす。

「プロミネンス！！エアクラッシュ！！」

「夢幻桜華！！」

デイルの右側に、白い炎が出現する。その温度は灼熱より熱く、大きさは縦に最大5m、横にさ3mだった。左側には炎と同じくらいの大きさの風の塊があった。その中にはかまいたちが渦巻いている。この2つの魔法の影響で辺りには熱風が吹き荒れていた。

対極にいるマイヤからは、紅龍から赤い色の花弁のような火属性の剣気が、虎蒼からは青色の花弁のような氷属性の剣気が吹き出している。大量に吹き出している花びらは、時々洞窟の壁を破壊していた。

「「いけっ！！！」」

2人が同時に攻撃を始める。

魔力と気。2つの相反する力の拮抗。その余波で洞窟は完全に崩れ始めた。

火と風の最上級魔法と花びらに擬態した火と氷の剣気。この2つの力はほぼ互角だった。ここからの勝負の分かれ目は、使用者の基本能力と思いの強さだ。

少しずつ、マイヤが押され始めた。今までの戦闘でのダメージが影響しているらしく、残りの体力に差が出てきているようだ。

「さようなら、マイヤさん。今日の戦いは楽しかったですよ」

その言葉に対してマイヤからの返事は無かった。デイルがさらに力を込める。同時に、マイヤの方も力が入った。そして、炎と風と花びらは消滅していった。

2章 く対決く（後書き）

こんにちは、闇桜です。

マイヤが持っている刀、属性が付いています。紅龍は火属性、虎蒼は氷属性です。よって奥義で出る技にも属性がついた、ということです。

そのうち（今のところの）登場人物紹介みたいなのを入れようと思っています。これからも、この小説をよろしく願います。

2章 くもう一つの対決

最後の衝突で洞窟は完全に崩壊し、砂埃が舞う。そして、その中には、1つの人影しかなかった。

砂埃が切れる。そこに立っていたのは、デイルだった。マイヤは今まで立っていた場所に倒れていた。激しい気の消耗で気を失ったらしい。

そのことを確認したカイはゆっくりと立ち上がった。

「……俺には攻撃しないんじゃないのか？」

カイがデイルに尋ねる。デイルは持っている剣の切先をカイに向けていた。

「カイさん、やはり貴方は放って置くのは危険すぎる人物なのです。僕達の計画に支障をきたす可能性が高いですからね」

「シオンとの関係は無い、とさっきは言っていたが？」

「関係の無い人たちに聞かれるとまずいでしょう？僕にとっても、貴方にとっても、ね」

デイルの言葉にカイは黙って答えた。それは、否定ではなく肯定の沈黙だった。

「僕はシオン様に忠誠を誓っています。彼は、僕の命の恩人なんです。なので、一度消えたこの僕の生涯を彼に捧げることに決めまし

た」

「……………なるほど。で、俺はお前達の計画の邪魔になるから排除される、ということか」

「そうなりますね。では、消えてください。この世から」

「それは困る。俺はまだ奴とけりをつけていないのでな」

カイとデイルは向かい合う。

「火の神ラガよ、彼の者に恐怖の爆発を、エクスプロージョン！」

「極限式【三】」

カイの右手に魔力、左手に気が集まり。カイが両手を合わせると、その2つが混ざり合う。

それより少し後に、デイルの作った大爆発にカイは巻き込まれた。

「……………剛鉄の術」

通常なら全てが消し飛ぶ大爆発の中で、カイは無傷だった。

「極限式ですか。厄介な物を使いますね」

——極限式。魔力と気を融合させることによって爆発的な力を得る肉体強化術。肉体の強化だけでなく、各属性の魔法への耐性や魔法、気技等の威力上昇もできるという半ば反則的な物。しかし、自らが気と魔力の両方を使えるのが最低条件となる。それにより、

使える者の数も圧倒的に少ないのだ。さらに、身体全体に限界を超える負担をかけるため、使うタイミングを間違えると大変なことになる。また、この能力には五段階あるが、段階が進むほど身体への負担がどんどん大きくなる。リスクが高いが、そのリスクに値する力が手に入るといって、変わった術だ。

「ならば、その上に行く攻撃をするまでです」

「できるのか？お前ごときに」

デイルは剣を鞘に収めて杖を取り出した。長さは彼の背より少し小さいくらいの杖で、それに魔力が集まるのが分かった。

どうやら魔力を高める効果がある杖らしい。

「火の神ラガよ、彼の者に怒れる炎と恐怖の爆発を。風の神クロムよ、彼の者に嘆きの風を」

火・爆発・風の最大級魔法が発動する準備にはいる。

「プロミネンス！！エクスプロージョン！！エアクラッシュ！！」

3種類の最大魔法が同時に成功する。その力の強さは、マイヤとの戦いのときとは比べ物にならないほどの大きさだった。

「『出』暁」

マイヤのときのように空間に穴が開き、その中から鞘に収まった暁が出現する。

「・・・・・・・・・絶技」

「これで、消えてください」

「百億の剣」
ひゃくいっぴくのけん

カイが技の名前を呟くと、狂気の舞や夢幻桜華よりも圧倒的に多い数の剣気が出現する。ほぼ同時に、デイルの魔法がカイを消滅させようと飛んでいく。もし、そのまま何も無ければカイに衝突し、消え去っていたかもしれない。しかし、その攻撃は出現した無数の剣気によって妨げられていた。

「・・・・・・・・・斬滅」

剣気が全ての魔法に打ち勝つ。デイルが発動した最大魔法はいとも簡単に切り刻まれて無くなってしまった。

「何故・・・・・・・・・最大魔法3つが、こんなに早く打ち破られるだと・・・・・・・・・？」

「それが力の差、今の己の限界というものだ」

打ち勝った残りの剣気が一斉にデイルを襲う。急所は外れたが、切られた場所からの出血がひどく、放っておいても出血死するだろう。

「俺の目的はシオンだけだ。お前なんか最初から眼中に無い。『収』
暁・紅龍・虎蒼」

カイは3本の刀を穴の中にしまって、マイヤを背負った。

「じゃあな。飛翔の術」

最後にデイルに一言いつてから、カイはこの場所を離れ、町へと飛び去った。

カイが飛び去ってから少し後、1人の人間がデイルの前に立っていた。その人はデイルに手を向けたかと思うと、小声で何かを呟いた。すると、デイルの身体が光に包まれ、数瞬後、デイルの身体の傷はまったく無く、健康そのものになっていた。

「う・・・あなたは・・・そうですね。あなたが助けてくれたんですね。ありがとうございます」

デイルは立ち上がり、その人に向かい合う。

「僕は今日起こったことを全てシオン様に報告します。あなたはこれからどうするのですか？」

「・・・・・・私もあの男・・・・・・カイだっけ？と、戦ってみる」

「そうですね。でも、気をつけてくださいよ。彼は魔法と気術の両方を使えます。なので、極限式が使えます。僕に使ったのは【三】でしたが」

声の色と1人称が私なので、おそらく女だろう人は、黙って聞いていた。

「まあ、心配はありませんよね。“封魔のルナ”さん。頑張ってください」

てくださいね。では」

急にあたりに黒い風のようなものが吹き始める。そしてそれは、デイルとルナと呼ばれた女性を別々に包んだ。

黒い風が消え去った後、そこに2人の姿は無かった。

2章 くもう一つの対決（後書き）

こんにちは、闇桜です。

えー、カイの圧倒的な強さで勝利してしまいました。こんなの反則だ、とお思いかも知れませんが、ご了承ください。
では、また次回お会いしましょう！

2章 く過去の記憶1く

マイヤちゃんみーつけた!」

「あーあ。見つかった。カインって人を見つけるの上手だね」

マイヤと呼ばれた少女はまだ幼く、5、6歳程度だった。カインと呼ばれた男の子もまた、マイヤと同じくらいの年頃だった。

「あと見つかっていないのはだれ？」

「んーとね、えーっと・・・ロンと、シュトと、ランと・・・ハル兄!」

「またハルのこってんの!? ハルってかくれんぼのときがいちばんすごいよね」

彼らが遊んでいるのは、広い敷地の中。近くには、建物が建っていた。そこには、『アルアット孤児院』と書かれていた。

彼らは、この孤児院に住んでいる、孤児達だった。皆がさびしくないように、いつも一緒に遊んでいるのだ。

「じゃ、ハル兄探してくるね」

「うん、頑張つて見つけてねー」

マイヤは見つかってしまったので、見つかった人がいる場所へ移動

した。少しすると、ロンとランが来た。

「うーん、見つかったよ」

「後はシュト兄ちゃんとハル兄ちゃんだけだね」

「2人とも隠れるの上手だからなあ」

見つかった2人と会話をしていると、シュトがこちらに向かってきた。

「くそ、ハルより先に見つかった」

「あははー。シュト兄の負けだー」

「つ、次は俺が勝つー!!」

と、豪語しているが、本当は半年前から言っていて、一度も達成されたことは無かった。

「後はハル兄だけだね」

「ハル兄って隠れるの本当に上手だよね」

「影が薄いんだよ。だから、物置の隅とか箱の中とかに隠れて、余計見つからなくなるんだ」

そんな会話をしばらく続けていると、カインが戻ってきた。

「みつからないよ」

「うーん。大体は探したんだよね」

「うん。でも、いなかったんだ」

「そっか。じゃあ、皆でハルを探そう！」

20分ほどかくれんぼに参加していた全員で探したが、やはり見つからなかった。

「みんな〜ご飯だよ〜」

台所の奥から威勢のいい声が聞こえてくる。そこには40代くらいの活気に溢れている女性がいた。

「あ、マラーおばさん。もうご飯？早いなあ」

「あ、そっだ！ねえマラーさん、ハル兄ちゃん見なかった？」

「ハル？うーん……みてないわよ。でも、どうして？」

「あのね、皆でかくれんぼしてたんだけど、ハル兄ちゃんだけ見つかってないの」

「またかい。まったく、小さい子相手に何やってるんだか」

「まったくだ」

「お前が言うんじゃないよ、シュト」

マラーがシュトを叩く。シュトは叩かれた部分をさすっていた。

「あなたたちは先にご飯食べちゃいなさい。私が見つけておくからわーい、と声を上げながらマイヤたちは台所に向かっていった。しかし、1人の少年が残っていた。

「おや、どうしだんだい？カイン。お前はご飯はいらないのかい？」

「僕ね、このかくれんぼの鬼だから、ハル兄を探さなくちゃいけないの」

カインのその1言に、マラーは微笑みながら、

「そうなの。じゃあ、一緒に探そうか」

と、優しく答える。カインは元気よく首を縦に振り、マラーの後をついていった。

「ハル！いい加減に出てきなさい！！」

「ハル兄ー。ご飯なくなっちゃうよー！」

2人は声を上げて探しているのだが、見つからなかった。居眠りでもしているのだろうか？

注意しながら、2人はもう一度同じコースを回ってみる。門かぬきが閉ま
っている蔵を通り過ぎようとしたときだった。

ドタン！バタン！バンバン！！

蔵の中から音がした。確かに門は閉まっている。泥棒でも入ったのだろうか。

「お、おばちゃん、この中に何かいるよ？」

カインは怖がりながら普段より小さな声で言う。マラーは覚悟を決めて門を外して扉を開けることにした。

手に門を持ったまま、扉を開けてみる。中にいた誰かに思い切り門で叩こうとしていたら、その人が突如声を発した。

「あ、マラーさん。門開けてくれてありが——うわぁ！！それ、おろしてください！危ないですから！！」

「あら、ハルだったの。でも、何で門が閉まっている蔵の中からあなたが出てきたの？」

「ああ、それはですね。この蔵の中に隠れようとして入ったら、自然に門が閉じてしまってますね。出られなくなったというだけですよ」

カインとマラーはただ呆然としてハルの言い訳を聞いていた。

「……………なるほどねえ。もう蔵に隠れるのは無しだからね」

「はい……………。ところで、今日のご飯はなんですか？おなか空いちやってるんですよ」

「あなたは皆を心配させたのと大人気ない行動をしたから今日のご」

飯は抜き！！じゃあカイン、皆のところに行ってご飯食べようか」

「はい」

「そ、そんな……ご飯抜きだなんて……」

ハルはご飯抜き宣言をされて、ショックを受けていた。

数カ月後。

「それでは、彼のことをよろしくお願いします」

「はい。私達が責任を持ってきちんと彼を育てます」

なんと、ハルと一緒に住みたい、養子に引き取りたいという夫婦が現れたのだ。

「はる、あの人たちと幸せに暮らすんだよ」

「ハル兄、また遊びに戻ってきてね」

「ハル！勝ち逃げなんて許さねーからな！！」

「うん。皆もマラーさんを困らせちゃ駄目だよ」

別れの挨拶を互いにする。中には、泣き出す子どももいた。

「ハル兄ちゃん！いつちゃやだ！！」

「そうだよ！！なんでいつちゃうの！？」

「ごめんよ。でも、僕も色々勉強をしたいんだ。この孤児院をもつと良い物にするために。きっと遊びに帰ってくるから、それまで我慢できる？」

ハルは泣いている子達を優しく説得する。

「うん、僕、がまんする」

「わたしも」

「では、そろそろ出発しましょう」

夫婦は乗って来た馬車に乗る。ハルもそれに向かって走っていく。

「皆！またね！！」

最後にそう一言告げて馬車に乗り込む。馬車が走り出し、あつという間に見えなくなってしまった。

「……………行っちゃったね」

「うん」

その場にしみりした雰囲気が残る。それに負けずとマラーが大きな声を出した。

「さあ、今日は少し豪華な食事にしましょう！皆、手伝って！！」

「よっしゃ、俺、鶏の肉食べたい！」

「良いわよ。じゃあ、カインとランは私の買出しを手伝って頂戴。
マイヤとシュトは残った子達をお願いね」

「」「」「了解！！」「」「」

4人が息がぴったりの返事をして、各分担に分かれる。マラーは買出しに行き、マイヤたちは園で遊んでいた。

「じゃあ、追いかけてこやろう！あたしが鬼やるね。数がぞえるよー！」

マイヤの一言で皆が一斉に散らばっていく。

この孤児院の運命は、少しずつ不幸の道をたどっていった。

2章 く過去の記憶1く（後書き）

こんにちは、闇桜です。

いつも見てくださっている方々、ありがとうございます！評価や感想を下さると、凄く作者の励みになります！

今回はマイヤの過去編です。突然話が変わっていますが、気にしないでください。そのうち分かりますから（多分）

では、また次回お会いしましょう！

2章 く過去2 幸せの終わりく

ハルが出てっってから半年がたった。

別れてすぐは少し元気が無かったものの、今ではすっかり元に戻っていた。

今日はあの日と同じように皆でかくれんぼをしていた。鬼もあの時と同じくカインだった。

「じゃあ、始めるよ！ー！100まで数えるからそれまでに隠れてねー。いーち、にーい、さーん……」

カインが目を瞑って数え始める。他の皆は散り、隠れていった。

マイヤは、まだどこに隠れようか迷いながら走っていた。

少し走ったところに、茂みがあった。その中を覗いてみると、小さな穴があるのを見つけた。中に入ってみると、数メートル先まで奥行きがあった。

時間も無かったので、その穴に隠れることにした。少しずつ時間を経っていく。マイヤはいつの間にか眠ってしまったようだった。

外の様子を見るために少しだけ顔を出した。顔しか出さなかったのは、カインに見つかかるかもしれないからだ。

そして、マイヤが顔を出して覗いた外の光景は

原型を留めていない程に壊されていて、火がついて燃えている孤児院の姿、そして、そこにたむろっている魔物たちと1人の人間の姿だった。

訳が分からずに混乱している中で、マイヤは慎重に穴から飛び出て、近くを見渡す。そこには、身体と顔が血で塗れた、カインの姿だった。

彼は倒れていて、少しも動かなかった。

「カイン・・・・・・・・ねえ、起きてよ、カイン・・・・・・・・」

カインの体は冷たくなっていた。カインが死んでしまったという事と、孤児院がもう無いという2つの認めたくない現実。

この現実が、マイヤを恐怖で包んでいく。もはや何も考えられずに茫然としているところに、熊ベアルのような魔物が現れた。

その大きな腕を振り上げ、鋭い爪でマイヤを切り裂こうとする。その爪の恐怖に自然と目を瞑ってしまい、次の瞬間に来る痛みに体が強張る。

だが、いつまでたってもその痛みはこなかった。死ぬときは痛みを感じないのだろうか？そう疑問に思いながら、目を開けてみる。

目を開けた場所は天国ではなく、さっきまでと同じ場所だった。唯

「違うのは、目の前に男の人が立っているということだ。」

「おい、大丈夫か？まだ生きているな。そこを1歩も動くなよ」

どこからこの男が現れたのか分からず、ただ混乱していたが、彼が自分の敵ではないことだけは分かったので、彼の指示に従うことにした。

他の魔物達が気付き、近づいてくる。男は左手に持っている剣を振りする。すると、衝撃波のようなものが発生して、数体の魔物を倒した。

残りの魔物たちは警戒をして少し距離をとる。

「貴様、俺に気付いているだろう？無視せずに答える。何故ここを襲った？」

「おや？どうやら招かれざる客がいらっしやったようですね。決まっているじゃありませんか。お金が目的ですよ。ああ、もうひとつ。こいつたちがお腹を空かしていたので、食べさせてあげたんですよ」

「貴様、名は何だ？」

「名を名乗るときは自分からが礼儀ですよ」

「………カイだ。貴様らに礼儀があるとは思えんがな」

「僕にはきちんと礼儀がありますよ。デイルです。今後、よろしく」

デイルが話を終えた直後、先程と同じ物をデイルに飛ばす。

「彼の者に風の塊を、ゲイル」

デイルの前に風の塊が出現する。デイルの半分くらいの大きさになると、衝撃波に向かって飛んでいった。そして、ぶつかり合い、相殺した

「その程度ですか？では、今度かはこちらからいきますよ。かまいたちよ、彼の者を切り裂け、クロスウィンド！」

無数のかまいたちが発生して、カイに向かって飛んでいく。

「幾重にも重なる万の雷よ、我に仇名す者に降り注げ、クロスサンダー！」

突如、あたりが暗くなる。そして、空からたくさんの雷が落ち始めた。それらは全てのかまいたちを打ち消し、いくつかはデイルに直撃した。

「すごい・・・」

マイヤが思わず声を出す。

「・・・・・・・・しぶといな」

煙が切れる。そこには服が少し焦げたデイルの姿があった。どうやらギリギリで相殺したらしい。

「ふう、危ない危ない。それにしても、この僕に攻撃とは。正直、驚きました」

「貴様なぞに褒められてもちつともうれしくないぞ」

「そうですか。それは残念です。では、僕は帰らせていただきます。お前達、後のことは頼みましたよ」

デイルは黒い風に包まれて、瞬く間に消え去った。残った魔物が墜の準備に入る。

カイが左手に持っている刀を一振りする。届くはずの無い距離にいる魔物が、すっぱりと切断された。血飛沫がまう。

「刀伸斬」

何か透明なものが刀にまとわりついてるように見えた。カイはそれでどんどん敵を切り刻んでいった。

2章 〽過去2 幸せの終わり〽（後書き）

こんにちは、闇桜です。

感想を下さった皆さん、ありがとうございます！………何やら荒らし行為に似たことをやっている人も居るようですが、そういうのは読む人にも迷惑がかかるのでやめてほしいと思います。
では、また次回お会いしましょう！

2章 過去3 危機が去って

カイは刀を振るいどんどん魔物を斬っていった。数分後には、辺りにはカイとマイヤ、それと人と魔物の肉片しか残っていなかった。

カイは剣を鞘に収め、マイヤに近づく。自分を助けてくれたと頭では分かっている、あれだけ残虐なことが目の前でおきたので、自然と体が強張ってしまった

「怯えなくていい。俺はお前の敵ではないからな。今のところ味方でもないがな」

「え…と、カイだったよね。助けてくれてありがとう」

マイヤはまだ恐怖で震えてる体で、何とか立ち上がる。その後、カイと一緒に孤児院の入り口だったところに行った。

そこには、1人の女性が倒れていた。

「……………だめだな。お前以外の人はもう生きていないようだ」

「なんで……………。マラーさん、ラン姉、みんな……………殺されなくちゃいけなかったの？」

少しの沈黙があった後、カイが言葉を紡ぐ。

「少なくともお前達が悪いことをしたわけではない」

「じ、じゃあ何で？」

マイヤは半泣きの状態でカイに尋ねる。

「さつき会話をしていたが、金と餌が目的だったらしい。だが、1つ気になることがある。この中にいなくなった人はいるか？」

「ち、ちよつと待つてね……。ディーちゃんとルーちゃん、あと、キラ姉もいない。何で？」

「やはりか……。おそらくいなくなったそいつらはそのまま連れ去られたんだろう。多分まだ生きていると思うが、これから一生奴隷として働かされるだろう。もしくは、そのまま売られてるかもしれん。どの道どこにいるのか分かんが、もう二度と会えることは無いだろう」

「ひつく……。そんな……。ぐすつ……。…」

マイヤは本格的に泣き始めてしまった。カイはその様子を何も言うことなく黙って見ていた。

1時間程して、マイヤが泣き止んだ。いや、正確には涙が枯れてしまったのだろう。真っ赤になっている目が、どれだけ悲しんだかを語っていた。

「許せない」

小さな声だったが、しつかり、そしてはつきりと言った。

「ねえ、カイ。あなた旅人でしょ？だったら、あたしをあなたの旅と一緒に連れてって。で、あたしの師匠になって、鍛えてほしい」

マイヤが頭を下げる。いきなり何を言い出すのか、と思ったが、自分も似たような境遇にいたので、その気持ちがなんとなく分かった。

「何をしている。ついてくるんだろっ？ だったら早くしろ」

カイは歩き出す。マイヤは自分は夢でも見ているのか、と言う様な目でカイを見上げる。そして、その目には強い意志がこもってきた。

「うんっ！！」

マイヤはとてとてついてくる。

「厳しい修行になるぞ。もちろん途中で止めることはできないからな。今のうちに覚悟しておけよ」

「全部乗り切ってやるわよ。」

「ところで、まだ名前を聞いてなかったな。名は何だ？」

「あ、まだ言っていなかったっけ。あやしはマイヤ。マイヤ＝クルスだよ。これからよろしくね、カイ兄！」

俺はお前の兄貴じゃないと突っ込みながら、特に気にしない様子で歩き始める。その後ろを、マイヤがついていった。

悪夢を乗り越え進んだ道は修羅の道。進んだ先にあるのは何だ。絶望、悲しみ。希望、自由。もう後に戻ることはできない道。

カイとマイヤはその道に入っていく。2人の道は、同じで違う道。
彼らの道の先に待つものは何だろうか？
先の見えない道を、歩き出した。

2章 〱過去3 危機が去って〱（後書き）

こんにちは、闇桜です！

これがマイヤの過去です。過去編はこれで終了です。同時に、2章も次回で終わります。もうじき3章です。これからも、この小説をよろしくお願いします。

2章 く夢が終わり再び現実へく

「・・・・・・・・・・て・・・・・・・・きて・・・・・・・・おきて・・・・・・・・」

どこかから声が聞こえる。その声に反応して、夢の中からマイヤの意識が浮上してくる。

「マイヤさん、起きてください!」

マイヤは目を開ける。そこにはレイナが椅子に座って呼びかけていた。

「よかったー!。やっと目を覚ましました。心配しましたよ。もう3日間も寝ていたんですよ」

周りを見してみる。町の宿だった。自分が最後に見たのは、砂埃舞う場所だったはずだ。結局どうなったのだろう、と疑問に思った。

「ねえ、あたし、どうやって帰ってきたっけ?」

「どうしたんですか? 町の外にマイヤさんが倒れているのをカイさんが見つけて運んできたんですよ。覚えてませんか?」

これで疑問が少しだけ解決した。気を失った後にカイが何かやったらしい。見たところ、町の人も無事に戻っているようだった。

「ねえ、レイナちゃん・・・・・・・・」

「何でしょう」

「……ん。やっぱりいいや。それよりさ、レイナって呼び捨てで呼んでもいい？」

レイナは不思議そうに首を傾げてから、

「いいですよ。当たり前じゃないですか。私達はもう仲間ですよ。カイさんなんて、許可取らずに呼び捨てにしていますし」

仲間。彼女は、レイナは、はっきりとマイヤのことを仲間といった。マイヤは今まで、カイ以外の人と必要最低限以外話したことが殆ど無かった。

いらなかったからだ。だから、レイナとどうやって話せばいいのか分からなかった。不安な心に優しく入ってきた“仲間”という言葉。

それが、今までマイヤが隠していた感情が一気に引き出だされる鍵となった。

「レイナ、あたし、やっぱり聞いてもらいたい。貴女は聞く資格がある。あたしの過去と、カイ兄の出会いのきっかけとなったことを」
マイヤは真剣な顔つきになる。それを見て、レイナは姿勢良く椅子に座りなおす。そして、マイヤは自らの過去を少しも隠さず、全てを話し出した。

——カイの秘密だけ、話さずに。

全てを話し終わると、レイナは涙を流していた。

「マイヤさん……辛いですよね。悲しかったですよね。そんなときは、思いきり泣いても良いですよ」

「え・・・・・・・・・・・・・・・・？」

「私なんかが相手であれば、いくらでも」

「・・・・・・・・・・」

最初は黙っていたただだったマイヤだったが、次第に表情が崩れていった。そして、声を上げて、泣き始めた。

「もう、あの幸せなときは帰ってこないの！！みんななくなっちゃったの！！寂しいよ！嫌だ、やだよお！！！！」

泣きながら、マイヤは静かに言う。レイナはそれを見て、母親のようにそっと、優しくマイヤを抱きしめて、ずっと頭を撫でていた。

暫くして、泣き疲れてしまったのか、マイヤは寝てしまった。ゆっくりと体を横にして、布団をかぶせてあげた。

一通りの作業を済ますし、ふと目をやる。そこには、カイが静かに立っていた。

「いつからそこにいたんですか？立ち聞きはよくないと思いますが」

「入ってきたのはついさっきだが、ずいぶん前から扉の前にはいたぞ」

「・・・・・・・・・・そうですか。次からは、もっと考えて行動してください」

「さいね」

カイは、何のことだ？という疑問を感じていた。

「あと、マイヤさんを救ってくれてありがとうございます。」

「何故、お前が礼を言うんだ？お前は関係ないだろう」

「関係大有りですよ。決まってるじゃないですか。もう、マイヤさんは仲間だからですよ。もちろん、カイさんもですよ」

レイナは少しだけ微笑んで言う。

「……そうか」

カイはそっけない返事をする。その様子を見て、レイナは今度はくすくすと笑う

小さな声で会話をしていると、マイヤが起きた。

「ん……。あれ？カイ兄、レイナ、何してるの？」

「明日からの予定と、その他雑談だ。今日はもう遅いから、出発は明日にする。今はゆっくり休め」

「……もう少し優しい言い方はできないんですか？まだ眠いですか？今日はゆっくり休んで、体を癒してください」

「うん。分かった。まだ眠いから寝るね。おやすみ」

そういうと、マイヤはあっという間にまた眠り始めた。

「私も寝ます。ところでカイさん、今日はどこで寝るんですか？」

今までカイが使っていたところに、マイヤが眠っていた。

「ああ、それか。宿屋のおやっさんに頼んで、もう一部屋貸してもらった。部屋は斜め右だ。用があったら呼んでくれ。じゃあな」

そういうなり、すぐにカイは部屋から立ち去った。レイナもマイヤの隣にあるへつとに入り、眠りについた。

次の日、マイヤは早く起きてしまったので、カイの部屋に行くことにした。マイヤはカイの気配を掴み、部屋に入った。

「カイ兄、起きてる？」

「お前が入ってくる音で目が覚めた」

カイがきつぱりと言うと、マイヤは思わず苦笑いをしてしまった。マイヤはベッドに腰掛けて、話を続ける。

「で、結局あの後どうなったの？」

「お前が意識を失った後に俺とデイルの戦闘が開始。もちろん圧倒的な実力差で俺の勝ちだ。そうでなければ今ここに俺達はいないか

らな。

奴はギリギリで俺の攻撃をかわして致命傷だけは避けたみたいだが、傷口からの出血が多くて、そのまま放っておいた。

多分出血死するだろうからな。あと、これはお前に返しておく。『

出』紅龍、虎蒼」

目の前に2つの穴が開く。その穴から紅龍と虎蒼が出てきた。

「カイ兄………持ってきてくれたんだ。ありがとう」

マイヤが礼を言い、少しだけ沈黙が訪れる。その沈黙を破ったのは、以外にもレイナだった。

「カイさん、起きてますか？マイヤさんが見あたり………
・あ、いました。よかったです。心配しましたよ」

どうやらいなくなっていたマイヤを探しにきたらしい。とにかく、これで全員そろったことになる。なので、宿から出発することにした。

「おやっさん。世話になったな」

「気にすんない。おめえさん達がいなけりや今頃俺達はお陀仏よ。
むしろ俺達から礼を言わせてくれ。ありがとよ」

この町の宿の主人に挨拶をして、町を出た。

「次の目的地はアラドだ。そのあと、イーシェに向かう、というのが今のところの予定だ。では、行くぞ」

カイは再び歩き出した。それに、マイヤとレイナがついていく。マイヤという新しい仲間と共に、次の地へと進んでいった。

2章 く夢が終わり再び現実へく（後書き）

こんにちは、闇桜です！

これで2章終了です。最後がどうも微妙になっていますが、気にしないでください。仲間？となっているのは、昔はカイと行動していたから、新規加入メンバーではない、ということだけです。他に意味はありません。

……まだ仲間が全員とは一言も言っていません。これから登場するかもしれないし、ゲストで登場するかもしれません。

その辺は、作者の気分とかで決めていくと思います。これからこの小説をよろしく願います！

番外編 本編とさほど関係ないので、飛ばしてくださってもかまいません（前書）
これは本編と殆ど関係ありません。
ほぼ会話だけで成り立っています。
サブタイトル募集中です

番外編 本編とさほど関係ないので、飛ばしてくださってもかまいません

「オイ作者、こんな所に俺達をいきなり呼び出すんじゃない」

「あゝ、作者だゝ」

「いきなり移動したんでびっくりしましたよ。何で私達は呼ばれたんですか？」

『まあまあ、そう怒らないでよ。今回は番外編だからさゝはい、早速質問ある人、いる？』

「はい、はい。あります！」

『マイヤちゃん、何でしょうか？』

「そもそも小説の中に作者が出てきたらいけないと思います！！」

「あ、それ、正しいと思います」

「俺も賛成だな」

『うわっ、皆して酷！そこ突っ込んじゃ駄目だよ。今回は特別？なんだから。』

「冗談だよ。はい、ほんとに聞きたかった質問。あたしの設定が実はカイ兄の妹で歳が20だったっただよね。どうしてそれ没になったの？」

「何？そうなのか！？」

『うん、確かにそうだよ。でも、それだとこの小説書いてるうちに矛盾していることが多くなっちゃったから、諦めたんだよ』

（よかった・・・あんなのが妹にならなくて・・・）

「あ、もうひとつ。作者って男？女？」

『ハイ、作者に対する質問は無しね』

「えー、いいじゃん。読者さんたちは文字だけだから多分わかんないと思うし、あたし達の目の前に立ってる作者の姿が、身長は高すぎず

低すぎずだし、マントとフードに、コートなんか来て服装からじゃわかんないし。手袋に仮面、極めつけにボイスチェンジャーで声でも識別できないなんて、あからさまに不審者か変態だよ！」

『マイヤちゃん、細かい説明どうもありがとう。それと、これ以上言う後悔することになるよ』

「別にしないよーん。作者なんて怖くないやーいっ」

マイヤは作者を挑発した！作者は挑発にのった！！

『2人とも、ちょっと申し訳ないけど、この馬鹿借りてくね』

顔に特大の怒りマークをつけた作者が、にこやかに言う。

「あ、ああ。いいぞ」（な、何かが見える）

「こ、ここで待ってますから」（何か危なさそうです）

『じゃあ、お借りしますね。ライトウィップ!』

「……へ？何で作者が魔法使えるの？しかも破れないし！
ちよ、2人とも見てないで助けて〜!!」

（すまない、マイヤ……。お前のことは多分忘れないぞ）

（マイヤさん、どうか無事に帰ってきてくださいね）

近くにあった扉に作者とマイヤが入っていく。そして、扉が閉まる。

「ぎゃー……!!何よコレ!!うわー……!!」

（（!?!））

数分後、2人が扉から出てきた。マイヤは震えて、虚ろな目をして
いる。対して作者は何か機嫌が良い……。ような気がする。

「イヤ……イヤ……アレ、コワイヨ……。」

……マイヤは完全に壊れてしまっていた。どうやらもう会
話に参加する元気すらないらしい。

（何があっただんだ？あの部屋で）

（マイヤさんが……。それにしてもさっきの悲鳴はなんだっ
たんでしょう？）

『ん？2人ともどうしたんですか？』

「いえ、なんでもありません」

『そうですか。では、続けましょうか。若干1名は参加できませんが。他に質問はありますか？』

「あ、あります。カイさんはどうしてこんな無愛想な性格になってしまったんですか？」

「・・・無愛想で悪かったな。だが、俺としてもどうしてこういう設定にしたのか知りたいな。何故だ？」

『あー。その質問が来たか。困ったなー。言っちゃうとネタばれになっちゃうからあまり言いたくないんだけど、物語の何所かにヒントを少しだけ入れておいたはずだから、見つけてね』

「・・・確かにとんでもないネタばれになっちゃうな。それより、レイナ。俺は最近とても凄い情報を手に入れたんだ」

「な、何ですか？」

『ほう。それは気になりますな』

「聞いて驚くなよ。実は作者はよ『ライトウィップ』ムググググ」

『どうやら聞いてはならないことを聞いてしまったようですね。貴方もどうぞこちらへ』

「ムグムググググー！」（最後まで言わせろー！）

（カイさん、ご臨終です。）

レイナは心の中でカイの冥福を祈った。

「なんだこれは。く、来るな。うわああああー！」

扉の向こう側からカイの悲鳴が聞こえてくる。部屋の隅にうずくまっていたマイヤが、その叫び声に反応して、震えがひどくなった。

数分後、カイが出てきた。症状はマイヤと同じだ。

（でも、マイヤさんより症状が強いです。何があっただんでしょうか。あ、何か言ってます）

「ヤマダマイケル・・・コワイ・・・クルナ、マイケル・・・クルンジャナイ・・・」

（や、山田マイケル！？いったい何方ですか？）

「い、いるのか？山田が。・・・来るな、くるな、クルナアアア！」

（・・・どうやら心の声が聞こえてしまったらしいです。それにしても、凄くトラウマになっているようですね。）

『あれ？どうしました？レイナちゃん』

「いえ、なんでもありません。はい」（これ以上関わったら・・・私

も・・・)

『そうですか。あの2人ももう使い物にならなくなってしまいましたし、そろそろ引き上げることにしますか』

(殆ど内容語ってないような気がします!!それに、さり気なく酷い一言ですよ、それ)「ここでの出来事は記憶に残るんですか?」

『いや、それはないよ。この空間に来たときに全てを思い出すようにしておいたけど』

「そ、そうですか。わかりました。ありがとうございます」

『では、次回から3章!!』

「これからもこの小説を」

『「よろしく願います!!」』

『また次回!!』

「お、お会いしましょう!!」(私だけ無事に終わってよかった)

3章 く冰山の一角く

「ここはアラド国内にあるセトという国だ。この町には大陸有数の富豪の屋敷がある。名前は・・・覚えていない」

カイたちは宿屋に向かって進んでいた。その途中、カイは反対側から走ってきた男とぶつかってしまった。

「すまない。だが、こちらを見ずに走ってきて、勝手に衝突したのはそっちだ。もう少し注意して走ったほうがいいと思うがな」

「はあ？何を言っているんだい？君は。この僕が悪い訳無いじゃないか。悪いのは君だ。当然だろう？」

男は自らに非はまったく無いと主張する。しかし、誰から見ても今回は男のほうに負い目があった。

「2人とも、こんな馬鹿は放っておいて行くぞ」

カイは小さくため息をついて、先に進もうとする。マイヤとレイナもその方がいいと考えたのか、歩き出そうとしていた。

「まあ待てよ。どっちが悪いか、ここは戦って決めるのはどうだ？」

男は意味不明な言葉を発し始めた。何故自分に負があるのを認めないんだろうと思いつながら、カイは無視して歩く。

「おい、勝手に行くなよ！・・・分かったぞ。お前、負けるのが怖いんだろ？」

「・・・・・・・・何？」

カイは立ち止まり、男をにらみつける。

「だってそうだろう？申し込まれたのを断るんだ。そんなのは腰抜けがやることじゃないか」

「ちょっと、カイ兄は悪くないんだから、そんなことしても意味ない」

マイヤが、次の言葉を言おうとして、止める。カイから嫌な気配を感じたからだ。長年行動を共にしたから分かる。

「いいだろう。こちらとて腰抜け呼ばわりされたまま立ち去るほどの臆病者チキンではないからな」

この言葉聞いて、男の顔がにやける。どうやらカイが放つ殺気に気付いていないらしい。マイヤはこの男を一瞬だけ哀れに思った。

「まあ、待ちたまえ。ここでは周囲の者に迷惑が掛かる。せめて広い場所に移動しようではないか」

カイと男が勝負する場所になったのは、セト郊外にある広がった野原だった。

「ふむ。ここなら平気だろう。相手を殺さなければ特に制限は無しだ。まあ、殆ど何でもありって事だ」

男は自分の腰にある剣を持つ。

「そんな！それじゃ何も持っていないカイさんの方が圧倒的に不利じゃないですか！」

レイナが口を出す。客観的に言えばそうかもしれないのだが・・・問題は無いだろう。

「魔法もあり、ということだ。何も持っていないということは魔道士だろう？ならば、それで良いじゃないか」

「レイナ。俺が人間に負けることは絶対にない。絶対にだ。マイヤ、審判を頼む」

「はい」

「ふ・・・まあ、僕の勝ちで決定だけどね。いくぞ！風よ、我が剣に宿り気たれ、魔法剣《風》！！」

男の剣に、風の力が宿る。

——魔法剣。自らの武器に属性を付加させる技。魔法と武器を扱う能力、両方とも使えなければできない、厄介な技だ。しかし、その属性を付けることによって、通常より威力が増す。その属性に抵抗力がある等があると逆にダメージが軽減してしまうが、弱点の場合は更に威力を増す。これを使えるということは、それなりの実力を持っているということだ。

「僕の名前はカルマさ。この名前、二度と忘れられないようにしてあげるよ」

カルマが、カイに斬りかかる。カイは瞬動の術を使い、一瞬で10m程移動する。

「ほう、魔法剣か。なら、もっといい物見せてやる」

「ちょ、カイ兄、あれを使うの!？」

マイヤはなにやら焦り始めた。よほどまずい物らしい。

「ああ。俺達以外ここにいないんだから、平気だろう。一応、警戒はしておくがな」

カイが手を前にかざし、そこに雷の魔力を生み出した。

「真・魔法剣《雷》!!」

すると、カイの左手に剣が出現する。その姿は普通の物ではなく、雷がそのまま剣になったような形だった。

——真・魔法剣。魔法剣とは違って、魔力そのものを剣の形に具体化させる技。詠唱を必要とせず、その属性の魔力を持つていれば、魔法が使える必要が無い。ただ、その魔力を自由に操り、固体として維持しなければならぬ。しかも、この剣は物は切れない。何故なら魔力を固めただけなので、鋭くないからだ。それでも非常に高度な技術が必要で、使える人は殆どいない。と、いうよりも、存在自体が一部の人にしか知られていないので、絶滅したといわれている技である。

「真・魔法剣だと？本で見たことはある。だが、あれを実際に使える者はもついないと記してあったが……。何故あの男は使えるん

だ？

僕は幻でも見ているのか？」

「油断しているな。こういったところでの油断は死を意味するぞ」

「なっ！」

カイがカルマめがけて剣を振るう。カルマはそれをかろうじて受け止める。しかし、カルマの剣はそれに耐え切れず、折れてしまった。

「カルマ、戦闘意欲喪失。勝者、カイ！」

カルマの剣を折ったことにより、カイの勝利が決定した。彼の手にあつた剣は、拡散していった。

「おい、その剣を貸せ」

カイは負けて呆然としているカルマから、剣を取る。2つに折れた剣を合わせて地面に置いた。

「綺麗に2つに折れたのが救いだっとな。これならすぐに直せる。修復の術！」

カルマの剣が、薄い緑色の光に包まれる。やがて、光に包まれて見えなくなった。

「え・・・？」

光の中から出てきた剣は、折れていなかったかのように綺麗な形になつていた。

「な……に……？お前、これ、どうやった？」

「修復の術。物を直すことができる術で直した。複雑だったら無理だが、今回は綺麗に真つ二つだったからな。意外と楽だった」

意外と楽といっているが、気のコントロールが複雑で、そこそこ面倒くさい気術だ。ちなみに、マイヤはこれを1度も成功させたことが無い。

「お前、名は何て言うんだ？」

「………カイ。俺はただの旅人だ」

絶滅した技を使っていて何がただの旅人だ、と言いたくなったカルマだが、敗者は何もいえないと思ったので、おとなしく立ち去ることにした。

「………といっても、勝負を仕掛けたのも彼なのだが。」

「では、僕はもう行くとするよ。これからやらなくてはいけない事もあるからね」

そう言つて、カルマは走って去っていった。

「何だつたんだろうね、カイ兄」

「さあな。宿に向かうぞ。……ん？どうした、レイナ」

「あ、貴方はいったい何なんですか！？だって、圧勝ですよ、圧勝

「マイヤさんはおかしいと思わないんですか!？」

「んー。まあ、そうなんだけどね。カイ兄といると、その辺の感覚が麻痺するっていうか……」

私でも余裕だったと思うよ。

唯一話を通じる、共感してくれると思っていたたマイヤにとんでも発言をされてしまって、自分が弱いんだろうかと錯覚してしまうレイナ。

「あ、レイナ。大丈夫だよ。カイ兄が異常なだけで、マイヤが弱いって言うことじゃないから」

それなら貴女も異常だと思えますよ、と口に出しそうなレイナだったが、何とか堪えた。そして、この2人はいったい何者なんだろうか、という疑問と共に心の隅に追いやった。

「おい、置いていくぞ」

「あ、ちよつと待ってよカイ兄!」

「ええっ!？置いてかないで下さいよ!！」

カイは話をしていたり1人で考え込んでいたりする2人を置いて、宿に向かおうとしていた。

3章 く氷山の一角く（後書き）

こんにちは、闇桜です！

更新が少し遅れてしまいました。作者も近頃忙しいのです。もうひとつ、お詫びしたいことがあります。今日から暫くの間更新が不定期になりそうです。この状態がいつまで続くかは分かりませんが、なるべく早く脱出できるように努力します。

本編のほうで、瞬動の術というのが出てきました。これは、ある程度の距離を1瞬で移動する技です。いわゆる瞬間移動という奴です。今回のサブタイトルの意味は、“カイの実力の一部”です。

では、また次回！！

3章 く特別依頼く

宿に泊まった次の日、カイが寝ていた部屋の窓に、奇妙な手紙が置いてあった。

「怪しいよね。これ。明らかに」

「だが、開けてみないと話にならんぞ」

かれこれ30分以上こんな話を続けている彼らだが、レイナが勝手に開けてしまったことによって一気に進展した。

「これって………依頼書？」

「ああ………みたいだが、内容が書いてない」

“もしこの手紙を読んだなら、この町の一番大きな屋敷に来るべし。健闘を祈る”

「いたずらではないでしょうか？何故屋敷に行くだけで健闘を祈ると書くんでしょうね」

レイナは不思議そうな顔をしていた。対してマイヤとカイの頭の中には嫌な予感がする、とだけ直感が知らせていた。

「とりあえず俺だけ行ってみる。何かあるか分からんしな。お前らに参加しても平気そうな依頼だったら帰ってくる」

じゃあな、とカイは短く言って黒のフードを被り部屋を出て行った。

「あーあ。勝手に行っちゃった。レイナ、カイに兄が戻ってくるまで自由だと思うから、あたし出かけてくるね」

「分かりました。私はここに残っているので、ゆっくりしてきて下さい」

レイナは自分の持っている本を読み始める。マイヤはどこかへ行ってしまった。

その頃、カイは屋敷の玄関前にいた。

「ここか。この町で一番大きい屋敷っていうのは」

町の人に聞くと、ここが一番大きい屋敷らしい。確かに、無駄に広かった。

カイはいちいち誰かが来るまで待つという行為が面倒くさいと判断して、周囲に張り巡らされている網を簡単に飛び越える。

しかし、当然ながら不法侵入となるので屋敷についていた防犯システムが作動した。カイを堅い壁が何重にも覆う。

何をこの程度のおもちゃで、と思いながら思い切り壁を殴る。その衝撃が凄まじく、1発で全ての壁が壊された。そして、壊した先には50人ほどの魔道士や騎士がいた。

「なるほど。この壁は時間稼ぎでしかなかったらしいな」

「そういうことだ。さあ、おとなしくしろ！」

騎士達が一斉にカイに突撃する。

「おとなしくしているのはお前らのほうだ。俺は依頼を受けてここに来たんだぞ」

「黙れ！そのような指令は受けていない！！」

「……止まる気は無いらしいな。ならば、強引に黙らせるしかないぞ。影よ、自身を捕らえたまえ。光よ、敵の動きを妨げよ
シャドウウィップ、ライトウィップ！」

光と闇の初級魔法を唱える。彼らの影が急に伸びて自らを捕まえ、どこからか現れた光にも捕らえられて全員が動けなくなってしまう。
ていた。

「しばらくそのまま置いてくれ」

カイは動けない騎士達の間を通過して先にある屋敷の扉に向かって歩いた。そして、その大きな扉に手をかけて、開く。

想像通り屋敷の中も広がった。カイは思い切り息を吸い込むと、依頼書を提示しながら精一杯声を出し始めた。

「俺はこの依頼を受けた者だ。依頼主との見解を求める」

「あらあら。今回の依頼者はずいぶんと若いこと」

どこからか女性の声が聞こえた。それとほぼ同時に2階の左奥の扉が開く。

その女性は30代であろうか。どこからか聖母のような雰囲気を感じている。10人の男がみたら大抵の者が振り向くであろう。だが、カイはその手のことに関しては無頓着だった。

「今回は・・・というのは、前回にも似たようなことがあったのか？」

「いえ、ありませんわ。貴方が初めてです」

ならば、今回はなどと誤解を招くような言い方はしないでほしいと密かに思ったカイだったが、今は関係の無いことを話している暇が無かったので、本題に入った。

「依頼を受けたカイ＝ストール＝レッドだ。依頼の内容を説明してもらったためにここまで来た」

「まあ、そう焦らなくてくださいな。まず、貴方の实力を知るために私の息子と戦っていただきます。もし勝てたら、教えさせていただけます。では、こちらへどうぞ」

女性はカイを屋敷の先にある中庭に案内した。そこには、女性の息子らしき男が立っていた。

「これが私の息子のカルマです。油断していると、返り討ちにあうので、気をつけてくださいね」

「・・・・・・お前、ここの息子だったのか」

カイの目の前にいるのは、先日勝手に戦いを挑んできたカルマだった。

「カイ。君がこの依頼を引き受けてくれる人だとは思わなかったよ」

互いに驚いた顔をしている。まさかこんなところで再び会うとは思っていなかったからだ。

「まあ。2人とも友達だったの？まあいいわ。早く始めましょう」

「いいえ、俺はコイツの友ではない」

カイは即座に否定する。カルマもそれに同意をした。女性ならどいう関係？、と言いたそうげな顔つきで眺めている。

「母上、僕と彼が戦う必要はありません。彼は既に僕に勝っています。それも圧倒的な力の差で」

「……！貴方が負けたですって？それはいつ、どこで！？」

母親は自分の息子がもう既に負けを認めていることに驚いていた。何故なら、実力としては一流の騎士と同等かそれ以上の物を持っているからだ。

「昨日のことです。僕が彼に勝負を挑んで、傷ひとつつけられることなく負けました。この剣も1度折られてしまいましたし」

「剣！？あの剣が折られたというのはですか？しかし、今までおられた形跡などありませんでした」

「ああ、それは俺が修復の術を使っただけだ」

カイが真・魔法剣のことを除いて一部始終を説明すると、驚いてはいるようだが反面納得しているようだった。

「カイ＝ストール＝レッド・・・ストール・・・なるほど。貴方が
あかめ赤眼のストール」ですか」

「・・・・・・・・それをどこで？」

カイの出している雰囲気が一気に変わる。今までよりも相手を見る目が鋭くなっていた。

「まあそういうことに少し詳しくて。でも、間違いではないようですが？ 貴方の反応を見る限りは」

「・・・・・・・・俺の実力は、保障する。あんたらを密かに護衛しているそこに隠れている奴は余裕だし、上級の魔物でも何でもどうぞ」

「いつから気がついていました？」

カイがその気配を感じていたのは最初からだった。どんなにうまく隠れていてもカイから見れば丸分かりだった。

「確かに実力はおありのようですね。では、私も自己紹介をいたしましょう。スアラ＝ギルです。一応挨拶しておくけど、息子のカルマ＝ギルよ」

「……道理で俺の通り名を知っている訳だ。“大陸一の情報屋 スアラ” だろ？」

スアラは黙って傾く。その顔は笑顔だった。

「それでは依頼の内容について説明させていただきます。その前に確認です。この依頼は一度引き受けたらもう引き返せません。それでもいいですか？」

「愚問だな」

分かりました、とスアラは返事をして、説明を始めた

今回の依頼のランクはSS。内容は魔物退治なんだが、正確には防衛戦。近々アラドを治めている大宮廷の近くに空間の歪みが見られているらしい。

その規模が今までより半端じゃなく大きくて、中から出てくる魔物を宮廷の人たちだけでは抑えられないそうだ。なので、こうやって協力を要請しているらしい。

しかし、2つの謎が残っていた。

「私がどうやって貴方のところにこの手紙を送ったか気になりますか？」

カイは素直に傾く。そして、スアラは話し始めた。

彼女の持つ特殊能力。動物との念話。これは人とはできないらしい。だが、遠くにいる動物でも、信頼関係が築けていれば念話できるらしい。

「これが大陸一の情報屋の情報を仕入れる秘密よ。内緒にしておいてくださいね」

どうやら秘密事項らしい。真剣に約束をしてきた。カイも喋るつもりは無かったが。

もうひとつ。この情報をどこから仕入れたかだ。

「それも同じよ。動物達からの念話」

両方の謎が解けてしまったので、細かい話を聞くために屋敷の中に入る。2階の右奥の部屋に入ると、色々と書いている紙が置いてあった。

「それが私が知っている限りの情報よ。持って行って」

「分かった。もうひとつ質問がある。これに俺の仲間を連れて行っているかい？」

「いいけど、その子達にも口止めはしておいてね。町の人たちに聞かれちゃったら大変なことになるから」

「了解した。では、早速行くでしょう」

カイが屋敷を出ようとする。それをカルマが引き止めた。

「僕も連れて行ってくれ。少しは何かの役に立つはずだ」

「……いいだろう」

カイとカルマは宿に戻った。レイナはいたが、マイヤがまだ帰ってきていなかった。

「・・・・・・・・あの馬鹿が。少し待ってろ」

そういつて、カイが何か目を閉じて呟く。数分後、マイヤが息を切らせて帰ってきた。

「か、カイ兄。急いで戻ってきたよ。ま、まだ大丈夫だね」

「・・・・・・・・ギリギリだがまあいいだろう」

何があつたのか知らないが、マイヤは安堵の息を漏らしていた。全員そろつたので、依頼の内容の説明をする。まだ多少時間があつたので、出発は明日になった。

話しているうちに日が沈んでいたので、それぞれが思いながら、次の日を迎えた。

3章 〽特別依頼〽（後書き）

Merry Christmas!!

・ ・ ・ ・ ・ 今日ももうすぐ終わりですが（汗
更新遅くなりました。闇桜です。

何故こんなに忙しくなってしまったんでしょう．．．．．
と、言う訳で、なにやら派手に動き回りそうな予感です。では!!

3章 大宮廷

セトを出発して、大宮廷カラミアに移動するカイたち。

「俺達個人の動きを説明する。相手はどうするつもりだか知らんが、殆どが大宮廷の護衛に回るんだろう？」

「ああ、そりゃそうだろう……って、まさか君は突っ込む気かい!?」

1000もの魔物の中に突撃するような発言をするカイに、カルマは驚いていた。

「そうだ。俺とマイヤは歪みの近くまで行って直接叩き込む。カルマ、お前には大宮廷の護衛の指揮を頼む。レイナは他の魔道士たちと行動を共にしてくれ」

淡々と説明していくカイ。2人で突っ込むのは無茶を通り越して無謀だ、特にマイヤは自分より小さいわけで……

「んな……ちょっと待ちたまえ。確かにあれを使えるお前が前線に向かうのはまだ分かる。だが、この子も前線に立つとはどういうことだ!?」

カルマはマイヤを指差しながら言う。当たり前だが、マイヤは大宮廷にいる騎士やカルマよりも圧倒的に強いからだ。

「ちょっと、人に指差しながらこいつ呼ばわりは酷いんじゃない? 何? あたしが前線に立つのが不満なの?」

軽く見られているのが気に入らないらしく、若干キレ気味のマイヤを無視して、カルマが言葉を続ける。

「大ありだとも！何で僕より弱そうなちびつ子が前線に出て、僕が護衛の指揮をやらねばならんだ納得がいかない！」

ちびつ子。そういわれたのが決定打だったのか、マイヤから怒りのオーラが見えた気がした。

「あたしより弱い人にちびつ子呼ばわりされたくないわよ。ねえカイ兄。この人切り刻んでいい？」

「な！？何を言っているんだい？僕が君より弱いなんてありえないじゃないか。その勝負、受けて立とう！」

「マイヤさん、殺しちゃ駄目ですよ？」

「思い切りやっていいぞ。レイナの回復系魔法の練習台になつてもらうのに最適だ。だが、殺すなよ。ギリギリまで追い詰めていいが」

「やった〜！うふふふ。あんたなんか寒月だけで十分だよ」

「ふん。返り討ちにしてあげますよ！」

こうして、マイヤ対カルマの試合が始まった。

……数分後、そこには傷だらけで気絶しているカルマの姿と、満足げに刀を鞘に収めたマイヤの姿があった。

それも当たり前のことである。あのカイから直々に特訓をしてもらっているマイヤが、そう簡単に負けるはずが無いからだ。

そして、先日マイヤが言った通りに圧勝だったので、レイナは自分の実力の無さを情けなく思ってしまった。

「レイナ、練習だ。やってみろ」

「はい。風よ、癒したまえ。ヒール」

カルマを温かい風が包み込む。その風に宿っている癒しの力がカルマの傷を塞いだ。が、傷の数が多いのと元の魔力が少ないので全ては回復しなかった。

数回同じ事を繰り返して完全に傷が塞がる。

「こんな男はロープかなんかで繋いで運べば平気だよ。いや、むしろ置いていこうよ、カイ兄」

「俺もその案に非常に賛成したいところだが、そうもいかない。とりあえず今はこいつが必要だ。だから縄で引っ張っていく」

「そ、それもどうかと・・・・・・・・」

とんでもない発言をしたマイヤとカイ。カルマの存在意義を少しだけ哀れんだレイナは、一応助け舟を出すことにした。

「ライトウィップ」

カイが魔法で光の縄を作り、カルマに巻きつける。そして、そのま

ま引きずって歩き始めた。

「立ち止まってないで行くぞ。早くしろ」

「……………本当に引きずっていくんですね」

レイナは顔を引きつらせて言う。だが、もう駄目だなと思って助けるのは止めた。

更に半日ほど歩くとようやく目的地にたどり着いた。戦いで気絶したカルマが先程起きたので、中に入れるように指示した。

「ここですよ。大宮廷カラミアは」

そこにあつたのは黒く、四角い巨大な建造物。どこから見ても人が住んでいる気配はなさそうだ。

「……………これなんですか。ずいぶん変わった建物ですね」

レイナは初めて見る物に対して、あまり興味なさそうな声で感想を言う。

「ありました。入り口はここです」

カルマが指を指して言う。しかし、そこにあるのは壁だった。

マイヤとレイナはぶち破るのだろうか？と思って壊す準備に入る。

……………どうやらカイの考え方が少しずつ付着し始めたらしい。

「や、やめたまえ。そういう仕掛けではない。ここは魔力で扉を隠してあるんです。だから、普通は見えませんか？」

本気で壊そうとしていた2人を慌てて止める。

「な、なんだ。そうだったら早く言ってよ。じゃ、早く開けて」

「ち、ちよつと待っててくださいね」

カルマが慌てて作業に入ろうとする。しかし、その作業は既に終わっていた。

「ずいぶん簡単な仕掛けだな。防犯にもならんぞ」

カイが開けたらしい。簡単といつてはいるが、実際はそこそこの時間が掛かる作業だ。

「カイ・・・君は本当に何者なんだい？」

「ただの旅人だ」

簡潔に言い返して出現していた扉を開ける。その先には、地価に下りる階段があった

下りたところにまず見えたのは、本。どこまで見ても本、本、本・・・とにかく本だらけだった。

「本が多いですね」

「ええ。ここは大陸一の書蔵庫とも言われていますからね」

カルマは自慢気に言いながら、棚に整理された大量の本の間を通過して更に奥へ案内していく。

もうひとつ下に下りると、そこは居住スペースとなっていた。いろ

んな人が住んでいるらしい。食堂や公園のような場所もあった。

「ここから先にはどうやっていくんですか？もう階段は無いみたいですけど」

「まさか、迷った訳じゃないでしょうね」

もし迷っているのなら即刻斬る！というような殺気を放ちながらマイヤが聞く。

カルマはその殺気を無視して言葉を続ける。

「いえ、迷っているわけではありません。ここから先は更に強い結界で守られているのです。だから、簡単には見つからないんですよ」

「何で階段の場所が移動するのよ」

「階段じゃないからですよ。あ、ありました。ここです」

カルマは廃れた廃墟の中に入っていく。他の3人もそれに続いていった。

彼は小さく何かを唱える。すると、地面から四角い板が出現した。その板の中は、薄く輝いていた。

「ワーフゲート
瞬間移動装置か」

「ご名答です。では、行きましょう」

カルマが板の上に乗る。すると、一瞬でカルマの姿が消えた。

「すごい。面白そうだね！じゃ、次あたしね。マイヤ、いきまーす！ー」

マイヤも転送先に移動する。

「あ、待ってくださいよマイヤさん。じゃあカイさん、お先に失礼します」

レイナはカイに一礼してそそくさと板の上に乗る。レイナも転送先に移動したようだ。

カイも板の上に乗ろうとする。しかし、乗る直前になにか悪寒を感じた。この先には何かがある、と本能が告げてくれているらしい。

しかし、行かないことには先に進まないのも確かだ。ここ最近急激に回数が増えた深いため息をついて、カイも板の上に乗る。

カイの姿も一瞬で消え、転送先に移動する。4人を転送させた板は静かに地面の中に埋もれて言った。

移動した後、カイは早速後悔の念に襲われることを、まだ誰も知らなかった。

3章 〱大宮廷〱（後書き）

こんにちは、闇桜です。

年内に何とかもう一度更新できてよかったです！そして、いつも読んでくださっている方、感想を下さった方、ありがとうございます。あれは、作者の強い励みになります。

・・・・・・なんだかカルマさん、踏んだり蹴ったりですね。少しだけお気の毒です。

では、よいお年を！！

3章 くカイの弱点く

移動した先は、小さな部屋だったひとつだけ扉がある。どうやらその先に全員いるらしい。

扉を開ける。その先には雲が広がっていた。カイは信じがたい光景を目にして、慌てて扉を閉じる。

さっきの光景は何かの間違いだ、幻覚だ。そう思い込んで、もう一度扉に手をかける。その先にあったのは、やはり先程と同じ光景だった。

カイはその場に呆然と立ち尽くす。その顔色は悪く、普段の彼からはまったく想像できない姿だった。

「カイ兄、逃げ出したいのは分かるけど、依頼受けちゃったんだから諦めてこっちきて」

涙目のマイヤがカイの手を引っ張って進んでいく。その額には、大きなこぶがあった。

「……………いったい、何をしてあんなったのだろうか？

「そうですよ。いきなり固まっちゃって、どうしたんですか？……………マイヤさんのそれも」

レイナは何がなんだか分からないというような顔をしている。カルマも同じような顔をしていた。

「あ、あたしのこぶ？さつきワープしたよね。そのときに着地に失敗しちゃって、頭ぶつけたんだ」

額のこぶをさすりながら答えるマイヤ。その答えを聞いた2人は、笑いをこらえるのに苦労していた。

病人のように真っ白な肌をしているカイが、レイナの質問に答える。

「俺は高いところが苦手なんだよ」

その声も弱弱しかった。

カイの意外な一面を見て、カルマが誰もが考えるであろうもっともな質問をした。

「ほお、お前ほどの輩が高いところが苦手ですか。とても意外ですね。何か理由でもあるんですか？」

少し黙ってから、カイは静かに語り始める。

この話は、約15年前に遡る――

「なあ、どうしてこんな何も無い場所に來たんだ？親父」

まだ10歳の少年だったカイは、断崖絶壁のそばに立っている父親に理由を尋ねる。

カイの父親、ドルマクスは近くにカイを呼んだ。カイは素直に近寄り、崖の前に立つ

「決まっているだろう。こうするんだ」

ドルマクスは、笑顔でカイを崖のギリギリに立たせる。

「頑張つてこいよ！」

「は？」

カイはいきなりドルマクスに押される。

急に押されたカイは思わず前に足を踏み出す。だが、当然そこに足場は無く、カイはバランスを崩して崖の下に落下し始める。

「下には魔物もいるからな。気をつけるよ」

そこの見えない谷底に平然と自分の息子を突き落とすドルマクス。

カイは成す術なく谷底に落下していった。やがて、谷底が見えてくる。そこには沢山の魔物が獲物を求めて群がっていた。

「あのクソ親父ーーーーー！！」

こんな場所に息子^{カイ}を突き落とした父親^{ドルマクス}を恨みながら1匹の魔物をふんずけてクッション代わりにする。

そして、仲間を倒された魔物たちが怒り、攻撃が開始される。

カイと魔物たちの戦いが幕を開けた。

この戦いが終わったのは、数日後のことであった。

ぼろぼろのカイが崖をよじ登ってくる。

「おー。我が息子よ、無事に帰ってきたか。まあ、帰ってこなければ困るがな！わっはっはっはっは」

「わっはっはっはっは、じゃねえ！！馬鹿親父！今回も本気で死ぬと思ったじゃねえか」

今回も、という言葉は非常に気になったが、あえてスルーすることにした。

「まあ、そう言うな。確かに死ぬような思いはしたかもしれないが、戦いには慣れただろう?」

確かに、そうなのだ。カイはこの数日間レベルが上がった。無駄だけではなかったのだ。

こんな馬鹿みたいな頭をしていても、ドルマクスは戦いの才能はしつかりと持っていた。バトルセンス

そのドルマクスの子どものカイも、当然のようにその遺伝子が組み込まれている

「強くなったかもしれないけど、もう高いところはやだ……」

ため息をつきながら愚痴るカイ。だが、その愚痴はドルマクスにもしつかり聞こえていた。

「この程度できつい言われても困るなあ。まだまだ楽しい修行は沢山あるから、待っててね。さて、次は何にしようかな?」

彼の言う楽しいという言葉は、修行をしている者にとって恐怖の対象でしかなかった。

酷いときには見ているだけの人ですら逃げ帰ってしまうほど酷い。

どうしてこんなのが自分の父親になったのだろうか、カイは密かに思っていた。

3章 くカイの弱点く（後書き）

あけましておめでとうございます。闇桜です。

カイの意外な弱点、どうでしたか？感想をいただけるととても嬉しいです。

まだ殆ど進んでいない3章です。彼らは大宮廷に何をしに行ったのでしょうか？目的を忘れているようです。

では、今年もこの小説をよろしく願います！！

3章 く戦前のひととき

「・・・・・・・・・・・・・・・・ということがあったんだ」

過去の話聞いていた3人の顔色が、蒼白になっていく。

「そこに落ちて死ななかったカイさんも十分化け物に近いと思いますよ」

と、レイナ。

「何回聞いてもその話はなれないよ・・・・・・・・」

と、マイヤ。

「君の父親はサディストか何かかい？」

と、カルマ。

カイはカルマだけを殴った。それも、7割の力で。殴られた本人は吹き飛ばされて壁に衝突。完全に気絶していた。

「壁、あったんだ・・・・・・・・」

「泡噴いてますけど大丈夫なんですか？あれ」

「知らん。親父に失礼なことを言ったあいつが悪い。俺は責任を取らん」

言うてはいけないことを言ってしまったカルマに、2人は少しだけ同情した。

そして、彼の過去について聞くのはもう止めようとも思っただのであった。

「……取り込み中すまないが、貴方たちが雇われたという人かい？」

若い男がカイたちに話しかけてくる。

「そうだが。一応名乗っておいたほうがいいな。カイだ。こっちはレイナとマイヤ。あそこでのびているのはカルマだ」

「カルマ……というと、ギル家のご子息で？」

「そうだ。少し待っていてくれ、起こしてくる」

カルマの頭を殴る。ゴン！という音がよく響いた。

「はれ？此処はいつたい何所だ？何で僕はこんな所にいるんだろう」

「呆けてないで早くこっちに来い。説明が聞けないだろ」

「は？……そうだった。しかし、あんなに強く殴った君がいけないのでは？」

「お前が変なことを言ったのが一番の原因だろう」

確かにカルマは変なことを言ったが、それを殆ど手加減なしで制裁

を加えたのはカイだ。

不公平だ、とぼやきつつカルマは人が集まっているところに向かった。

「今度こそ全員がそろったようですね。それでは、現状と今後の動きに關しての説明をします」

彼らは宮廷の魔道士と騎士。普通の魔道士や騎士より遙かにレベルが高い存在だ。そして、彼らがアラド国を統一している。

その宮廷の人たちがわざわざ依頼した物だ。それだけでどれだけ困難なものが理解できる。ランクはSSだろう。

次に、その依頼の内容。

簡単に言うと、近頃この宮廷の近くに頻繁に空間の歪みが発生しているらしい。一日に2、3回発生したこともあった。

今までは小さい歪みだったが、今回ののは大きすぎて処理に時間が掛かるらしい。だから、宮廷の防衛を頼む、ということだ。

「でも、何でその歪みの中から魔物が出てくるって分かるんですか？もしかしたら他の物かもしれないじゃないですか」

レイナが最もな質問をしてくる。

「その前兆で中から出てくる物質が分かる。それに、こういう大規模な歪みは大体が獄界に通じている」

獄界。魔物たちだけが住んでいると言われている異世界。普通、空間同士が繋がることは無いが、

何かが原因で穴が開き、そこから出てくる事がある。その穴が、歪みである。

「君は・・・カイと言ったね。何所で、それを？」

獄界は一般に知らされている知識ではない。そもそも、魔物が歪から出現するということすら一部の者しか知らないのだ。

そして、その知識をカイが持っている。それに不信感を抱いたらしい。

「俺はただの旅人だ。この話も風の噂で聞いたのだが」

「まあ、今はいいでしょう。では、話を続けます。その歪みから出てくる魔物の数が千体を超える事が分かったのです」

魔物が千体。その数の魔物が一斉に飛び出してくる。想像がつかないだろう。

「・・・なるほど。俺達はその足止めをすればいいんだな？」

「はい。私達の何人かで歪みを正常に戻す作業をします。その間だけ宮廷を護って欲しいのです」

「了解した。だが、他の町への侵攻はどうする？」

「各地には非常事態に備えてもらっています」

その言葉の中には、気休め程度ですが、という言葉が隠されていた。

「ならば、町へ被害を及ぼさないように前線に出る。マイヤ、準備をしておけ。マイヤとカルマはここに残って他の奴らの援護を頼む」

「了解したよ、カイ兄」

「分かりました」

「分かりました。宮廷の皆さん、彼とマイヤさんは通常ではありえない程の実力を持っています。我々は宮廷の護衛だけにしましょう」

「しかし……」

「安心しろ、逃げたりはしない。どのくらいの力かというのは、そのときに」

カイははっきりと宣言をした。

本格的に歪みが開くのは明日らしい。なので、カイたちは部屋を借りてそれぞれ休息をとる。

そして、次の日。大規模な戦いが幕を開ける。

3章 く戦前のひととき（後書き）

こんにちは、闇桜です。

・・・・・・すいません。しばらく更新できません。色々と事情が重なってしまって、次がいつになることやら、という感じなんです。ということで、またいつか会いましょう!!

3章 く戦開幕く

翌日の昼ごろ、カイとマイヤは目的の場所の近くまで来ていた。出現すると予想されている場所から100mも離れていない場所に居た。

「マイヤ」

「なに？カイ兄」

不意に声をかけられ、返事をする。

「今回はここに俺たち意外誰もいない」

カイの言っていることが良く分からなかった。

「そうだね。でも、それって見れば分かるよ。で、それがどうしたの？」

「まだ分からんか。つまり――」

遠慮なしでやれということだ」

「あ………そっか」

いまさらのことに気付いたマイヤ。そして、その表情は徐々に喜びに包まれ、目は希望で輝いていた。

「ホントにいいの？」

最後に確認を取っておく。もしかしたらカイが冗談で言ったかもしれないからだ。

「何度も言わせるな。後1回しか言わないぞ。遠慮なしでいけ」

やはり、「冗談を言わないカイ。だが、本人の表情も心なしか楽しそうだ。

「……む？始まるみたいだな」

すぐ傍の空間に肉眼で確認できるほどの歪みが生じる。

マイヤは両手に刀を持つ。

カイは両手を広げ、詠唱を開始する。

「冥王グラムスよ。汝の力にて我の思いを聞き届けたまえ。汝の力、

全て解き放ちて我には向かうものに終焉という名の恐怖を与えたまえ」

その右手に、闇が集まる。

「光の神、ユカルミアよ。我、我が魔力を持つて主に問いかけん。我に仇名す敵を浄化し、滅することを望む。もし、その願いを聞き願えるならば、汝の力にて我が敵に天誅を与えたまえ」

今度は左手に、光が集まる。

「奥義」

刀に剣気を込める。

そして、そのタイミングを待つかのように、歪みが最大になって中から大量の魔物が出現する。

「ギガ・ブレイク！リア・フォンド！！」

「夢幻桜華！！」

それぞれの刀から夢幻桜華が繰り出され、魔物の群れと衝突する。

カイは完成された闇の球と光の球を魔物の群れの中に投げ込む。投げ込まれた2つの球は拡大して魔物たちを包み、大きな爆発音と共に消滅させた。

「極限式【二】、『出』暁。マイヤ、今回の成績でこれからの修行が決まるぞ」

「えっ！・・・・・・・・・・気合入れなくちゃ」

これから始まる戦を前にして気楽な2人。だが、本人たちはいたって真面目だ。特に、マイヤは。

「修行量増やされないように頑張らなきゃ」

「何をぼさつとしている。行くぞ！！」

「うあ？・・・はい！！」

そして、2人は魔物の群れの中に突っ込んで行った。

「始まりましたね」

「ああ。しかし、さっきの光はなんだったんだ？」

大量の魔物の出現と同時に発生した黒と白の爆発と、青と赤の何か。カイとマイヤが放った物が大宮廷からも見えたのだ。

「赤い奴と青い奴はわからんが、黒と白の爆発は・・・恐らくだが、闇の最上級魔法のギガ・ブレイクと光の最上級魔法のリア・フォンドだろう」

「なっ！あれを使っただと！？何を考えてるんだ・・・いつたい・・・」

「しかし、使ったのは誰だ？あの小娘からは魔力を感じられなかったが」

「なら・・・あの男は同時に使ったということか。ありえん・・・」

大宮廷で待機していた魔道士たちは驚いていた。そしてそのことで集中力が散漫になってしまい、敵が接近しているのに気付けないでいた。

「火よ、我が剣に宿りきたれ、魔法剣！」

飛んできたメテイル蠅螂のような魔物を、カルマが斬る。相手にとって弱点属性だったので一撃で倒すことができたのが幸이었다。

「あの2人だけでは抑えきれません。皆さんも集中して撃墜に励んで下さい。作戦としては、必ず2〜3人で行動する、これだけです」

生存率を上げるためにペアを組む。これは、大規模な戦闘では当た

り前のことだ。次々と来る魔物を、協力して倒していく。

だが、この戦いは始まったばかりだった。

3章 〱戦開幕〱（後書き）

お久しぶりです。闇桜です。

やっと更新することができました。・・・でも、次の更新がいつになるか分かりません。

気長に待っていただけるとありがたいです。

では、失礼します。

3章 く混戦く

魔物たちが出現し始めて数十分。マイヤとカイは自らの武器を振るい続けていた。

マイヤはやや劣勢で傷がつくときもあるが、カイは殆ど無傷だといっても良かった。

「二連一文字斬り！」

「破碎剣！」

マイヤは2本の刀かを振るい、剣気を飛ばす。カイも地面から数本の剣気の柱を飛ばし、敵を殺していく。

「カイ兄！これじゃきりないよ。もうとつくに数が千を越してるし」

「それでも持ちこたえるだけだ。まだ耐えられるだろう？・・・ん？あれは・・・」

カイは上を見上げる。そこには、巨大な影があった。

「上級のシャドウワイバーンか。これが暴れると厄介だな。マイヤ、ここは任せた」

「え？ちよつ、カイ兄！？」

カイは身体強化の術を使い、シャドウワイバーンの背中まで跳んでいった。

それとほぼ同時に、魔物たちに囲まれる。

「奥義、狂気の舞！」

マイヤの周りを剣気が飛び交う。とりあえずは倒せたが、すぐに同じ状況になってしまう。

「これじゃ堂々巡りだよー!!」

勝手に置いていったカイに文句を言いながらも、次々と魔物を倒していくマイヤ。

「刀伸斬！」

気を練り上げて、刀身を長くする。長さが倍以上になっている。

「あっははははは。弱いねえ。君達は!!」

……意外と楽しんでいるようだ。刀が伸びている状態で、複数の魔物を斬りつけていた。

カイはシャドウワイバーンと戦っていた。堅い鱗に覆われている体は、何も強化していない刀の攻撃を簡単に弾き飛ばしていた。

「……使つのがめんどくさいが、使うか」

暁を両手で構え、気を込める。

「絶技、破堅突刃。一の型《連撃》」

普段より格段に強い剣気を込めて、それを飛ばす。10にもなる強力な剣気は、シャドウワイバーンに命中した。しかし、まったく効いていない様子だ

「二の型《長突》」

剣気を刀伸斬とは比較できないほど長く伸ばす。もはや槍より長い長い刀を、刺した。やはりダメージは無いようだが、ひびを入れることは出来た

そこで、シャドウワイバーンが炎を吐いてきた。暁に剣気が残っている間が勝負なので、多少の傷を覚悟で炎の中に突っ込む。

「三の・・・型。《双破》」

ひびが入っているところを思い切り2度斬りつける。すると、ひびが更に大きくなった。だが、攻撃の隙を疲れて背中を大きくひつかれる。

「がつ！・・・最後だ。四の型《砕散》」

ひび割れているところに、暁を刺す。今までの攻撃で脆くなっていた鱗が割れて、暁が深く刺さった。

「消えろ」

まだ残っている強力な剣気を、一気に拡散させる。いくら堅い鱗に覆われていても、内部から刺されてはどうにもならなかった。シャドウワイバーンは数多の剣気によって、血飛沫をあげて破裂した。

絶技、破堅突刀とは、どうやら一点を集中して攻撃して、脆くなつたところで内部から殺すという方法らしい。いくら堅いからに覆われていても、意味が無かった。

カイは地上に足を着き、一息ついた。その直後、カイの頭上をまたもや大きな影が飛び去って行った。

まだシャドウワイバーンがいたらしい。今から追いかけるのも面倒だし、級位も下だったので、ほかに任せることにした。幸い？宮廷に向かっているようだ。

暁を鞘にいれ、それぞれの手に火と雷の魔力を出す。

「真・魔法剣《氷》《雷》！」

火の剣と雷の剣を持ち、剣気を集中させる。

「奥義、夢幻桜花」

青と黄色の花びらが、空を舞う。その威力はマイヤより上をいつていた。

「奥義、無限双斬」

流れるように刀を動かす。刀を動かしている間、大量の剣気が四方八方に飛んでいった。カイの周りから一時的に魔物が居なくな

つたが、またすぐに来た。

「きりが無い。引き受けなければよかったかもしれんな」

少しか後悔の念を持ちながらも、剣を振るい敵を倒していくカイだった。

4分の3以上の魔物がカイとマイヤが戦っているところにいた。残りの魔物の大半はこの宮廷に向かってきているようだ。

「敵を捕らえ土の雨で切り刻め、クロスクエイク！」

「光の刃よ、敵を切りたまえ、ライトスラッシュ！」

宮廷にいる魔道士や騎士たちは、やや苦戦しながらも、大きな傷を負うこともなく、善戦していた。

いくつかのグループに分かれて戦闘を行うという作戦もうまく機能しているようだ。

「くそ、きりが無い」

「でも、中心地に取り込んだ二人はこれより圧倒的に多数の魔物をたった2人で相手してるんだ。弱音を吐くな」

「まったく・・・化け物ですか。あの人たちは・・・氷よ、その力

で敵を滅せよ、スプラアイス！」

カルマのグループの人たちが会話をしながら敵を倒していた。一番うるさかったが、一番活躍しているのもここだった。

ふと、頭上が暗くなる。上を見上げると、シャドウワイバーンがいた。

「うわっ！」

「ぎゃあ！」

ほかに一緒に戦っていた魔道士と騎士が、その巨大な尻尾に薙ぎ払われ、気を失っていた。

「まずいですね・・・下級ですが、少し苦労しそうです。レイナさん、強化魔法使えますか？」

「は、はい。防御力上昇の魔法でしたら」

その大きさに驚きを隠せないまま、レイナは答えた。

「じゃあ、それお願いします」

「分かりました。我に味方する者に加護を、ガラム！」

カルマの体が一瞬だけ淡く光る。それは、魔法が成功した証拠だった。

「ありがとうございます。では、少しだけ離れて援護をお願いします。余裕があれば、その2人の保護をお願いします」

最後のそう言うと、自分の剣を手にとって暴れているシャドウワイバーンのほうに向かって行った。

「ワイバーン！お前の相手はこの僕だ。覚悟しろ！」

魔法剣《氷》を使い、斬りつけようとする。だが、その鱗に弾かれてしまった。何度か試しているうちに少しずつひびが入っているようだ、直接的なダメージは与えられなかった。

「予想通り堅いですね・・・どうしましょうか」

「カルマさん！後ろ、危ないです！！」

レイナが叫び、咄嗟に体を反転させて防御の姿勢をとる。何かに殴られたようだ、吹き飛ばされる程度で済んだ。

「大丈夫ですか！？」

「ええ。なんとか・・・って、あれはまずいでしよう！！」

シャドウワイバーンが炎を吐こうとしていた。すかさずレイナが前に出て、詠唱をする。

「火の精霊よ、我らに加護を。ファイアウォール！！」

火に対しての魔法障壁を張る。そのおかげで、なんとかその炎があたることを防いだ。

「氷の神テラよ、彼の者に悲しみの氷を。アイスブランド！」

先程目が覚めた魔道士が氷の最上級魔法を唱えて、ワイバーンを倒す。

「すまないね。大丈夫だったかい？」

騎士がカルマとレイナに手を貸す。

「はい、なんとか。ありがとうございます」

「いや、こちらこそ申し訳ない・・・それにしても、予想以上に魔物がこっちに來ないな。どうやら足止めを食くらってるんだろ」

「足止め・・・ですか？」

「どうやって、というように聞きなすレイナ。」

「ほら、君の仲間の2人がいるだろ？多分、あの2人が相当な数を相手しているようだ」

「うっ・・・流石というべきなのでしょうが、なんだかとてもなくレベルの差を感じます」

「だな。しかし、あの2人は本当に何者なんだ？お前さん、何か知ってるか？」

当然ではあるが、レイナは2人のことを殆ど知らなかった。特に、カイのことは。

「はい。殆ど分からないですよ。カイさんたちと旅を始めたのは最近のことなんです。私が知っているのはマイヤさんが魔法が使え

なくて、カイさんはそのマイヤさんの師匠で命の恩人だということです」

「そうか・・・」

「と、いうことは彼は氣と魔力の両方を使えるということか」

「凄いな、彼は。後でスカウトするか？」

「それは無理だと思います。何か目的があつて旅をしているみたいですから」

何が目的か、誰を探しているのか詳しくは知らないが、きっとそれが終わらないかぎりずっと旅を続けるのだろう。

なんとなく、レイナはそう感じていた。

「そうか・・・残念だな」

騎士たちは本当に残念そうにため息をついていた。そこで、中心部の様子がおかしいことに気付く。

雨が降っているのだ。その部分だけ。

「何なんだ、あれは・・・」

雨が降っている部分は、とても大変なことになっていた。

3章 混戦 (後書き)

お久しぶりです。闇桜です。

えへ。ようやく用事が終わったので、これからきちっと更新をします。多少不定期になりますが、なるべく早めに更新しようと思います。

これからも、宜しくお願いします！

3章 く枯渴する雨と戦の終幕く

「せいやあ！！」

マイヤは、カイが去ってから休むことなく刀を振るい続けていた。次々と魔物たちを斬り伏せていく。だが、すぐに別の魔物が現れて戦闘が始まってしまう。

休むことができない戦闘で溜まる疲労と反比例するように、敵の数はどんどん増えていく。

「奥義、狂気の舞！」

この戦の中で何度も使った技を使うだが、最初に比べると、明らかにその力は鈍っていた。

「もう・・・流石に辛い！」

ふと、近くに隠れることが出来そうない場所があるのに気付いた。マイヤは、そこで休むために向かおうとする。

だが、これだけの数があると、必ずどれかの魔物に気付かれてしまうと思った。

休まなければまずい。しかし、このままでは休む場所に行くと見つかる危険性が高い。

この状況で、一つ賭けに出ることにした。

一掃することだ。少しでもそれで隙が出来れば、隠れることは出来

る。だが、体力を消費する技だ。何所まで体が持つか分からない。

「でも、やらなかったら消える・・・か・・・やるしかないでしょう！」

2本の刀を鞘に収め、寒月を抜き、剣気を込める。体力をかなり消費しているせいか、辛かった。

「絶技」

徐々に剣気を高めていく。その影響か、マイヤを中心に余波が風となって吹いていた。

「凱旋舞斬」

巨大な剣気が十数本出現する。そして、それが広範囲に飛び交い始め、魔物たちを無差別に斬り裂いていった。

この技により、一時的にマイヤの周りの魔物の全てがただの肉片と化した。その隙に、隠れる。

見つからないところに行つたところで、そこに倒れこむ。

「もう・・・限界・・・」

そのままマイヤの意識が薄れていく。極度の睡魔が襲ってきた。そして、それに逆らうことなく眠りにつく。

完全に眠りにつく瞬間に、何かが自分の前に立っているのに気付いたが、そのまま眠ってしまった。

マイヤは目を覚ます。意識を失う前と同じ場所に居た。だが、何かが違う。まだ疲れていて重い体を無理矢理起こし、周囲を観察する。そこには、草が少しも生えていなかった。いや、生えてはいるのだが、枯れているのだ。土も枯れて乾燥していた。

そして、魔物の姿もなかった。歪みを閉じたとしても、ここまで綺麗に片付いているのはおかしい。

「あ、いました！マイヤさん。無事ですか？」

「大丈夫だよ。それよりレイナ、これ、どうなってるの？」

「私たちも分からないんです。雨が降って、その雨が降ってるところにいた魔物がどんどん消滅していったんです。雨が止んでから急いできてみたら、草が全部枯れてたんです。」

「雨？雨が降ったの！？」

「ええ。ここも降ってましたけど・・・あ、すいません。この子の治療もお願いします。」

「了解した。一時の癒しを与えよ、ヒーリング」

マイヤを優しい風が包み、あっという間に傷が塞がる。疲労感も多少とれたようだ。

「そっか・・・分かった。ありがとう」

マイヤは何か理解したみたいだったが、他の人たちは分からないようだ。まだ首をかしげている。

「2人とも、無事か？」

カイがゆっくり歩いてきた。その両腕は力なくぶら下がっていた。

「カイ兄、その腕・・・」

「ああ、ちょっとな。だが、数日すれば元通り動く」

ちよつとで腕が動かなくなるのはおかしいと思うが、数日で元に戻ると聞いて、マイヤたちはとりあえず安心した。

「宮廷は無傷だったらいい。他の町もそこまで被害は無いみたいだ」

「お疲れ様です。治りきっていない傷もあるだろうし、宮廷に泊ま
つていきませんか？我々一同歓迎しますよ」

魔道士の1人が話しかけていた。とりあえずカイの腕が動くようにな
るまで、宮廷にお世話になることにした。

カイたちは移動しながら今回の戦について話していた。

「マイヤ、ようやく絶技を使えるようになったか」

「ん。カイ兄も見てたんだ。きっと、あの修行の所為だと思うよ」

あの修行というのがとても気になったレイナだが、内容が怖くて聞
けなかった。

「さて、戻ったら寝るか」

「睡眠に貪るぞ〜〜!!」

無事？に大きな戦闘を終えた3人は、宮廷へ戻って行った。

3章 く枯渇する雨と戦の終幕く（後書き）

ここを書くのがなんか楽しかったです。

もつじき3章も終わりです。なんかあつという間な気がします・・・誤字脱字・質問などございましたら承ります。それでは、失礼します。

3章 く試合く

宮廷に戻ったカイたちは、借りた部屋で個々の時間を過ごしていた。2人部屋を2つ借りて、片方にカイとカルマ。もう片方にレイナとマイヤが泊まった。

カイとマイヤは殆ど寝て過ごしていた。特にカイは全く起きなかった。マイヤは食事はしたが、それすらしていないのだ。

レイナは魔道士の黒本を読んで過ごし、カルマは後始末で忙しく動いていた。

カイが起きたのは2日後のことで、ようやく起きたカイと共に、マイヤは宮廷の長に会いに行った。

「私はこの宮廷の長、アルメーダスペクニクルⅡサウダルククリアノウスⅡアシュロムケーダンベガ8世です。気軽にアルメーダとお呼びください」

・・・長の名前は、とにかく長かった。覚えるのに苦労しそうだ。

アルメーダスペクニクルⅡサウダルククリアノウスⅡアシュロムケーダンベガ8世が挨拶をする。

「アルメーダ、聞きたいことがある」

「ええ。私に答えることが出来る質問ならどうぞ」

「この国の王はスアラ＝ギルかどうかだ」

カイは、この問いにほぼ確信を持っていた。その証拠に、カルマとアルメーダの顔に驚きが走っていた。

「……どこでそれを知ったんですか？」

「まず、この国は宮廷に居るお前達が治めている。ということは、国王は別の仕事についていると考えるのが妥当だ。そして、もう一つ。今回の依頼の情報が本人から貰ったものだったからだ。いくら大陸一の情報屋と言えど、ここまで宮廷内部に干渉できるとは思えないからな。以上2つのことから、スアラ＝ギルがこの国の国王だと言っことを推理した。何か訂正は？」

「いいえ、無いですわ」

柱の影からスアラが出てきた。微笑みながら言葉を続ける。

「流石カイさん。気付かれるとは思っていませんでしたわ。では、こちらからも質問させていただきます。カイさんと……マイヤさんでしたね。貴方たちは、どこでその技術を学んだの？」

「あたしは、カイ兄から教えてもらっただけだよ」

「俺は、親父と母さんから教えてもらった」

2人の言っていることに嘘はない。そのことは、2人の目を見ることで確認できた。

では、とスアラが言葉を続ける。

「こちらの騎士と魔道士の1名ずつと戦っていただけませんか？カイさんは魔法で、マイヤさんは剣で」

その話を聞いた途端、マイヤの目が妖しく光った。逆にカイはやる気が無さそうだ。

「……遠慮なしでいいの？」

うきうきしているのであろう。少しだけ声が弾んでいる。

「殺さない程度ならいいんじゃないのか？」

流石に本気を出して相手を消滅させるのはまずいと思ったのだろう。どの程度手加減をするかをすかさず伝える。

「ええ、その程度でかまいません」

スアラもそれに同意した。

しかし、ここでこの条件に同意しておいて良かったという現実を、嫌でも知るのだった。

カイたちは城の外に出て少ししたところにある広い闘技場に来た。

「ここは年に一度行われる行事で使われる場所です。まあ、申請があればいつでも開きますが。ではまず、マイヤさん。貴女からお願いします。相手を殺さなければ魔法以外どんな技を使って頂いても構いません」

「え？ いいの？・・・でも、すぐに終わったらつまないから寒月だけでいいや」

「武器の使用もご自由にどうぞ。マイヤさんに戦ってもらうのはこのジョアンという騎士です」

呼ばれた騎士が少し笑いながら挨拶をしてきた。きっとマイヤをなめているのだろう。

後ろからも楽勝だな、とか遊んでやれ、とか言っていることから、完璧に分かっている。

「カイ兄」

「ム力つくかもしれんが、相手を殺害・消滅させることはしてはいけない。実力で言い返してやれ」

機嫌を悪くしているマイヤに、相手を殺さないようにアドバイスする。

「では、はじめて下さい」

その合図と共に、戦いが開始される。

「1回目。首を突かれて死亡」

——直後、ジョアンの後ろからマイヤの声が聞こえた。その手には刀、切先は彼の首を狙っていた。

「甘く見ないでほしいな。それじゃあたしがつままないし」

マイヤはあっさり、そして呆れながら言う。

マイヤは距離をとり、再び構える。ジョアンからも余裕の笑みが消え、真剣な表情になっていた。

今度は先にジョアンが仕掛ける。だが、そこには既にマイヤはいなかった。

「2回目。胴を切断されて死亡」

横にいた。

「もうつままないし、次で終わらせるね」

やはり、つまらなかったらしい。もう暇すぎる、といった表情だった。

「宮廷の連中はレベルが高いと聞いていたけど、この程度だったんだ。残念」

これは明らかに挑発だ。そして、ジョアンはその挑発に乗ってしま

う。

「大人をなめてんじゃねえぞ、クソガキ！」

「そうだ！やっちまえジョアン！！」

後ろにいる騎士たちからの罵声も響く。だが、それもすぐに終わった。

「黙れ。殺されたいのか？」

カイが殺気を放ったからだ。罵声を言っていた騎士たちの顔色がどんどん悪くなっていく。

「うわぁ・・・やっぱ怖いよね、あれ・・・・・・・・」

マイヤは呑気に感想を述べていた。それを隙だと思い、ジョアンはすかさず攻撃をする。

マイヤは、それを背を向けたまま受け流す。そして・・・・・・・・

「はい、3回目。1回目と同じく首を突かれて死亡ね」

峰打ちをして気絶させる。あっけなく勝負はついてしまった。

「ジョアン、戦闘不能。よって、勝者はマイヤ！」

勝利宣言を聞いて、カイのところに戻る。

「たくさん遊んであげたよ！」

「ああ。あれくらいで十分だろう」

騎士たちの宴は終わった。次は、魔道士たちの宴だ。

「次に、カイさんお願いします」

「相手は……アルメーダか」

「ええ。お手柔らかにお願いします。今回、使えるのは魔法だけですよ。」

「了解した。では、はじめるか」

審判の始まりの合図を無視して戦いが開始される。

「では、私から。ゲイル！」

「ライトニング」

同じ級位の対極魔法なので、普通なら相殺される筈だ。だが、雷は風に打ち勝ち、そのままアルメーダに向かった。

「エレキウォール！」

雷の魔法障壁を張り、その攻撃を防ぐ。やはり、その威力は衝突時点でかなり落ちていたようだ。

「では、一気に終わらせていただきます。火の神ラガよ、彼の者に怒れる炎を。風の神クロムよ、彼の者に嘆きの風を。土の神トール

よ、その力にて彼の者に絶望を」

「……闇よ、全てを切り碎け。光よ、聖なる力にて全てを浄化せよ」

「プロミネンス！エアクラッシュ！アースブレイカー！」

「クロスブレイク、クロススラッシュ！」

火と風の塊が出現し、地面が割れる。カイは地割れを避け、2つの塊の中心に魔法の発動場所を定める。

次の瞬間、火の塊の中心から黒い光の線が、風の塊の中心から白い光の線が無数出てきて、それらを崩壊させていく。

「そんな……闇と光と言えど上級魔法なのに、最大級魔法をこうも簡単に破るなんて……………」

「さあ、終わらせようか。あまりだらだらやりたくは無いからな。フレイム！ライトニング！バーニング！」

炎と雷がアルメーダに直撃する。その衝撃により空中に投げ出されたところで、爆発が起こる。

「アルメーダ戦闘不能。勝者、カイ！」

カイがマイヤのところに戻ると、率直な感想が述べられた。

「完璧とっていいほど遊んでたでしょ、カイ兄」

「分かったか」

「そりゃ、本来カイ兄なら詠唱しなくていい魔法を詠唱していたんだから、分かるでしょ」

「まあ、お前も遊んでたんだからいいだろ」

・・・などというなんともおかしい会話を繰り返していた。

「でも、物足りなかったなあ」

「ほう。それは奇遇だ。俺もだ。審判、ここはまだ借りれるのか？」

「はい。1日貸切なので、まだ余裕がありますよ」

「よし。マイヤ、やるぞ」

いきなりやるぞと言われても、分からない。いや、理解はしたのだが、やりたくは無かった。

「決まっているだろう？手合わせだ。お前は本気でこい。俺もそれにレベルを合わせる」

予想していた言葉をそのまま言われ、顔色がどんどん青くなっている。

「え、遠慮しておきます。疲れてるし」

「足りなかったんだろう？だったら、ちょうどいいじゃないか。それに、もう十分休んだ」

「ここにいる全員、危険だと思ったら逃げろよ。生命の保証が出来ないからな」

そして、特別試合の、カイ対マイヤが始まる。

「安心しろ、殺しはしない」

「もう・・・やるしかないんだ・・・だつたら、今度こそ勝つてやるう!!」

深いため息をついてから、気合を入れなおしてカイに突撃する。

カイはそれを避ける。そのついでに、マイヤから寒月を盗んだ。

「寒月借りるぞ」

「え？あ~~~~！盗られた!!」

「ほら、いくぞ」

カイがマイヤより大きい剣気を飛ばす。ギリギリのところで避けることができたが、目の前にカイが来ていた。

振り下ろされた刀を、2本の刀で受け止める。

「マイヤ。お前は力が無いんだから受け止めるな。受け流せと教えただけだ?」

「でも、どうせカイ兄は受け流させてくれないでしょ?」

「まあな。それに、せめて俺に極限式を使わせてくれよ」

カイが一度距離をとる。マイヤは何かを察したのか、急いで刀に剣気を込める。

「「奥義、夢幻桜花」」

闘技場に、花びらが舞い上がる。

そして、カイが出した半透明の花びらと、マイヤが出した赤と青の花びらがぶつかり合う。完全に人間離れしている戦いは、暫く続いたのだった。

結局カイ勝ちに終わり、帰ってからゆっくり休憩を取って、次の日に3人は出発した。

「行ってしまったか……」

「残念でしたね。彼らを誘うことが出来なくて」

カルマが残念そうに言う。

「ああ。だが、彼はどこか信用が出来ない。なんせあの情報屋が殆ど情報を持っていなかったからな」

「そうです。私が知らない情報があったなんて、正直驚いています」

そう、今まで知らない情報は無いと言われていた大陸一の情報屋は、カイの存在を殆ど知らなかったのだ。怪しがるのは当然だろう。

「まあ、いずれ会えますよ」

「ああ。そうだな」

カイたちが去った後を見ながら、色々と考え事をしていた、宮廷の人たちだった。

「カイ兄、何であんなに力出したんのよ。反則じゃない！」

「マイヤ、俺がそこまで力を出したと思っているのか？だとしたら修行が足りないな」

「ま、まさか……………」

「ああ。練習量増加だ」

「イヤーーーー！！」

辺り一帯に叫び声が響く。そこまで嫌なのだろう。

「レ、レイナ。助けて」

必死に仲間に助けを求める。だが、それは無情にも裏切られる。

「私が言っても何も起こりませんし……………」

そこまでしか言わなかったが、どこからか《私も巻き添えを食らうのは嫌ですから》という声が聞こえたのは気のせいだろう。

「う、裏切られた。モ、モウヤダーーーー！！」

とうとう発狂して気絶する。やりすぎたらしい。

「しまった。からかい過ぎたな」

「冗談に聞こえませんでしたから」

冷や汗をたらしながら答える。

「マイヤさん、どうするんですか？」

「持つのは重いからな。こうする。ライトウィップ」

光がマイヤを捕らえる。そして、それを引きずり始めた。

やはりそうなるんですね、と思いながらレイナはカイの横を歩いていった。

3章 〱試合〱（後書き）

こんにちは、闇桜です。

今回で3章が終わりです。次から4章、これからも、よろしく願います。

番外編　く新しい生活への順応く

私がカイさんと旅を始めてから一月と少しが立ちました。あの頃と比べると少しは強くなったと思う。でも、自分より年下のマイヤさんにあっさり負けるのは少し悔しいです。

「でも、それはカイ兄との特訓を受けていた年月の差だと思うから心配しないでいいと思うよ」

・・・いきなり心の声を読まれました。彼女は読心術が使えるのでしょうか？

「え？だつて、レイナは思っていることを小声で言っちゃうことがあるんだよ。今回もそう。気付かなかった？」

どうやら私自身が知らない癖があったようです。今度から気をつけなければ・・・

「あ、そうだ。ご飯はまだかなってきたんだった。どう？」

この旅のメンバーの中で、私は食事係。だから、いつも私が位置から用意する。たまにカイさんが手伝ったりしてくれるけど、あんまり無い。

ちなみに、カイさんは夜中の見張り番と食料の調達、マイヤさんはテントの組み立てとその他の雑用です。

今日の献立はスープと鶏肉のソテー、それとサラダ。

「レイナ・・・雑用って言い方は酷いと思うよ・・・。確かに、そうなんだけどさあ・・・。」

さ、さて！最後の仕上げでもしますか！！

「ごちそうさまでしたあ！あゝおいしかった」

こうやって喜んでくれると私も作った甲斐があるというものです。

「じゃあ夜の特訓、始めるぞ」

いきなりですか。せめて感謝の言葉がほしかったです。でも、贅沢は言えません。

「ん、どうした？さっきから不機嫌そうな顔をしてこっちを見ているが、何かあったか？」

「いえ、なんでもないです」

「そうか。ならいい。じゃあ、少ししたら講義を始めるぞ」

今日は魔法の講義らしいです。また使える魔法が増えるのはうれしいです。

「えゝ。あたしがひまじゃん」

一度似たような講義を受けているマイヤさんは暇なようです。

「安心しろ。お前には後で新しい技を教えてやるから。厳しくやるからそれまで休んでおけ」

暇にならないで済んだみたいですけど、新しい技を覚えられと喜んでいて、一方では厳しいという言葉に落ち込んでいます。

・・・頑張ってください、マイヤさん。

「ほら、レイナ。早く終わらせたいから、早めにやるぞ」

ちょ、歩くの早すぎです。待ってくださいよ！！

「面倒だからここでいい。そんなに派手な魔法を使えるわけじゃないからな」

前は魔力の固定の仕方を教わりました。あれ、トラップしかけるのに便利なんですよ。

「今回は無属性魔法についてだ。お前が使えるのは《素^{もと}》の魔法だったな。さて、残り二つは何だ？」

う・・・何でしたっけ・・・。

「《空^{そら}》と《重力^{じゅうりゅう}》だろうが。いい加減覚えろ」

そうでした。天空の力を操るのが《空》、重さを操るのが《重力》でした。

ちなみに、私の使う《素》とは、全ての元になる魔力をそのまま変換せずに使うものです。

人の中には血管や神経のほかに、見えない物ですが「魔力回路」という物が存在します。

そこに自らの持つ魔力を流して各属性に変換、放出することで魔法を使うんです。詠唱は魔力回路を開く鍵キーワードなんですよ。無詠唱魔法とは、鍵無しで回路を開くことなんです。

「お前の持つ《素》は《究極の零》に最も近い魔法なんだ。これを有効に使わない手は無い」

究極の壱？いままでの講義には出てきていないんですけど？

「そう顔を歪めるな。まだ説明していなかったからな。簡単に言うと、最も強い魔法だ」

そんな魔法もあつたんですか・・・

「さっきの話を含めてだが、これは一般に知られていないから他言無用だ。この《究極の零》は2種類ある。詳しくは後にやるが、分かりやすく言うなら、『創世』と『終焉』だな」

そんなに危険極まりない魔法が2種類もあるんですか。それに、一般に知られていないことを何でこの人は知っているんでしょうか？

「創世と終焉ですか？」

「そうだ。だが、このことを今話しても意味は無いだろう。ここで終わりにする。時間も無駄だしな」

時間が無駄って・・・こんなに中途半端に終わらされると逆に気になってしまっんですけど・・・

「話を戻すぞ。既にガラムは使えるようだが、ハルクとリアオルク

はまだのようだな」

ガルムは物理攻撃を軽減する魔法。ハルクは筋力の強化、リアオルクは反応速度を上げる魔法です。

ガルムは使えるようになりましたけど、他の2つはまだなのです。詠唱すら知りません。

「やはりか。詠唱も知らないんじゃないのか？」

・・・何故。何故私の考えてることがあの人は分かるのでしょうか？

「それはだな。お前がぶつぶつ独り言を呟いているからだ」

またそれですか・・・気をつけないと

「続けるぞ。まず、詠唱を教えるか。ハルクのほうが『私の願う者に力を与えたまえ』だ。リアオルクは『神秘の力を与えたまえ』だな。この二つのは、ガルムより難しい。人にかける分には変わらないが、自分にかける場合は結構難しいんだ。ために、俺にかけてみる」

なるほど。自分に魔法をかけるタイプはそんなにありませんね。難しいかもしれないです。さて、無属性魔法の魔力回路は・・・

「——私の願う物に力を与えたまえ、ハルク」

・・・特に変化がありません。失敗したんでしょうか？

「残念ながら失敗だ。成功できるまで何度も頑張れ。余裕があれば

リアオルクもやるからな」

この人は、鬼です・・・

「ほら、頑張ってみろ」

（数時間後・・・）

「よし、これならいいだろう。ハルクとリアオルクもとりあえず使えるようになったみたいだし、今日はもう終わりでいいぞ」

「あ、ありがとうございますあ」

つ、疲れました。気付いたら、日は完全に沈んでいます。

「疲れていそうだから、もう寝ていいぞ」

そう言つて、カイさんはマイヤさんのところに行つてしまいました。

もう眠いです。限界です。それでは、おやすみなさい・・・

朝

日が昇り始めた頃、私は必ず目を覚まします。そして、朝食を作り始めるのです。旅を始めたばかりのときは眠かったけど、慣れとは恐ろしい物です。

「おはようございます、カイさん」

「………ああ、おはよう」

今日も外で見張り番をしていたカイさん。昨日も夜遅くまでマイヤさんを鍛えていたようです。マイヤさんはまだ寝ています。

「明日中には町に着きたいと思っている。少しペースあげるが、大丈夫か？」

何故カイさんが旅をしているのかは分かりませんが、今は楽しくてしょうがないです。きっと話してくれると思いますし。

「大丈夫ですよ。どうせなら今日中につくことは出来ませんか？」

前の私だったら絶対に言うことの無かった台詞。きっと、新しい生活になって何かが変わったんだと思う。

「徹夜なら夜中につくが、いいか？」

「遠慮しておきます。徹夜は嫌ですから」

「それは何故だ？」

それは大変なことだったかもしれないけど・・・

「楽しいんだったら時間がかかってもいいんです!」

これは、私が今、大切に思っていること。

「そんなもんか？」

「そんなもんです」

「そうか」

・・・なんか、反応薄いですね。

「反応が薄くて悪かったな」

「また・・・ですか？」

「まただな」

も、もう嫌ですーーーーー!!

番外編 〽新しい生活への順応〽（後書き）

久しぶりです。闇桜です。

かく言う私も新しい生活にようやく慣れてきたところです。色々と覚えることが多くて大変でした。

今までより忙しいので更新速度が遅くなる可能性があります。宜しく願います!!

4章 ヲイーシェ、再会

「ここは……もうイーシェ国の中だな。町の名前は確か“ライド”だったはずだ」

「あ、聞いたことがあります。イーシェで一番大きい魔法学校がある町ですよ」

「一番大きな図書館があるのもこの町だ」

「へ」

彼らは魔法がもつとも発達している国、イーシェにいた。いつも通りに宿についてから今後の予定を話し合う。

「さて、今回はどうする？俺は長すぎると困るが……」

「私、この町にしばらくいたいんですけど」

この町の図書館に興味があるんです。と、後から小さく説明を加えるレイナ。

もともと読書が好きなので、やはり図書館に興味があるらしい。

「あたしもこの町散策してみたいかなあ。魔法が発達してる町って興味あるし」

「……なら、今回はいつもより少し多めに滞在しよう。行動は各自。自主トレーニングは怠るなよ」

それぞれが納得して、各自の行動に移る。マイヤとカイは早々に宿を出て行った。

マイヤは町の探索、カイは………

「……カイさんが何をするのか、全く見当がつかないです」

部屋にレイナの声が寂しく響く。

「私は少し寝てからにしましょうか」

そういつて、レイナはベッドに横になって、目を閉じた。

レイナが眠り始めた頃、マイヤは町の中を探索していた。この国にある町は初めて来たからだ。

「へー。やっぱり魔法が発達してる町なだけあって、魔法道具マジックアイテムが多いんだなあ。それに、学生も多いみたい。学校って楽しのかな？」

物心がついてからずっと孤児院にいて、そのままカイと旅をしていたマイヤは、学校で学ぶ以上の知識は持っていたても、そういった場所の人とかかわりを持ったことが無い。

なので、興味を持つのは当然のことだった。

「ふえ？カイ兄？おーい、カイ兄」

カイが依頼所に入って行った。どうやらまた依頼を受けるらしい。マイヤに気付いていなかった。

暫くしてカイが出てきた。その手には依頼書が一枚握られていた。

「あんたにはかなわねえな」

「さてな。紹介ありがとうな、マスター」

いい依頼があったらしい。そのままその場所に向かうのだろうか？宿とは別の方向に向かって歩き出した。

面白いことになりそうだと思い、マイヤはカイを尾行しようと決めた。気付かれないようにできるだけ気配を消して、自然に。

ある程度進むと、カイの足がピタリと止まった。マイヤも足を止め、物陰に隠れる。

クルリ、と後ろを振り向いた。

「・・・・・・・・・・？気のせいかな？」

再び歩き出す。

「ふう、危なかった」

十分警戒してから後ろをつけて行く。

また少し進む。すると、学校が見えてきた。下校の時間なのか、学生の数も多くなってきた。

「ここが・・・学校・・・」

初めて見る学校。帰宅している生徒達が楽しそうに話をしている。

「行きたいか？学校」

「ふえっ!？」

いきなり後ろから話しかけられた。カイだ。さっきまで前にいたはずだが・・・

「いや、なんとなく気付いていたから。もう少し慎重に行動したほうがいいぞ」

ばれていたらしい。だから、素直に聞くことにした。

「ね、カイ兄。今回の依頼は何？」

「ん？今回の依頼は魔物討伐だ。場所は・・・ここだ」

カイが指を指す。そこにあつたのは・・・

「学校？」

たとえどんな学校だったとしても、ここにはそんなに強い魔物はいないはずだ。

「学校の事情なんか知らん。ただ、ここに魔物がいて、それを討伐する必要だということが分かってるだけでいいんだ」

カイにとってはそんなことはどうでもいいらしい。

「・・・お前も来るか？いつもと同じで命の保障ができないが」

その一言にマイヤがピク、と反応する。どうやら行きかけたらしい。

「いいの？」

「来ないのか？置いていくぞ」

「あ、ちょっと！待ってよ！..」

マイヤは急いでカイを追って行った。

学校の中に入った2人は怪しい目で見られていた。それは当たり前だろう。無断で入ってきたのだ。怪しいに決まっている。

「な、なんか睨まれてない？」

「そりやそうだろう。無断で入った上に、警備員を気絶させてるんだから」

辺りには人が数人転がっていた。その中には生徒も混ざっていた。

「あの・・・ここに何か用があつてきたんですか？」

男子生徒の1人が声をかけてきた。若干手が震えているが、多分恐怖から来るものだろう。

「ああ。校長に用があるんだ。だが、場所が分からなくて困ってるんだ」

警備員に聞こうとしたら襲われたから、結局聞けなかったからだ。

「校長ですか・・・分かりました。案内しますね」

男子生徒が連れて行ってくれるらしい。正直、ありがたかった。

1階の奥にある大きな扉をコンコン、とノックする。

「失礼します、校長。お客様がお見えになりました」

「客？それは聞いておらんが。侵入者なら報告を受けているが」

それはカイたちのことだろう。

「ああ、それは俺たちのことだ。すまなかったな。だが、いきなり襲ってきたあっちも悪いと思うぞ。それに俺たちは依頼を受けてここに来たんだ」

「・・・！！早く入ってください」

どうやらあまり知られていないらしい。入室の許可が出たので、とりあえず入ることにした。

「・・・・・・・・依頼書のほうは？」

ニセモノという可能性もあるからだろう。依頼書の提示を要求してきた。

「ほれ」

依頼所のマスターから貰ったものを見せる。それを見た校長はホンモノと認識したらしい。詳しい話を始めた。

「俺の名前はモンドⅡグラデイスと申します。あなた方は？」

「カイⅡストールⅡレッドだ。各地を旅して回っている。SSランクもいくつかなしたことがあるから、大丈夫だと思うぞ」

「マイヤⅡクルスだよ。カイ兄について行ってるの。あたしもカイ兄と一緒にSランクくらいだったらこなしたことがあるから、そこまで弱いことも無いよ」

「マイヤⅡクルス？」

後ろに控えている男子生徒がピクリ、と反応した。

「ハル、お前はまだ居たのか。もう下がっていいぞ。ああ、すいません。この子は俺の孫でハルⅡグラデイスと言います」

「・・・ハル？」

マイヤも何か気になるようだ。思いふけている顔をしている。

「おや、マイヤさん。この子と知り合いですか？」

やがてハルがゆっくりと口を開く。

「もしかして、アルアット孤児院の・・・？」

「やっぱり、ハルだ！」

「マイヤ！久しぶりだね！！何年ぶり？皆は元気にしてるの？」

ハルから放たれた一言に、マイヤの気が沈む。

「皆は・・・賊にやられて・・・孤児院も・・・」

「そんな・・・」

ハルも顔を伏せてしまう。

「どうやら、あの孤児院で一緒だったようすな。あつちのことで積もる話もあるでしょうから、我々だけで話を続けましょう」

「わかった」

沈黙が続いている2人だが、そのうちそれも終わって話を始めるだろう。マイヤには後から説明すればいいし、何より今はそんな雰囲気ではない。

「では、改めて・・・この学校には地下があります。一般的に知られていません。もちろん、教師やこの町、国の中でも知っている人間はごく一部です」

どうやら、そこにいる魔物の討伐らしい。

「そこには我々では歯が立たないほどの魔物がいるのです。その強さ、数は分かりません。今は封印しているので分かりませんが、何度かこの依頼では入った人たちもいます。しかし・・・」

「誰一人戻ってこなかった・・・ということか」

「その通りです。なので、依頼のランクを上げてもらって、依頼所のマスターが認めるような人を探していたのです。あのマスターは信頼できますから」

場所は学校の地下・・・となると、あまり派手に動くことはできない。確かに辛い仕事だ。

「夜にやると言うなら、この学校を無尽の状態にして音が外に漏れないように結界を張れます。それでどうでしょうか？」

「ああ、それでいい。決行は今日の夜、具体的に日が沈んで一刻たった後。それでいいな？」

「構いません」

ここに依頼は成立した。カイは向こうでハルと話しているマイヤに話しかけ、帰ろうとする。

「ねえねえカイ兄。ハルをつれてっちゃ駄目？」

「はあ？」

いきなりマイヤが意味不明なことを言い出した。いや、一応理解はしたのだが・・・

「俺は命の保障をできんぞ」

「だって、あたしのことを弱いつて言われちゃってくやしーいじゃな

い。あたしが守るからいいでしょ？」

「な、なんでマイヤなんかを守られなきゃいけないのさ」

どうやら馬鹿にされて悔しいらしい。一般的に考えて学校に行っていないのだから、弱いと考えるのが妥当だろう。だが、それはあくまで一般的な常識だ。

「だ、そうですが。校長……いや、一人の肉親としてモンドさんはどう思いますか？あなたがいいなら別に構いませんが」

半分投げやりに聞く。本当にどうでもいいらしい。

「儂としては構わんのじゃが……ハルよ、お前は危険を承知で行くのか？」

「はい。こう見えても学校で頑張ってますから」

ならばいいじやろう、とモンドは許可をする。カイは守る気は無い。なら、マイヤに任せるしかないだろう。

「……なら、マイヤ。お前が責任持てよ」

「わかってるよ」

ふふふ、ハルに実力の差があることを見せつけてやるんだから、と気合を入れているマイヤ。

反対に仕事がめんどくさくなってため息をついているカイ。

若干緊張しているハル。

このメンバーを見て、少しだけ、本当に少しだけ不安になったモンだった。

4章 ヲイーシェ、再会々（後書き）

ども、闇桜です。

4章に入りました。皆さん、ハルのことを覚えてるでしょうか？

「少ないと思いますけどねえ・・・出番も少なかったわけですから・

・」

「・・・ごめんね

「気にしないで下さい・・・」

で、では、失礼します！！

4章 く地下の魔物、戦闘開始！く

時は夜。一般の人は眠りについている時間。ついでに言うと、レイナも眠っている。そんな時間に、カイとマイヤは学校にいた。

「夜の学校ってなんかわくわくするね」

「今回は遊びに来たんじゃないんだ。もう少し真面目になれないのか」

半ば呆れながら聞いてみるカイ。だが、それは無駄だろうと分かっていた。

夜の学校の廊下を歩き、校長室に行く。

「お待ちしておりました。・・・こちらです」

校長が部屋にあったもう一つの扉に手をかけ、先へと進む。そこにあった小さな部屋には物が多少あるだけで、扉は見当たらない。

「普段は少し細工をしてあるんです。ほら、こうしますと・・・」

壁に手をつけてゆっくりと押す。すると、そこには小さく窪みが出てきた。文字のついたパネルも出現し、校長が何か入力している。

全てを入れ終わり、校長が部屋の中央から離れるように指示する。それに従って動くと、床に亀裂が入り、隠し階段が出現した。

「こんな仕掛けが校舎の中にあっただんですか・・・」

今まで知らなかったことを知って驚いているハル。どうやら魔物はここにいるらしい。

「では、行ってくる。なるべく安全は考慮する。主にマイヤが」

「ええっ！！あ、あたし！？」

こいつは、自分で言ったことを忘れているのだろうか？

「お前は主にハルを守っていればいい。というか、向かってきた奴らを片っ端から倒していけばいいだろう」

「ああ、そういうことだったの。驚かせないでよね。うん、分かった」

そんな会話のやり取りをして、カイたちは地下に潜って行った。

階段を下りたところで早速、魔物たちに囲まれた。

どうやら結界が張られているらしく、魔物たちは外に出れないようだ。ただ、それはカイたちも同じだ。この結界は外からは入れるが、中から出ることはできない。そういうつもりだった。

ここから出るには魔物たちを全て倒し、結界を作っている原因を壊すしかない。予想以上に厄介な依頼のようだ

「まあいい。始めるぞ」

ここで、カイはあることに気付いた。自分は武器を持っていないのだ。いつもなら暁を取り出すところだが、ここには一般^{ハル}人がある。だから、それはできない。

「・・・マイヤ、寒月を借りるぞ」

「うん。あたしは紅龍と虎蒼があれば十分だよ」

マイヤから寒月を借り、魔物の群れに攻撃を開始する。

敵の数はおよそ20。全てが上級の魔物で、種としてはウルフ、エイプ、メテイル、ベアル。親玉は合成^{キメラ}獣だ。

対してこっちはカイとマイヤ、それと一般人当然のハルだ。ついでにここは地下であって、大技を使って地形を乱すわけにはいかない。色々が悪条件だった。

「一文字斬。破砕剣」

横に長い一本の剣気と地を這って進んでいく複数の剣気。それらは敵に向かっていく。だが、それらはキメラによって全て受け流されてしまい、壁にぶつかって消滅する。

「グガアアアア!!」

キメラ以外の魔物が全てカイたちを襲う。5分の3はカイに。残る5分の2はマイヤとハルに。

カイは助けに行こうとしたが、何度も邪魔をされたので諦める。マイヤの実力があれば大丈夫だと思ったからだ。

ただ、実際は違っていた。普段のマイヤなら大丈夫だったが、今はお荷物とも言えるハルがいる。しかも、大技は使えない。そしてその状況で複数戦。流石に辛かった。

「つくそ!!めんどくさいわね。ハル、あんたいい魔法使えないの?」

「・・・ごめん。僕、補助の魔法は使えないんだ。それに、魔力の量も普通の人より少し多いくらいだから、あんまり意味は無いと思う」

自分の無力さと、マイヤとの実力の差を実感し、悔しい思いをしていた。

どうしてこんなに彼女と差ができてしまったのか。自分はこれからどうすればいいのか。この状況でこんなことを考えていた。

「何ボーっとしてるの！？少しは自分で避けるとかしてよ」

息切れしながら言う。辺りには傷ついたマイヤと、その辺に転がっている魔物の屍骸。他の魔物は死んだ魔物を縦にしながら戦っていたので、ほぼ無傷だ。

「う・・・ごめんなさい」

気を取り直して避けることに集中する。マイヤが攻撃を弾きながら戦ってくれているので、ある程度簡単に避けることができる。

「マイヤ、伏せろ！！」

カイの声に反応し、素早く地面に伏せる。その直後に何かの拳が空をよぎる。キメラの拳だ。飛んできた。

「ロケットパンチ！？」

「切り離しが可能なんだろう。俺もさっきから撃たれていた。気にするな」

そんな会話をしているうちに、もう一度キメラが腕を飛ばしてきた。先程より近い位置だ。そして、それにマイヤは気付いていない。もう避けられる距離ではない。

マイヤを横に放り投げる。だが、その反動で、みごとに腕の標的になってしまった。しかも、もうどんな動きをしても避けられない。

腕がカイの腹部を貫通し、大きな穴が開く。内臓は飛び出ていない。

どうやら、それは気が魔力で押さえ込んでいるようだ。血もそんなに流出しているわけではない。ただ、内臓を目視することはできた。

「カイ兄!？」

そのまま倒れることなく、カイは立っている。魔力と気を混ぜ合わせ、部屋全体に結界を張る。

「もう一つ……『結』」

更にカイとマイヤを囲うように結界を張る。

「これなら……被害はでない……」

その言葉には若干元気が無い。やはりダメージは大きいようだ。

「奥義……夢幻桜華」

夢幻桜華が繰り出される。それは、マイヤが使うものよりも数が多く、強かった。

結界の中全てが桜の花びらに包まれる。つまり、敵は逃げ場が無いということだ。ちなみに、マイヤとハルは別の結界に囲まれているから平気なのだろう。

やがて夢幻桜華が終わり、結界も解ける。全ての魔物がずたずたに切り裂かれており、その殆どは死んでいる。

そして、部屋の中央より少しだけマイヤたちによっている所に、カイが倒れていた。出血の勢いもさっきより増えている。

「この状況は・・・まずいですね」

ハルは冷静に分析する。自分とマイヤは治癒の類は使えない。それに対してカイはほぼ瀕死の重症。

「カイ兄、しっかりしてよ！！カイ兄！！」

マイヤは必死に呼びかけているが、ほとんど反応は無い。

ハルは何か無いかと自分のポケットを探る。だが、見つからなかった。今度はカイのポケットの中を探る。

「ん？これは・・・」

小瓶に入った薄緑色の液体。魔法薬だ。

「最高級の魔法薬、イクシル。これがホンモノだったら・・・」

イクシルとは治療で使う魔法薬の中で最高峰のものだ。もちろん貴重なものだし、何より高い。

「カイ兄が助かるんなら別に何でもいいよ。早く使わなきゃ！」

マイヤはハルの手からイクシルを奪い取り、急いで蓋を開けて全部を全身に、特に腹にかける。すると、見る見るうちに傷がふさがれていった。

少ししてから、カイは目を覚ました。

「これは・・・魔法薬イクシルか。よくあるのが分かったな」

少しだけ感嘆しながら言う。

「見つけたのは偶然です。で、助かってよかった」

「カイ兄、心配させないでよね!!」

むぐ、と唸りながら頬を膨らませて言うマイヤ。その頬で遊びながら、軽く謝罪をする。

「・・・どうやら、まだ生き残っていたみたいだな」

そこには無傷のキメラがいた。ただ、体を作っているパーツが幾つか違っていた。

「おそらくまだ生きていた仲間を吸収することで復活したんだろう。コイツだけならなんとかなる」

カイは寒月を握って、キメラに向かっていく。その刀でキメラの核がある場所を狙い、一突きする。すると、キメラは力なく倒れた。

「これでよし。先に進むぞ」

3人は、地下を先に進む。少ししたところで、さっきより少しだけ狭い空間に出た。

「どうやらここが最後のようだな」

もう先に行く道はないし、台座のような物があった。これを見れば、

ここが最後の部屋だということもわかる。

「これは・・・なるほど。これが原因だったのか」

台座にあった2つの石を手取る。それらは、赤い色と青い色をしていた。火と氷の結晶石だ。

「これ、なんですか？」

まだ知識が無いらしい。とりあえず簡単な説明をした。

「これが結晶石・・・一応知ってはいましたが、初めて見ました」

「結界の原因はこれだろう。これを持っていけば消えるはずだ。魔物も全て倒したし、大丈夫だろう」

カイたちは結晶石を取った。すると、結界は消え、外へ出られるようになった。

「さあ、帰るとしよう」

カイたちは、地上へと上がって行った。

カイたちが去って誰もいないはずの地下。そこで、うごめく一つの

影があった。カイク核を刺されて死んだはずのキメラだ。

どうやら、核は反対の位置にあったらしく、死んではいなかったようだ。

そして、そこに一人の女が現れた。

「あなたに、力をあげる」

女が黒く光る石を差し出す。そして、それはキメラの中に入る。

「グ・・・ガ・・・アアア・・・」

キメラの肉体に変化が生じる。より、化け物へと進化を遂げる。

「あなたの名前は・・・そうね、キメラじゃ駄目ね。ガーゴイル。それがあなたの名前」

新たにガーゴイルと名付けられた魔物は、女に忠誠の意を表す。

「ふふ・・・これからよろしくね、ガーゴイル」

そして、女とガーゴイルは、その場から消えた。

4章 〽地下の魔物、戦闘開始！〽（後書き）

どうも、闇桜です。

GW中になるべく頑張りますが、多分できてあともう1話分だと思います。

では、失礼します。

4章 く報酬と試験と・・・

無事に地下から戻ってきたカイたち。隠し階段を上がり、再びそれは隠された。そのまま校長室へと戻る。

「おお、帰ってきましたか。やはり、あなた方に頼んだのは正解だったようです。して、その石は・・・・・・・・」

「火と氷の結晶石だ。中に入った者達が出て来なかったのはこれらが作っていた結界のせいだ。中から外へ出れない、厄介な結界だった」

カイは地下であつたことを事細かに説明していく。

「なるほど・・・そのようなことがありましたか。なら、報酬は少し違う形になりますが、その結晶石でどうでしょうか？」

どうやら最近あまり利益が出ていなくて困っていたらしい。今回の報酬とこの結晶石の価値がほぼ同等らしいので、それで手を打つことになった。

「ありがとうございます。では、これにて私からの依頼を終了とさせていただきます」

「ああ。俺たちも今日は宿に戻る。」

「じゃね、ハル。もしかしたらまた会えるかも知れないから、そのときにいっぱい話そうね」

「もうここには寄らないの？」

「うん。とりあえずまだこの町には居るけど、あたし達はまだ旅してる途中だから」

旅、という言葉にハルは反応していた。そういえば、彼らのたびの目的はなんだろうと。

「ねえ、何で旅して――」

その瞬間、ハルは言葉を発するのを止めた。いや、止めざるを得なかった。

マイヤから殺気が漂ってきた。それが理由だ。聞いてはいけないと暗に言っている。そして、モンドはそれに気付いていない。

「どうしたの？ハル」

感情の籠っていない目でハルを見つめる。そっちが威嚇してきたんじゃないか、と心の中で思いつつ、

「んん。それより、旅は2人でしてるの？」

もう1つ気になることを聞くことに逃げた。触らぬ神に祟り無し、だ。

「もう1人いるよ。3人で旅してるんだ」

無邪気に笑いながら答えるマイヤ。もう、先程の面影は無い。そのことに、ハルは少しだけ安堵した。

やがて、カイが荷物を纏め終わり・・・元からそんなに多くは無いが・・・宿へと帰る。マイヤも、それについて行った。

ハルは、2人が見えなくなった暗い道を眺めている。

「ハル。明日から連休とはいえ、いい加減入りなさい」

「あ、はい」

モンドに声をかけられ、ハルもまた、就寝の準備を始めた。

翌日・・・

「これが、結晶石ですか」

夜に帰ってから、カイたちはレイナに怒られた。勝手に出て行って、心配していたらしい。

次からは出掛ける前に必ず一言言つという約束をつけられた。

そして、今である。

「これって、珍しいですね」

「ああ、結構な。だが、金を出せば買えないことも無い。それに、古い遺跡とかには結構あるからな」

懐の小袋を投げる。中には赤や青のほかに茶、黄、緑、黒、白、橙の色をした石が入っている。

「これ、全部結晶石ですか？」

目を丸くしながら聞く。驚いているようだ。

「ああ。いろんな依頼をこなしているうちに、溜まった」

これは依頼の品としてもよく使われている。ただし、ランクが高い物だが。

こんな話をしながら、彼らは出掛ける準備をしていた。最後にマイヤが部屋から出てきたので、行動を開始した。

向かった先は荒野。草木は殆ど生えておらず、岩でゴツゴツしている場所もある。

人もあまり来ないから、修行するのにもってこいだ。

「さて、今お前が使っている《素》の魔法だが、もう一つの呼び名を知っているか？」

「えーつと・・・この前行っていたのは《究極の零》でしたよね」

「・・・それはまた違う魔法の話だろう？あれは魔法であって魔法で無いんだ」

「どういことですか？」

「簡単に説明するが・・・まずは質問だ。魔法はどうやって作り出されているか知っているか？」

「この前読んだ本には、無から有を作り出す物だ、と書いてありましたけど」

確かにそうだ、と頷きながらカイは言葉を続けた。

「今はそうやって教えられているが、厳密には違う。魔法を発生させている源は何だ？」

「そんなの簡単じゃないですか。私たちの魔力・・・」

ここまで答えて、レイナは疑問を抱いた。では、魔力とは無の存在となるのか。

「そう。魔法の源は魔力だ。魔力がなければ魔法は使えないからな。マイヤみたいに。」

ちらり、とマイヤを見るカイ。この話は彼女にもしていなかったらしい。真剣に聞いている。

「だが、マイヤは気の力を使った技がある。まあ、気術だな。実は、魔力と気術の原理は同じだ。確かに源は精神力と生命力に似たような物と違うが、よく考えてみる。発生させ方に違いはあるか？」

「魔法を発生させるには、魔力を体の中に流れている魔力回路を通

して放ち、形を作って力を成し、使うもの・・・」

「気術を使うには、自らの中にある気を自らの体、又は武器を媒体にして具現化して、用途に合わせて形を作って力とし、使うもの・・・」

互いに答えを言う。そして、同時に気付く。

「どうだ？ 変わりは無いだろう。そして、そこで浮かび上がってくる疑問が、さつきも少し出てきたが、気と魔力という力は無いという存在なのか・・・だな。」

その言葉に色々と考え込む。確かに具現化する前は不可視の物となるが、それが果たして無の存在といえるのか。

「正解は否だ。両方とも『有』となる。もともと、俺達が無意識のうちに作り出している存在だからな。だが、《究極の零》・・・究極魔法とも言うんだが、あれは違う。『無』の力だ」

『有』と『無』の違い。それは、物を生み出す力と全てを飲み込む力、という点だ。

「『無』とは最も純粋なものであり、最も混ざったもの、何を加えても『無』が『有』に変わることはない。だが、『有』が『無』に成ることはある。村から人が居なくなれば、無人になるよな。『人が居た（有った）』状態から、『人が消えた（無くなった）』ことになる。ほら、『有』から『無』になった。究極魔法は、そういう魔法なんだ。全てを無にする魔法。危険だろう？」

確かに、そんな魔法が存在していたら危険どころの騒ぎではない。

ぶるり、とレイナは体を震わせた。

「・・・故に、《素》の魔法は《究極の零》じゃないんだ。別名は《究極の壱》。最初に出来た有^{まほう}という事だ」

講義はこれで終わり。実践を含んだ修行を始めようとしたときだった。岩陰に、人の気配が会った。

隠そうとしているようだが、隠しきれていない。

「出てこい。・・・ハル、と言ったな。何の用だ？」

丸い眼鏡に学生服。朗らかでどこか抜けている雰囲気醸し出している、青年とも少年ともいえない微妙な位置に属している、ハル。グラデイスがそこに居た。

「ハル？」

マイヤも、何でここにいるの？と若干不満気な顔をして見る。レイナに至っては、疑問符しか浮かんでいない。

そんな中、彼は――

「あの・・・一緒に修行させてください!!」

いきなり、意味不明なことを言い出した。

「・・・理由を聞こうか？」

カイはその理由を問う。本当はどうでもいいことだったが、一応聞

いておこうと思ったからだ。

「言わなきゃ駄目ですか？」

「それは任せる」

「どっちですか!？」

どうやら彼は突っ込み気質らしい。ならば、このメンバーならもってこいの人材だ。

「別に理由はどうでもいい。ただ、死ぬくらいの覚悟でここに来ているのかだけだ」

かなり本気で殺気を放ちながらハルを睨み付ける。

それに怯むことなく、ハルも答える。

「・・・地獄で一生暮らすくらいの覚悟をしていますから」

本当は腰が抜けそうなのに、それに耐えて、カイの目を見ながら言う。

「・・・よし、合格だ。レイナ」

「な、なんですか？」

話を振られると尾もわなかったたレイナは、少し焦って返事をする。なんとなく嫌な予感がしていたからだ。

「お前、ハルの実践の相手をやれ。今すぐだ」

やはり、無茶振りだった。

「はいい？」

「ちょ、何言つてんの！？カイ兄！」

レイナは反応し切れていない。

「お前が勝つたら新しい魔法を教えてやる。これでどうだ？」

「やります！」

「返事早っ！！」

やはり人という生物は（正確に言うとレイナはドワーフだが）何か自分に利益になることがあるととにかくやる気が出るものだった。その事に、マイヤも即座に突っ込みを入れた。これは珍しいことだなと、カイはこっそり思う。

「じゃあ、よろしくおねがいします」

苦笑いしながら握手を求めるハル。

「遠慮はしませんから」

につこりと笑いながら握手に応じるレイナ。

握手が終わり、互いに距離をとる。レイナは短剣を、ハルは携帯用の槍をその手に持ち、構える。

本来2人とも魔法を使って攻撃するため、あまり必要ないように思われるが、実は重要なのだ。

今回のルールはどちらかが降参するか気絶するまで続けるのが今回のルールだ。よって、刃物を突きつければもちろん降参となる。それが理由だ。

カイの合図で、始まる。

「はじめっ！！」

「彼の者を焼き尽くしたまえ。フレイム！」

「氷よ、その刃で敵を切り裂け。スプラアイス！」

ほぼ同時。同じタイミングで魔法が放たれ、ぶつかり合って消滅する。

「クエイク！」

互いの足場が崩れ、転ぶ。

「きゃっ」

「へぶっ」

レイナは尻餅をついたただけだったが、ハルは顔面からいってしまっ
た。面白い声が聞こえた。

それをチャンスと思い、連続で魔法を使う。

「ファイア！アイス！ウィンド！」

無詠唱ではまだ初級魔法しか使えないが、それでも3つ同時だ。だ
いぶ成長したといえる。

「うわっ。アイス！ファイア！サンダー！」

やや遅れながらも対になる魔法を放ち、相殺する。

「今度はこっちから！バーニング！」

「きゃっ！」

レイナの居るところで小さな爆発が起きた。吹き飛ばされ、体を地
面にぶつける。

「これで終わりです」

そこは、ハルの近くだった。槍を首に突きつけて言う。これが模擬

戦でなければ、レイナはもう死んでいた。

「・・・はあ。降参です」

降参宣言を出す。勝負は、ハルの勝ちだ。

「ハルの勝ちだな。・・・ところで、お前は、全属性の魔法を使えるのか？」

その言葉に、全員がハルを見る。あはは、と笑いながら、自分の事を説明する。

「黒魔法は全属性を使うことができます。ですが、他は何一つ使うことができません」

魔力の量も普通の魔道士より少し多いくらいですし、と言葉を付け加え、槍をしまう。

「・・・なるほど。それと、これはできるか？」

カイは右手に火の魔力、左手に氷の魔力を作る。

「え？できますけど・・・」

「わ、私はできません・・・」

ハルは同じ事やって見せた。だが、レイナはできなかった。

「普通は同時なんてのは殆どできない。・・・どうやら、お前は合成魔法に向いているようだな」

合成魔法。まさにその名の通りなのだが、2種類以上の魔力を合成し、そこで生まれた力を具現化して使う。使った魔力が単発で使った1とおなじでも、その威力は2や3、それ以上となる。魔力の配合率も同じくらいにしなければ失敗するし、うまく具現化できなければ意味が無い。結構難しい魔法だ。

「そのあと、こうするんだ」

両手から魔力が離れ、火と氷の魔力が混ぜ合わさる。

「合成魔法、クリスタルランス炎上する氷槍！」

突如、透明な槍が現れる。カイはそれを岩に投げつけた。そして、それは岩に刺さり、燃えた。

「い、今のって・・・」

「これが合成魔法だ。やってみる」

再び無茶振り。だが、それに誰も突っ込むことなく、ハルも同じ事をしようとする。だが、混ぜ合わせるところで失敗してしまった。

「やっぱり僕には無理なのかな・・・」

「いや、最初から魔力を分けて出せるのは才能としか言いようが無い。残りは努力だ。人というのは、努力すれば大抵の物は手に入れることができる」

千里の道も一歩から。ハルの頭の中にそんな言葉が浮かんできた。

「えっと・・・じゃあ、頑張ります」

何故か遠慮がちに言う。

「そういえば自己紹介してなかったよね、ハルとレイナは。今しちゃえば？」

「別にそれはかまわない・・・と言いたところだが、後にしてくれ」

「何故ですか？」

今自己紹介をすることの何がいけないのか。別にたいした時間をとらないはずだ。

「敵だ」

その直後、カイたちは魔物に囲まれた。

4章 報酬と試験と・・・（後書き）

ああ、最近書けないなあ・・・

とか思っている闇桜です。

4章はもともと長くしない予定なので、もうじき終わると思います。それと、番外で出てきた究極魔法のことですが、少々間違いがあったので、修正しました。正しくは《究極の零》です。《壱》は《素》の魔法です。

更新速度は遅くなりますが、これからも宜しくお願いします。

4章 く出現した魔物、2つに分かれた戦力。そして、ガーゴイルく

いきなり魔物が出てきた。いや、空から降ってきたというのが正しいだろう。

周囲には上級のエイプが8匹、空には中級のフェザー2匹と上級のフェザー4匹。それと上級のシャドウワイバーンが1匹。

このメンバーの中でまともに空中戦を行える者はいない。カイはやるうと思えばできるが、あまりやりたくなかった。

下を見ないようにしようと、そう堅く決意をして、跳び立つ。

「地上にいる奴らは頼んだぞ」

「え、ちょ、カイ兄？ええー！？」

まずは雷の魔法剣を作る。とりあえず、周りにいるフェザーたちから片付けることにした。羽根の根元の部分を切り裂く。羽根を失ったフェザーは、逆らうことなく地面に落下していった。

残るはシャドウワイバーンのみ。だが、コイツは予想以上に厄介だった。まず、思い切り殴ってマイヤたちから遠ざける。

何度も行い、ある程度離れたところで雷の魔法剣に気を集める。技をぶつけようとした所で、炎の息吹が吐き出される。灼熱の温度を^{プレス}超える暑さの息吹をギリギリのところで避け、態勢を立て直す。

すぐそこに、シャドウワイバーンの爪があった。何とか両腕を使っ

てガードするが、地面に叩きつけられた。腕には切り傷ができてい
る。

「流石に、一筋縄じゃないかないか」

かといって、この程度の敵相手に暁を出すのは無駄だ。今使ってい
る剣を消し、新たに闇の剣を作る。影の弱点は闇だ。日の光が無い
ところに、影が作られることは無い。

「絶技、月影乱光！」

黒い月のような光が、シャドウワイバーンを包む。そして、中から
断末魔のような叫びが聞こえた。だが、中から物体が出てくる形跡
は無い。

ほんの数秒後、その気術は解かれた。中から出てきたのは、シャド
ウワイバーンのものだったもの。その鱗だけだった。

「・・・これは流石にまずいか？」

気付けば、前方に10体程のシャドウワイバーンがいた。全部上級
だ。全てを相手にしてもいいが、時間がかかりすぎる。彼は戦闘に
関しては面倒くさいことが嫌いなのだ。

——ならば、最強の一角に座する技で、かたをつけようじ
ゃないか。

おもむろに暁を取り出す。そして、気を込めて、大量の剣気を練る。
ただ、今までと少しだけ違うところがあつた。暁はまだ鞘に入つた

ままだったのだ。その状態で、力を溜め込んでいる。

そのため込んでいる量も半端ではなく、空気が震え、辺りにはそのブレッシャーが溢れていた。

「神技・・・」

技を放つ準備は整った。聞こえるのは、シャドウワイバーンが羽ばたく音と、ブレスが放たれた音のみ。

「邪滅神閃！」

抜刀術とも呼ばれる、居合いという技だ。放出されることなく溜め込まれた^{エネルギー}気が一気に展開される。その速度はどの技よりも早く、範囲が広い。

そして、10体ほどのシャドウワイバーンと、そのものたちが放ったブレスは、跡形もなく、塵より細かくなって消滅した。

それと同時に、カイの足元に強く発光する魔方陣が出現する。

「転移魔法だと！？チッ。これは畏だったのか！！」

気付いたときには既に遅し。カイは、別の場所へと飛ばされてしまった。

今の状況に、マイヤは迷っていた。8匹のエイプに囲まれていて、なおかつレイナとハルを守りながら戦わなければならない。正直、面倒な状況だ。

打開策もいくつかあるが、カイに「なるべく使うな」言われているものだったり、「レイナの前で切り札を使ってはいけない」という言葉が邪魔している。前者の理由は、マイヤ自身にもダメージがあるからだ。後者は・・・恐らくだが一般人に見せていい技ではないからだろう。

「さて、まずはレイナ。打撃から守る障壁あったよね。それ、張って」

「わかりました。我らを衝撃より守りたまえ、アサルトウォール！」

透明な壁・・・カイの結界にどこか似ている障壁が、3人を包んだ。これで少しは時間を稼げる。その間に、策を練ることにした。

2人は確か上級魔法程度なら使えたはずだ。なら、それを使って道を開くほか無いだろう。

「あたしの合図と同時に、この障壁を消して。その後すぐに、2人は4匹のエイプに氷の上級魔法を放って。詠唱が必要なら、今のうちにしておいて」

「わかりました」

「了解しました」

おそらくそんなに時間は無いだろう。障壁には小さなひびが入って

いる。

「溶けることのない永久氷よ、その力をもって敵の組織を破壊したまえ」

「いまっ!!」

レイナが障壁をとく。

「クロスアイス!!」

氷の上級魔法を放つ。計画通りに4匹のエイプが凍りついた。エイプは氷属性の魔法に弱いのだ。

「破碎剣!!」

虎蒼のみをその手に持って、破碎剣を放つ。3つに分かれた剣気は、エイプに直撃した。これによって逃げ道が作り出される。残りの1対を斬り捨てて、正面に残りの7匹を見えるようにした。

まずは、破碎剣をくらった3体のエイプが来る。ハルとレイナが2匹の足止めをして、マイヤが1匹を確実に斬る。弱点属性を持つ刀の力はやはり大きいようだ。

そのまま残り2匹も斬る。残りは、凍ったままの状態にいる4匹。

「奥義、風渦旋舞^{ふうつかせんぶ}!!」

小さい剣気が無数出現し、渦のように回転しながら切り刻んでいく。その攻撃に、あっけなく4匹のエイプは絶命した。

・・・

・・・

「・・・きて。早く起きて、レイナ」

自分と呼ぶ声が聞こえた気がした。意識が浮上し、目が覚める。そこは、薄暗い部屋の中だった。マイヤが顔を覗き込んでいる。

「ここは・・・何所なんですか？」

この部屋はそこそこ広い。シャドウワイバーンが大体10匹入れる程度の大きさがある。

ちなみに、マイヤはハルを蹴飛ばして起こしていた。

「いてて・・・もう少し優しく起こしてくれてもいいじゃんか」

「うつさい。普通に起こしても起きなかったほうがいけないんですよ！ー！」

普通に起こす前から蹴飛ばしていたような気がしたが、それは言わないほうがいいだろうと、思ったレイナ。

それが自らの身の危険を回避するためのものかどうかは、定かでは

ない。

「って、何コイツ!?どっから入ってきたの!?!」

マイヤは慌てて刀を構える。そこにいたのは、キメラ。

いや、少なくともキメラではないだろう。

フェザーの物を思わせる、それより巨大な翼。腕は・・・エイプのものに似ている手先の爪はベアルの物だ。足はウルフだろうか?そして、全身が堅い鱗に覆われている。恐らくシャドウワイバーンのものだろう。

「グガアアアアアアアアアア!」

——なぜならそれは、あの地下で力を貰った、ガーゴイルと言う名前の新しい魔物なのだから。

「また戦闘!?ハル、レイナ。行くよ!」

ガーゴイルは、その翼から羽根を飛ばしてきた。それは空気を切り裂き、鎌鼬を纏っているようだ。

「仙風斬!」

強風を発生させて、何とか回避しようとする。だが、それら全てを受け流すのには無理があつた。後ろにいる2人にはあたらなかった物の、マイヤには切り傷が複数できていた。

「やったな!」

俊敏の術を使って急接近する。そして、懐に入り、寒月を両手で持って胴を切断しようとする。

だが、剛力の術を使っていないのがいけなかったのか、鱗に弾かれてしまった。

攻撃の反動でできた一瞬の隙を突かれ、その腕で殴られて吹き飛ばされてしまう。

衝突した壁にひびがはいり、マイヤは脱力する。幸い骨は折れていないようだが、体にダメージを負った。

「水よ、癒しの力を与えよ、リカバリー！ひと時の癒しを与えよ、ヒーリング！」

レイナが準備していた治癒魔法をかける。全身の傷をある程度治す後に唱えたのは自己回復能力を高める魔法なので、残りの傷もすぐに回復するだろう。

「ありがと、レイナ・・・！！後ろ、気をつけて！！」

ハルの背後にガーゴイルが回っていた。あの距離では攻撃を防ぎきることができない。最悪、死にかなないほどの距離だ。

ガーゴイルは腕を振り上げ、その辺で売っている武器より鋭い爪で切り裂こうとしている。

「彼の者をを衝撃より守りたまえ、アサルトウォール！」

レイナが障壁を張る。そこでできた一瞬の隙に、ハルは急いで後方に下がる。

障壁は一撃で碎かれ、その爪は地面に突き刺さる。

「危なかった・・・マイヤ、レイナさん。ありがとうございます」

「次、きます！ゲイル！！」

敵の主な攻撃の仕方は腕を使った攻撃のようだ。今回も使っているハルを殴ろうとしていたところを、風の魔法で軌道をずらし、回避する。

「4連一文字斬り、刀伸斬！」

4つの剣気を放ち、紅龍と虎蒼を刀伸斬を使ってリーチを長くする。それは、制御できるギリギリまでのびた。普通の槍より半分以上長い。

これは、なるべく遠くから攻撃することで、少しでもダメージを抑えるためだ。

「ハル！あんた、カイ兄が使ってたあの、なんだっけ・・・そう、合成魔法！できない！？」

「む、無理だよ、さっきできなかったの見てたでしょ！？」

「うつさい！途中までできてたじゃない！あと少しでしょ！？がんばりなさいよ！！」

「で、でも・・・」

「で、でも・・・じゃない!!できるまで何回もやって!!ここはあたしとレイナが何とかするから!!」

「わ、私ですか!？」

驚くレイナ。それとで同時に、自分も戦力として見られていることに嬉しさを覚えた。

「・・・やってみる!」

右手に火の魔力、左手に氷の魔力を作り、混ぜ合わせる。だが、やはり失敗してしまった。

「奥義、風渦旋舞!」

先程エイプたちに使った技を、ガーゴイルに使う。だが、全て鱗に防がれてしまった。

「もう!何でこんなに堅いのよ!？」

「地獄の業火にて、私の敵を消し去りたまえ。クロスファイア!」

大きな炎が6つ、マイヤとガーゴイルの間に作られる。これで、多少の時間稼ぎはできた。

「絶技、凱旋舞斬!!」

今までで一番大きな剣気が、十数本出現する。そして、それはガー

ゴイルの鱗を全て消し去り、浅い傷を作る。

「絶技級でもこの程度しかできないの!？」

今すぐ使える技の中ではトップクラスの力を持つ攻撃も、あの程度しか聞かなかったことに驚いているマイヤ。そして、彼女の力はまだ残っていないかった。

せいぜい出せて奥義を一回、小技を1、2回程度だ。タイミングを間違えれば、もう勝ち目は無い。

そんな中、3人を勝利に導く声が聞こえてきた。

「マイヤ!どいて!!」

ハルが大きな声を出す。その手には、透明な槍。

「クリスタルランス
炎上する氷槍!!」

動けないでいるガーゴイルの腹部をめがけて、思い切り投げる。そして、それは見事に命中した。

槍の色がほぼ透明なので、なかにある臓器が見える。中から鮮血や体液が混ざった液体が、槍を滴って地面に染みを作っていく。

やがて、槍は燃え始める。ガーゴイルの体も、燃えていった。

燃えている体はもう既に生命活動を停止している。今はただ、燃える肉片と化していた。

「やった・・・だせた!!」

「やればできるじゃない!!」

ハイタッチをするマイヤとハル。そんな様子を、レイナは静かに眺めていた。

「・・・って、そんなことしてる場合じゃないよ!! カイ兄を早く探さないと!!」

「そうですね。でも、何所にいるんでしょう?」

「とりあえず、ここを出ることを考えたほうがよさそうですね。合流はその後を考えましょう」

「あ!ここに抜け道があるよ!!」

先程の戦闘で開いた穴だろう。廊下のような道は、奥へと続いている。

「他に道は無いようですし・・・行きましょうか」

「そうですね」

ハルの意見に賛成したレイナ。と、いうか。マイヤが奥へと行きたそうな顔をしているので、どちらにしろ決定事項だったのだろう。

「じゃ、しゅっぱーっ!!」

元気に走り出すマイヤ。

「へぶっ」

そして、転んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レイナとハルは互いに顔をあわせ、互いに苦勞しそうですねと、苦笑いをした。

4章 く出現した魔物、2つに分かれた戦力。そして、ガーゴイルく（後書き）

どうも、闇桜です。

まさかの2日連続更新。自分でも驚いてます。

さて、今回は剣気の技について紹介します。

と、言っても強さの度合いだけです。

基本的に、

技く奥義く絶技く???く神技く???く

と、なります。マイヤはまだ絶技しか使えません。

一方、カイは神技まで使えます。しかし、間にある???を使うことができません。

詳しくは秘密です。

それと、最近私の知り合いが、ここで小説を書き始めたのを知ったので、宣伝?させていただきます。

doubter先生のお暇書き!!!です。まだ書き始めたばかりだそうですので、温かい目で見えてあげたらな、と、思っています。

では、また次回。

4章 く擬似禁術と新しい仲間く

「ここは、どこだ？」

転移魔法を使われたカイは、1人で部屋の中にいた。いや、正確には2人だろう。敵は、姿を隠しているのだ。

「でてこい。この部屋の中にいるのは気配で分かる。出てこないというならば、部屋ごと壊す」

彼の实力があればそれは可能なことだった。だが、彼とてそんな面倒なことをしたくない。とりあえず、警告として言うておいた。

「あら、困ったものね。転移するときに気絶しなかったみたいだし、私にこんなに早く反応するなんて」

カイより少しはなれた後方に、女性の姿があった。

髪の色は黒で、艶やかな色だ。目の色は緑・・・いや、碧と言ったほうが正しいだろう。年齢は20代後半から30代前半程度。身長はカイより頭1つ分くらい差がある。もちろんカイのほうが身長は大きい。顔立ちは凛々しく、肌の色は白い。プロモーションもいい完璧といっていいほど綺麗な女性だ。

着ている服はどこかワンピースにも似ていて、どこぞのお嬢様のよな雰囲気がある。一見動きにくそうな服装だが、とにかく隙が無い。手には杖を持っていて、下手に手を出したら返り討ちにあう可能性があるだろう。

「お前、名は何ていうんだ？まあ、あいつの仲間だとは思っているがな」

「ええ、そうよ。私の名前はルナ。ルナ＝リシフェル。そうね・・・封魔のルナ、とも呼ばれているわ」

「封魔・・・聞いたこと無いな」

だが、2つ名がついているという事は、それなりの実力者だということだ。少なくとも会話程度で緊張感を緩め、隙を見せるべき相手ではない。

「さあ。私は、あの人の命を受けてあなたに立ちはだかるモノよ。私はこの体を、心を、魂すらもあの人に捧げたわ」

「魂すらも・・・か。なかなか面白い女だな」

「あら、別によくつてよ。それより、もう無駄話を終わりにして、早く始めませんか？」

カイもその意見には賛成したかった。彼女からあいつの情報を聞くために。

「ああ。始めよう。俺も戦いたくてうずうずしていたとこだ」

全身の血が疼く。コイツは、俺を、どれだけ楽しませてくれるのか、と。

「何も残らぬような爆発を。クロスバーニング！」

「闇よ、敵を切り裂きたまえ。ダークブレイク！」

爆発の連鎖を、闇の一線が全て破壊する。そのせいか、それが相手まで届くことは無かった。

「クロスサンダー、十文字斬り！」

「クロスウィンド、フレイム！」

カイの放つ魔法は悉く碎かれている。

「ふう。流石にやるわね。さすが、あの人にたてつくだけあるわ」

「うるさい、黙れ。ついでにあいつが何所にいるかを教えろ」

「それは無理な相談ね」

「そうか」

カイは接近戦を試みようとする。だが、それも魔法による攻撃によって失敗していしまう。

ならば、とカイは全身に力を漲らせる。

「実分身・奥義、四身斬！」

カイが4人になり、それぞれが2つの属性の魔法剣を持っている。もちろん、手に持っている剣で同じものなど無い。

黒魔法の属性全部と、白魔法の計8種類。

前後左右からの4方向攻撃。致命的なダメージは与えられずとも、多少なら与えられるだろうと、カイは思っていた。

「甘いわね」

ルナが両手を合わせた瞬間に、3体の分身が消える。そのことに驚き、体勢が崩れた。

「貴方が本物ね」

杖を逆さに構え、カイのわき腹を掠める。意外と切れ味が良く、切れた場所からは血がにじみ出ていた。無理矢理体をねじって避けなければ、体に風穴が開いていただろう。

「・・・禁術、か」

「いいえ、正確に言うとな擬似禁術よ。『封魔』って名前だったかしら。とにかく、貴方は魔法を使えないわ」

禁術。あまりにも強力で凶悪なため、封印された術だ。凶悪な理由は、術自体が反則的に強いほかに、殆どのものが術者に副作用を施すからだ。封印されてから随分経っているので、人間に使える者はいない。目の前にいるルナが使ったのは擬似禁術。より禁術に近い形のものだ。本物より威力は落ちるが、副作用は無い。ただ、大量に自らの力を使うのは免れなかった。

「なるほど。それなら納得だ。あいつに教えてもらったんだろう？」

「ええ、そうですわ。といっても、私も場所を知っている訳ではあ

りませんので、私を捕まえても無意味だと思いますわよ」

これは擬似禁術。ならば、本物よりは数段力が落ちているはずだ。なら、無理矢理破ることができるかもしれない。

ためしに闇の魔力を出してみた。だが、それは出た瞬間に拡散した。つまり、これの正体は『術を封じる』ではなく、『術が発動する前にその力を拡散させる術』らしい。それならば、気術も同じことだろう。

「お前の術のからくりは分かった。脱出させてもらっ

にやり、と笑って準備に取り掛かろうとする

「あら、できますの？」

ルナは一見余裕そうな表情だった。だが、内心では焦っていた。デイルからこの男の危険さを教えてもらっていたからだ

「剛力の術！」

そう、体の外に力が出たら拡散するのなら、最初から体内で使うもののみに絞ればよい。ただそれだけのことだった。

どうやらこの術の範囲はこの部屋の周囲一体のようだ。なら、直接破壊することができる。

「見つけた・・・」

力の最も弱い部分を見つけた。そして、その部分を思い切り

殴る。そこから、堅い岩を砕いたような音が聞こえて、腕が突き抜けた。

「そ、そんな腕一本程度の穴を開けたからといってどうするの・・・？同じ作業をするには時間がかかりすぎますわよ」

「コイツの効果は結界の外に出ればなくなるだろう？なら、腕・・・いや、指一本でも出れば十分だ」

外側から結界に手を当て、魔力を流す。

「冥王グラムスよ。汝の力にて我の思いを聞き届けたまえ。汝の力、全て解き放ちて我には向かうものに終焉という名の恐怖を与えたまえ。ギガ・ブレイク！！」

闇の最上級魔法を放つ。それは結界を壁共々全て飲み込み、侵食していく。やがて、結界は全て消滅した。

「・・・嘘でしょう？」

「現実を見ることだな、ルナ。お前の切り札は敗れた。対して俺はまだ見せていない手札を多数持っている。さあ、どうする？」

暁を出していなければ、極限式すら使っていない。カイにはまだ余裕があった。

だが、ルナにはもう余裕はもう無いようだ。顔は青ざめ、体が少し震えている。カイに比べると、他の技術レベルはそんなに高くないらしい。

た。

昨日の件をモンドに報告に行くこと。勝手に来たのはハルだが、巻き込んでしまったことには変わりない。事情がある程度説明すべきだと判断したから、ここにいるのだ。

「それで・・・孫はそれに巻き込まれていたわけですね」

「はい。申し訳ありませんでした」

「いや、良いよ。勝手に巻き込まれただけじゃからの。それより、話とは何じゃ？どうやらこれだけじゃないようじゃが」

そう。ハルにはもう一つ話しておきたいことがあった。

「・・・僕は、師匠たちの旅について行こうと思っています」

「何を言っておる、ハル！お前はここで学ぶことに不満があるのか！？」

違う。決してそうではない。確かに設備は整っているかもしれないだが、カイたちとの旅は、一緒にいて心地よいのだ。ただ、それだけが理由だった。

「それに、迷惑になるじゃろう！？よく考えてから言いなさい！！」

「そのことについては、こちらでも了承してます。あとは、貴方の許可を貰えればいいだけです」

カイも珍しく敬語を使っている。彼は敬語を滅多に使わないのだ。

「カイ殿が言うのならば・・・しかし、このまま黙って了承するわけにはいきません。ハル、お前が何か成果を1つ見せたら許可してやろう」

「それが・・・条件なんですね？」

「そうじゃ。期限は・・・どうするか？」

こうなるとは思っていなかったので、まだ何も考えていない。だが、ここでカイがとんでもない発言を言い出す。

「今日で大丈夫だと思うが・・・ハル、お前、あれができたんだろう？多分それで大丈夫だ」

「・・・あ、そっか。そういえば、できてたよね」

「私もそれはできませんし・・・あれで平気だと思いますよ」

マイヤとレイナもその方法を推す。ハルもこれなら慎重にやれば多分できるだろうと思った。

「そうですね、師匠。今やりましょう」

「ふむ。どうやら既に何かを得ていたようじゃの。では、それができる場所に移動するとしましようかね」

校舎の中をぞろぞろと移動して、向かった先は競技場。モンドは、そこに1体のかかしを置いた。

「あれの攻撃せい。もちろん、いつでもいいぞ」

そう言ってから、かかしから離れる。それを確認してから、ハルは右手に火、左手に氷の魔力を作った。

「焦らない、ゆつくりと、均等になるように・・・」

自分に言い聞かせながら、魔力を混ぜていく。

そして、完全に混ぜ合わさった。

「火氷合成・・・合成魔法、クリスタルランス炎上する氷槍！」

右手に透明な槍が出現する。ハルはそれをかかしに向かって投げつける。そして、それは見事に命中し、かかしを炎上させた。

「これは・・・合成魔法か・・・」

「とりあえず、火を消さなければな。氷土合成、アイスグレイル土壁と氷柱の地獄」

かかしが土の壁に囲まれ、前後左右、そして上下。ありとあらゆる場所から氷で刺される。かかしは消火されるどころか、消滅してしまった。

「って、消滅さちや駄目じゃないですか！」

ぼーっと見ていたレイナから声が聞こえる。だが、カイは華麗にスルーした。

「これで、どうですか？」

カイが聞くと、モンドは俯いてなにやら考え事をし始めた。

「・・・いいでしょう。かわいい子には旅をさせるといいますしな。ハルを宜しく願います」

意外とあっさり許可を出した。だが、それはハルからすれば、とてもうれしいことだった。

「やったじゃん、ハル！」

「やったよ、マイヤ!!」

お互いに手を握って喜んでいる。周りに人がいないので、人目を気にする必要は無い。

「こちらも（修行に関しては）最善を尽くします」

「ええ、（安全確保するのを）宜しく願います」

互いに意味が異なっているのはきつと気のせいではないだろう。

「少々急いでいるので、出発は明日になっています。それまでに、準備をさせてください」

「了解しました。ハル、喜んでないで荷物作りをするぞ」

「はい！マイヤ、また明日ね」

「うん。また明日」

とりあえず、今日という1日は、これで解散となった。

「では、行ってきます」

「気をつけていくんじゃぞ」

互いに最後の挨拶を述べて、ハルを新たに含めたカイたちは、旅へと出発する。そんな様子を、モンドは見送っていた。

「しかし・・・あのカイという者は何者じゃ？」

彼の特殊能力。それは、その人の強さをオーラのような形で目視できる能力だ。それを使って、マイヤとレイナの強さを知ることができた。だが、どうやってもカイの強さを知ることができなかった。

「全く戦えない・・・訳ではない。となると、隠しているか・・・」

大きすぎて識別できないか、のどちらかだ。どちらかは、分からない。ただ、どちらにしてもかなりの実力者だということには変わりなかった。

そして、それなら大切な孫を安心して預けることができる。そう納得して、モンドも校長室へと戻っていった。

4章 く擬似禁術と新しい仲間く（後書き）

どうもです。

最近、物を失くしたり落したりが多いです。

祭りでは焼き鳥と焼き蕎麦、フランクフルトを落とす、

出掛けた先ではmicrossdを失くし、その日は特別に必要な筆記用具をなくし・・・はあ。

・・・あ、すいません。愚痴になりましたね

「お前の管理がなつてないからだろぅが」

相変わらず手厳しいですね・・・

「こんなだらしがないのが自分の作者だと結構凹むぞ」

私もマジで凹んでるんで言わないで下さい・・・

「・・・すまんかった」

と、いうわけで、今回はキャラ説明を入れさせていただきます。

「どういうわけだよ!？」

では、次回また会いましょう!!

番外編 くキャラ紹介と少しネタばれく（前書き）

今回は名前を隠す作業を多数行っており、見づらくなっております。予めご了承ください。

番外編 くキャラ紹介と少しネタばれく

カイ「ストール」レッド

種族：人間？

性別：男

特徴：この物語の主人公。高いところが苦手なほか、父との特訓地獄でのトラウマ以外は特に弱点がなさそうな人。年齢は25歳。身長は178cm。やや茶色が入った黒色の髪。目の色は左が赤色で右目が黒のオッドアイ。最近は緩和されつつあるが、孤独な雰囲気があつた。

能力：火・雷・爆発・闇・光の魔法のほかに、真・魔法剣・気術・極限式・結界術・？？？・？？？

武器：暁、真・魔法剣

その他：両親共に他界している。どういう育てられ方をしたか知らないが、強い。何者かに自由を奪われた・・・らしい。

一言：「何で俺だけ人間？なんだ！？」

レイナ「ロア

種族：ドワーフ

性別：女

特徴：小さい。外見は12歳くらいだが、実年齢は23歳。身長は148cm。髪の色は黒で、ストレートロング。目の色は濃い紫。誰にでも敬語を使う。主に4人の中ではツッコミ担当。

能力：火・氷・風・土・治癒・障壁・素・？？？

武器：弓、短剣

その他：実年齢を見て分かるように、一応成人はしている。背中には複雑な術式がある。封印系のものらしい。

一言：「私だけ種族が違うんですか？」

マイヤ＝ヘイト

種族：人間

性別：女

特徴：15歳の少女。身長は156cm。スレンダー。金髪のポニーテールで、目の色は空色。ちよっとお馬鹿で能天気で、明るさが取り得の子。

能力：気術のみ

武器：寒月・紅龍・虎蒼

その他：孤児院を襲撃されて、殺されかけたところをカイに助けられ、一緒に旅をしている。

一言：「ちよっとお馬鹿って何よ!？」

ハル＝グラデイス

種族：人間

性別：男

特徴：19歳の青年。身長は170cm。茶髪にローブを着ている。ややおどおどしがちだが、根はしっかりしている優しい子。

能力：黒魔法全部・合成魔法

武器：槍

その他：孤児院が襲われる少し前に引き取られた男の子。最近、マイヤと再会を果たした。

一言：「僕の、なんか適当じゃない?」

『と、言う訳で、第一回ネタばれ含む！雑談会を開始します』

「我が作者ながら…」

「このアホらしさは何でしょうね？」

『まあ、気にしない方向で行きましょう。さて、この物語の基盤となった物ですが、F○です』

「……嘘でしょ？」

『残念ながら本当のことですね。ちなみに、F○5ですよ』

「たしか、S○CとP○とG○Aでありましたよね？ついでに作者が持っているのはS○FとP○ですね」

『……君は何でそんなことを知ってるのかな？ハル』

「気にしたら負けなんじゃないんですか？」

「……とりあえず話を進めようよ。その話を切り出したんなら何らかの目的があるんでしょう？」

『おや？意外と鋭いね、マイヤ。その通りだよ』

「で、実際のところどうなってるんだ？」

『うん。色々と参考にさせてもらったところがあるね。一番いい例は魔法じゃないかな』

「あ・・・ホントだ」

「もろパクりなのもありますね」

『まずは魔法から。これの設定はほぼそのまんま取り出したような気がしないでもない。ただ、どうやって魔法を発生させているのかとか、オリジナルの魔法や効果をつけてみたりした。』

「じゃあ、気術はどうなってるんだ？」

『魔法があるんなら気を使った術があっても大丈夫だろうと思って、簡単に色々と考えて作ってみた。ちなみに、極限式は5のアビ。テイ、『調合』から取った物だよ』

「へえ、そうなってるんですか・・・」

『次に魔法剣と真・魔法剣。魔法剣はそのまんま。真・魔法剣は【魔○陣グ○グ○】の《光魔法キ○キ○》を参考にした』

「また別の作品を・・・」

「わかる人がいるかなあ・・・」

『次、結界術。これは結界師を参考にしたわけではない。むしろこれはオリジナルに限りなく近いんだ。まず、どうやって思いついたか。これは簡単な話で、疑問に思ったことがあったから』

「どんな？」

『F。5の世界でのことだけど、夜寝ている間はどうかやって身を守っているんだろう?』と思ったのが始まり。そこで、ふと洞窟の中に結界っぽい(セーブポイント)があったから。それで、「結界で身を守ってるんだ!!」とか思い込んでるわけです』

「それ・・・こじ付けだろ・・・」

『だから、気にしちゃいけないんですって。で、どうせなら【ドラ。もん】の《四次。ポ。ツト》みたいなのが欲しいな、みたいなノリでそんなのを作ってみたり』

「呆れすぎて何も言えないですね・・・」

『次に、君達の参考にしたのもF。5からだよ。まず、カイはバ。ツ』

「」「似てなっ!!」「」

「認めるが・・・声を合わせてまで言うことか?」

『昔から旅をしている、高いところが苦手、両親がいない、それとなくだけど仲間思いな所が主だね。ただ、君は彼と違って目立ってるからね。安心したほうがいい』

「それもそうだな」

「影が薄いだと！？なめんなコラアアアア！！」

「ちょっと、落ち着いてよ！」

「うつせえな！酒が呑めんだろうが！」

「ゲフウ！何すんだよ！？」

「姉さん。それ、何か違う……。あ、お騒がせしました。失礼します」

「「「「「「「「「「「「」

「今のは……」

「あ、あたしに似てる人もいたよ……。？」

「茶髪とか、紫の髪とか・・・」

「あの人たちって、もしかして・・・」

『皆、それ以上言ったりしちゃう駄目だよ?』

「まあ・・・そうでしょうか」

『次に、レイナ。君は。ナさんですね。タ。クー。の第2王女の』

「それって、どの辺りがですか?」

『雰囲気とかなんとなく似せてみたんだけど・・・駄目?』

「まあ、いいんじゃないの?」

「マイヤが答えることじゃないと思うよ」

『さて、次はマイヤ。ク。ルだね。君の名前は名前も拝借したよ』

「たしかク。ル。マイヤ。バル。シ。ンだったよね。おじいちゃん
がいたはずだけど?」

『出番ナシ!-!』

「なんか、かわいそうだな・・・」

『最後にハル。君は。ドだね』

「彼ですか・・・さっきの中にはいませんでしたよね」

「その話はもうしちゃ駄目ですよ」

「すみません・・・」

『うん、いなかったね。ちなみに、紫の髪の人もこの小説では未登場だったね』

「出番もらえないのって辛いんだろうな・・・」

「きつと、そうだよ・・・」

『と、これくらいが話すことだけど、他にある?』

「これから先の展開は?」

『もともとこの小説は序章と終章を合わせて10章の構成だから、大体今が半分くらいなんだよね。これからは今まで隠していたことを暴くことをオンパレード・・・かな?』

「実際、ノートにはもう7章を書き始めてるからな。早めに投稿してくれよ」

『頑張つてはみるよ』

「とりあえず、私たちはそろそろ戻らないと・・・」

「そつだな。そんなにゆっくりしてられない」

「じゃね、闇桜♪」

「また何かあったら呼んでください。感想とか」

『そういえば、ハルが一番出番少ないんだよね』

「そうなんですよ・・・」

『わかった。考慮しておくよ』

「ありがとうございます!」

「時間だ。ハル、行くぞ」

「え? あ、はい!」

『じゃね』

『ふう、行っちゃったか・・・』

この部屋に残っているのは私一人。さて、私もそろそろ寝ますかな♪

では、質問があつたらネタばれし過ぎない程度に受け付けますので、遠慮なく宜しく願いします

番外編 くキャラ紹介と少しネタばれく（後書き）

今回はいちいち名前を隠したりする作業がめんどくさかったし、自分で見ても見づらいと思いました。
では、

超番外！ Chatter with friend in casual f

今回の話はdouter先生のお暇書き！(http://ncode.syosetu.com/n3436e/)との合同作品です♪

そちらにもほぼどう内容のものが投稿されていますが、ご了承ください。

『さあやって参りました！ 遂に実現したお茶会！ いやー無駄にテンション高いです！』

「doubterお前、ちょい騒がしくない？」

『だって楽しみだったんだもん』

「わーい、オヤツだお茶会だ大騒ぎだー」

『優ちゃんも元気だねー。ナイス！！』

「はあ。僕は今回この2人の管理をしなきゃいけないのか」

『まあ、気にせずに。さて皆さん声を揃えて』

「『『お邪魔します』』」

『こら！ つまみ食いをするな！！ ……あ、いらっしやい。
3人とも』

「お菓子♪ お菓子♪」

「お久しぶりですね」

「……既にこつちも異常にテンション高いじゃん」

「わーい、美味しそー。ねえねえ食べていい？」

『優ちゃん、流石にあいさつが先だよ。ども、お呼びいただき
ありがとうございますー』

『この空間では時間を気にしないででもすむからね。夢のような
ものだと思つてた方がいいよ』

「……この空間にいい思い出がないんですけど」

「あたしも……かなあ？」

『あー、ねえ今は山田さん出てこないよね？』

「うん？誰だ、それ？」

「良い匂いだなー」

『優ちゃん、一人完全に空気無視しないでよ！』

『彼は出てこないよ』

「優ちゃん、どっちがたくさん食べれるか競争しよう！」

「マイヤちゃんになんて負けないんだからね！」

「ここに来れるのは私たちだけみたいです。カイさんとハル
さんは気付いてすらいらないようです。……マイヤさん、優さん。い
くら無くならないからって、おなかを壊さない程度にしてください
よ」

「おーい、そんなに急いで食べたなら「ゴホッゴホッ」ほら見る。レイナちゃんさ、マイヤちゃんも普段からあんな感じなのかい？」

「はい。私たちは旅の途中で使う食材の半分は彼女の胃の中に入っていきますよ」

「そりゃ恐ろしいな。と言うか、食費とか大変じゃない？」

「カイさんが稼いだお金の大半が食費に消えて……。普通なら移動は馬車みたいなのもあるんですけど、借りるお金がないんです」

「案外ギリギリの経済状況なんだな」

『いや、良かったよ。本当に』

『呼べなくはないけど……呼ぶ？　ってマイヤ！　水！』

「ごほっ！　ごふうっ！！　……うん。クッキーを頬張りすぎたね。気をつけなきゃ」

『全力で遠慮します！　っておーい、優ちゃん大丈夫？　涙目になってるよ？』

「はあ、クッキーが喉に張り付いて死ぬかと思ったー」

『どんな死に方だよ』

『そーいえばさ、優ちゃんとレイナの身長はさして変わらないような気が……』

「見た感じの年齢も対して変わらないよね」

「ほつといてください……」

「あ、本当だー！えへへ。ねえねえ、こうして肩組むと姉妹みたいじゃない？」

『……ま、まあ、レイナさんは若く見えるって事じゃないかな？』

「種族の差ですよ。どーせ小さいですよ」

『あーあ。レイナがいじけちゃったよ。まあ、放つところ』

『放っておいていいの！？』

「まあまあ、レイナちゃん。クッキーあげるから元気出してよ」

『優ちゃん、それ元からマイヤさん達のだからね』

『うん。そのうち立ち直るから。ちなみに、材料費は気にしないでいいよ』

「お金の話に戻るけど、最近はおたしたちも稼いでるから余裕が出てきたんだけどねえ」

「へえー。でもまた食費に消えるんだろ（笑）まあ、ウチも似たようなものだけだ」

「レイナは……もう立ち直ったみたいだね」

「まあ、確かにそのだいたいも食費に消えちゃうんですけどね…。やはり、それは共通なんですね」

「二人ともなんかわたし達を馬鹿にしてない？」

「気のせいだろ。と言うか、レイナちゃん案外タフだな」

『立ち直りはやつ!!』

『それは気のせいだよ』

「そつえばさ、2人とも刀とか持ったことある？」

「ふつうはないと思いますよ……。見たこともないんじゃないですか？ たしか、銃刀法違反とかいうルールがありましたよね」

『いや、違うと思う…』

「僕は一応。近代兵器から刀まで一通りね」

「わたしも包丁なら使った事あるよー!」

『それ、微妙に違うから』

「そちらは普通の武器以外に何か使えるの？」

『こっちはいろんな武器があるよ。そっちのミサイルとかはないけど、その分魔法があるから』

「へえ、裕一は刀持ったことあるんだ。……稽古付けて上げようか？」

「うーん、一応は扱えるんだけど暫く使ってないからな」

「あ、それいいですね。護身術は身につけていた方がいいですよ。優さんには魔法を教えましょうか？」

「魔法！？すごい！わたしも使えるの？」

『ここで補足だけど、調理道具は基本的に変わらないよ。少し形が違ったりするけど』

『裕一君の方はともかく、優ちゃんはやめとくよ。暴走されても困るし』

「えー、やだやだ。絶対やる。やりたいよー、マイヤちゃん教えてくれない？」

「あたしが教えられるのは気術だけだからなあ……。レイナに教えてもらって？」

「裕一さんはマイヤさんに聞けば効率的な動き方を教えてもらえるはずですから」

『うちのマイヤもね。まさか、魔物の肉を使うとは思わなかったよ』

「うつさいなあ。じゃ、向こう行こっか、裕一。刀だけじゃなくて裕一が得意な獲物の使い方を教えて上げるよ！……その代わ

り、料理教えて？」

「優さんも行きましようか。教える代わりに、そちらの世界のこと、いっぱい話してくださいね」

『あゝあ。行っちゃったよ。知らないぞ』

『別にいいけど。…きっと裕一君とレイナさんはボロボロになつて戻つて来ると思うよ？』

『まあ、二人とも何とかなるでしょ？』

『じゃあ今日はこれにてお開きかな？みんな行っちゃったし』

『どうせなら待ってみようよ。案外楽しい結果に終わるかもよ？』

『…だと良いけどね』

一時間後……

『あ、帰ってきた。……予想道理だね』

「はあはあはあ。し、死ぬ」

「裕一。あんたは投擲に向いてたね。こんなに早く10本同時に投げられるようになるとは思わなかったよ」

「つ、疲れました……。まさか、あそこまでできるとは思いませんでしたよ」

「いえーい！なんかまだまだいけそうだよ！あれ裕一、どうしたの？」

『ん。どうやら双方とも並以上の才能があつたみたいだね』

「あれはそれどころじゃないですよ！」

『なんかもの凄い鍛えてもらつたみたいだね――』

「はあはあ、すまん。料理を教えるのはまたの機会でもいいか？体が動かなくて」

「むう。裕一に無視された」

『裕一とレイナ、二人ともずいぶん疲れてる&傷だらけみたいだね』

「私は障壁があつたからなんとか避けられましたけど……」

「あ、そうだ。優ちゃん。耳貸して……」「ゴニョゴニョ……」

「マイヤちゃんって本当に人間かよ……」

「カイ兄から教わってればね……」

『すごい言い様だな。かなり参ってるみたいだねえ。うん？優ちゃん何やってるの？』

『おや？おもしろそうなことをやるんだね』

「聞いてたの！？」

『うん。でも、まあいいでしょ』

「わーい。……雷の神ゼウスよ、彼の者に裁きの雷を。キルライトニングー！」

ズガンー！！！！

「って、何やってるんですかあ！？」

「doubterと、ついでにさつき無視した裕一に雷の最上級魔法使ったの」

『あつはつは。爽快だねえ』

「見てて飽きないよねえ」

「あの二人は無事なんでしょうか？」

「「『さあ？』」」

「さあ？ って……」

『……………ゴホツゴホツ。あの僕は一応この中じゃ唯一の一般人なんですけど』

「いや、やっぱり変な事優に教えさすものじゃないな」

『なんで無事なのさ!?!』

「いや、さっき力尽きて落としたナイフが避雷針になってね。でも近かったから多少痺れた」

『てか、なんで僕は狙われたんだ!?!』

「裕一、それ、判断不足。あの雷は魔力で作られたもの。避雷針の意味はないよ。今回はそのナイフがdoubterの近くに転がったのと、標的が本来doubterだっただけ。やり直し。こっち来い」

『まあ、そういうこと。裕一はまたマイヤに引きずられてつちやったね。ちなみに、doubterが死ななかった理由はこの空間がそういう設定になってるからだよ』

「いや、僕は魔法なんて知らねえよおお!!」

「あー、すっきりした!裕一まだ頑張るんだねー。いつてらっしやい!」

「逆に言えばやりたい放題ですか?」

『うん』

『…鬼だな、ホントに』（後で裕一君とどこかで愚痴ろうかな）

「愚痴は適度に吐き出さないとストレスで胃潰瘍になりますからね。その方が得策ですよ」

『最近、人を鍛えることにはまってるらしいよ』

『いや、それ明らかに鍛える事が目的じゃないでしょ』

「うーん、なんか疲れちゃった」

『優ちゃんが疲れたのはまだ魔法を使うのになれてないからだと思うよ』

「それは置いといて。doubterさん。そちらはどうなんでしょうか？」

『置いといてって……。まあ、いいか』

『うーん、本当は裕一君に話してもらおうと思ったんだけど今回は優ちゃんでもいいかな』

「《で》ってひどーい。みゅー、あ！そういえばこの間の授業参観でね、先生と裕一が口喧嘩し始めて1時間潰れたんだよ！」

『ほう？　口喧嘩で1時間。それは授業中かい？』

「そう！突然ってほどじゃないけど授業中にね！もうクラスみんなでビックリだよ」
「！」

『よかったね。授業がつぶれて』

「よくないですよ!?! ……と、言いたいところですが今回は賛成ですね。よかったじゃないですか」

「でも少し恥ずかしかったかなー。あ、裕一! お帰りー」

『さっきよりも随分お疲れだね』

「……もう…無理…」

「ありゃ。倒れちゃった」

『あはは。倒れちゃったよ。レイナ』

「わかってますよ。……ヒーリング、クーラー!」

『疲労と傷は回復したし、すぐに目を覚ますよ。放つといて先に進もう』

「確かに恥ずかしいですよね……。ああ、そうでした。マイヤさんにはまだ話してなかったですよね」

「もう闇桜から聞いたよ。優ちゃん、そういうときはしっかりお仕置きしないと…ね?」

『あの一、マイヤさん眼が怖いんですけど!?!』

「それいいね! うふふー、どれにしようかなー」

「う、うーん。やっぱり倒れちゃったか。ん？なんでみんなで僕を見てるの？」

『気にしちゃいけないよ、裕一くん』

「まあ、それなら許せますね」

「じゃ、次にいく？ これは本人がいないときにやるのが一番楽しいからね」

「…いや、なんかもう勘弁してください」

『ずいぶんぐつたりだね』

「ねえねえ2人共。どうしたらいいと思う？」

「やっぱりお菓子食べ対決！」

『……それはやめなさい』

「ケーキならいいんですけどねえ…」

『そつち！？』

「うん、じゃあ今度はケーキで勝負だ！！」

「それなら体力使わないし、僕は結構甘党だからそれでもいいよ。あ、闇桜とdoubterも強制ね」

『チーズケーキなら受けて立ちますよ』

「あたしはシヨコラ！」

「じゃあ……モンブランで」

「どれにしようかな」 じゃあわたしはやっぱりシヨートケーキで！」

「僕はそうだな…このタルトかな」

『みんなやる気だねー。でも、全員参加となると書き手がいなくなるから今回はここまで』 では皆さん、せーの』

「「「「「いただきます！」「」「」「」

因みに、暫く後に全員が腹痛に悶えていたのは言うまでもありません。とさ」

超番外！ Chatter with friend in casual f

どうもです。

今回は合同製作ということで、多少会話の前後に不具合がありました。以後、このようなことがないように気をつけていきたいと思ひます。

これから、この小説をよろしくお願ひします。

5章 く誘拐く

リュテユウ、に着き、最初にやりたいことは依頼だった。現在、彼らは金が無いのである。その名の通り、一文無しである。

「何故盗まれた、マイヤ」

「ご、ごめんなさいい」

鬼のような、いや、鬼のほうがまだましな表情でマイヤを睨みつけている。止めようにも、止められなかった。

「何所で盗まれた？」

「武器屋で色々と買おうとしてる途中でやられたみたいです」

敬語。マイヤが敬語を使っている。その状況が、何よりも危険だということをし、レイナとハルは察した。彼女は、全くといっていいほど敬語を使わないのだ。

ついでに説明しておく、この町は武器の国だ。剣や槍といった武器の多くはこの国で生産されている。戦士の養成学校が多いのもこの国の一つの特徴だ。

「さて、この馬鹿の処罰はともかくとして、本気で金が無い。まずは、依頼を受けて金を稼ぐぞ」

「そうですね・・・2手に分かれたほうが効率がいいんじゃないんですか？ 師匠」

その提案に、レイナも頷いていた。約1名は震えて返事をしていなかったが、多数決によりこの案は可決された。

「なら、俺一人と、ハルたちのチームに分かれよう。いいか？」

2人とも了解をした。だが、やはり1名だけは話を聞いていなかった。

怒りを込めた視線を送りながら、言葉を続ける。

「マイヤ」

「はいっ！ 精一杯頑張らせていただきます！！」

背をしっかりと伸ばしたの姿勢で、はっきりと宣言した。よほど、怖かったのだろう。

「なら、これからは各自で動いてくれ。じゃあな」

足早に去っていくカイ。おそらく、すぐに依頼所に向かったのだろう。

「・・・私たちも行きましょうか」

「そうですね。・・・なにしてるの？ マイヤ。師匠はもう行っちゃったよ？ 急ごうよ」

さっきの姿勢を保ったまま全身を震わせているマイヤを見ながら、急ぐように要求する。

その後、彼女は正気に戻り、まだ若干震えながらも、歩き始めた。

~~~~~

今回マイヤたちが選んだ依頼は、森にいる魔物の討伐だった。3人の実力でもなんとか可能で、尚且つ依頼の報酬が現金で、額が高いという理由から選んだのだ。

そして、現在彼女らは森で戦闘をしている真つ最中だった。

「何でこんなに数が多いのよ!!」

「そんなの知らないよ! 選んだのはマイヤでしょ!??」

「っ! フレイム!!」

現在も4体の魔物に囲まれている。今まで出てきた魔物はベアルやメンティだけだったが、森の中心部に近づくに連れて、植物の魔物も増えている。

「あたし、こんな魔物見たこと無いよ!」

カイと旅をしてきたマイヤは、様々な魔物を知っていた。もちろん森の中に入ったことも多い。今いるこの森にも入ったことがある。だが、この魔物を見たことがなかった。以前はこんな魔物はいなかったし、そもそもこんな魔物を見たことが無かったのだ。

故に彼女は戸惑い、焦っている。

「2人はなるべく魔法を使わないで！ 全部やるから、いざというときまで残しといて！！」

彼女の焦る理由はそれだけではなかった。先程の自分の失態。これで依頼を失敗して帰った日には、もう二度と朝日を拝むことはできないだろう。それ故に、彼女は必死に戦った。

先に進む。それこそ止まることなく。丘に吹く一陣の風のように、素早く。

「そろそろこの森の中心部に着くよ。多分この植物たちの親玉がいると思うから気をつけて」

乱れている呼吸を整えながら、注意を施す。そして、再び走り出そうとする。だが・・・その前に、蠢く植物の形をした魔物に囲まれた。

「急いでるこんなときに・・・おとなしくしててよ！ 炎流陣！！」

紅龍のみをその手に持つて、勢いよく地面に突き刺す。すると、そこを中心に、地面から綺麗な円形を保った炎が燃え広がる。

炎が辺り一帯を植物ごと燃やしていた。

「氷流陣！」

炎の燃え広がる勢いが衰え、氷が同じように円形に広がっていく。やがて、炎は氷によって消され、辺りには燃やされた後に氷漬け

にされた植物の魔物だけが残っていた。

「ようやく片付いた。・・・でも、森の中心部に行くにつれてどんどんこの魔物が多くなってきた」

「多分・・・多分だけど、敵の指令塔が近いんだと思うよ。だから、それを守るために近づくほどに数が多くなる」

確かに道理だった。将を守るために、その周辺を兵士で固める。基本的な戦法だ。

「そうですね。じゃあ、ここからはもっと用心していきましょうか」

上手く敵を避けながらさらに奥へと進む。なるべく音を立てないように、でも、できるだけ早く。

そしてたどり着いたのは、この森の中心にある大木だ。3人の両手を広げて囲めないほどの幹の太さを持っている。

「・・・おかしい。昔来たときはここまで大きくなかった。他の木に比べたら少し大きかったけど、それでもこれだけの大きさをするものじゃない。つまり・・・」

森がざわめき始める。大木を中心に、異常なほどの速さで枝が伸びている。

「この大木が指令塔だよ！！」

判明した事実。そして、それと同時に下を除く全方位から木の枝が飛んできた。

「2人共。準備するからその間よろしく！ 流炎陣！！」

とりあえず自分たちに向かってきた木の枝を焼く。その後、紅龍を地面に刺し、マイヤは力を溜め始める。これから使う気術は特殊で、珍しく詠唱を必要とする。

「地獄の業火にて我に仇名すものを消し去りたまえ。クロスファ  
イア！！」

レイナとハルは同時に魔法を発動させ、ほぼ全範囲に魔法を張る。いままでこつこつ力を溜めてきていたので、暫くはこれでもつ。

そして、マイヤ。今は最も彼女が必死だった。普段より早く、そして一言一言に力をしっかりと込めて朗々と詠唱している。きっと、この依頼が失敗したときのカイの反応に恐怖しているだけであろうが。

「——— 汝の象徴は荒れ狂う怒り。鳥の姿となりて、その力を解き放ちたまえ！ 絶技、炎鳥降臨！！」

今、彼女の詠唱が終わり、その頭上に炎で身体ができている鳥が現れる。

1つ羽ばたく。辺りに熱風が生まれる。

このとき、何が起こるのかを理解したレイナがファイアウォールを張った。

2つ羽ばたく。熱風がさらに熱くなり、小さい草や花が燃え始めた。

3つ羽ばたく。火は炎となり、大木を除くその周囲の植物を燃やし始める。

そして――最後に大木に向かって突進をする。接触したかと思うと、勢いよく爆発した。

「まだ……………」

地面に刺した紅龍を鞘に収め、今度は虎蒼を刺す。

「集え大気。轟け鼓動。汝を具現するは我が気。我が声を聞き届け、我が願いに答えよ。氷の属性を持ちし剣を依り代にして、その姿を具現せよ」

辺りの熱気が消え、少し肌寒くなる。その冷機の発生源は虎蒼だった。

嫌な予感がしたレイナは、アイスウォールを張る。

「汝の象徴は無情な哀れみ。鳥の姿となりて、その力を解き放ちたまえ！ 絶技、氷鳥降臨！！」

虎蒼が消え、頭上に身体が氷でできている鳥が出現した。

そして、その翼を3振りして、さらにその後はその両翼から激しく冷機を送って、辺り一帯を凍結させてから消滅していった。

「最後……………」

虎蒼を収め、寒月をその手に持って止めの一撃を放つためにもう一度力を溜め始める。

ただ、そこで予想外の出来事が起こった。

レイナがいない。この場にいるはずのレイナが、どこかに消えてしまっていた。

「マイヤ！ レイナさんがいない！！」

「分かってるよ！ ……そこっ！！」

上空に向かって剣気を飛ばす。そこにあった人影は、ひらりとそれをかわした。

「ふむ……気付かれないように気配と魔力を殺していたが、それでも気付いていたか」

「あんたが隠してもレイナの魔力で場所が特定できるよ。……レイナを返せ」

地面に降り立った老人に、マイヤは構わず殺気を放つ。老人は特に臆した様子もなく、その手にはレイナが抱えられていた。

「この子を返す？ それは無理な話だ。この子は珍しいからね。そう易々と手放す気は無いよ」

「珍しい？ 馬鹿なこと言っていないで早く返せ」

「馬鹿は貴女ですよ、マイヤークルス。返してほしければ、カイーストール」レッドを連れてきなさい」

老人が石を地面に投げつける。すると、そこを中心に魔方陣が展開された。

「これを本人に見せなさい。すぐに理解するはずだ。それでは、待つてるよ」

光に包まれた老人は、次の瞬間にはそこから姿を消し去っていた。その場に残っているのは、マイヤとハル、それと老人が残っていた石だった。

急がなければならない。判断する材料は少ないが、恐らくあの老人は研究者だ。それも、かなり高度な技術を持った。

老人が残していった石をしっかりと握って、2人は森から町へと帰るために疾走を始めた。

## 5章 〱誘拐〱（後書き）

お久しぶりです。

しばらくスランプ状態に陥ってました。というか、今現在もです。

多分、今月中には何とかなるんで、それまでお待ち下さい。申し訳ございません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9805c/>

---

ただひたすらに自由を求めて

2010年10月30日09時00分発行